

転生したら海の悪霊？

ヨシフ書記長

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

よくある設定でONE PIECEの世界に転生して

あの海の悪霊になるお話

あのウネウネのね

目次

原作編（ルフィ世代）

プロローグ　忘れられた悪霊

1

憑依した悪霊

12

黒き箱は何処にありや？

31

原作開始前（0巻世代）

海の底からやってくる

55

転生

63

悪霊式乗組員集め

69

デイヴィー・バック・ファイト1

79

デイヴィー・バック・ファイト2

85

デイヴィー・バック・ファイト3

96

デイヴィー・バック・ファイト4

101

デイヴィー・バック・ファイト5

109

悪霊の爪痕1

116

悪霊の爪痕2

119

悪霊の爪痕3

124

悪霊の爪痕4

128

呪われた海賊船と2人の姉弟1

137

戦いに備えよ3	194	ライアーズ・ダイス	324
戦いに備えよ2	189	道化と赤髪の幽霊船探検	312
戦いに備えよ1	180	未来の大海賊達	304
172		少年の憧れ	287
呪われた海賊船と2人の姉弟6		海底へ……	274
165		最悪の再会	263
呪われた海賊船と2人の姉弟5		海の死神VS海の悪霊7	250
159		海の死神VS海の悪霊6	243
呪われた海賊船と2人の姉弟4		海の死神VS海の悪霊5	234
152		海の死神VS海の悪霊4	227
呪われた海賊船と2人の姉弟3		海の死神VS海の悪霊3	219
145		海の死神VS海の悪霊2	211
呪われた海賊船と2人の姉弟2		海の死神VS海の悪霊1	206

海賊王VS海の悪霊

堕ちた天竜人

ビッグニュース!

合成人間(ユニオン)

339

357

370

398

原作編（ルフィ世代）

プロローグ〈忘れられた悪霊〉

東の海イーストブルー ローグタウンで… 海賊王”ゴールド・ロジャーが処刑され、大海賊時代が始まった。

海賊人口は莫大的に増えた！ 栄光ある大海賊時代の闇に消されたある悪霊を世間は忘れてしまっていた…。

海軍本部〈マリルフォード〉

―海軍資料倉庫―

陽の射さない埃まみれの薄暗い大きな部屋には、大量の資料や箱がたくさん入った棚がズラリと並び…まるで海軍の歴史を象徴するかのような部屋だった。

「えーと…ボガードさんに頼まれた資料は…」

新米海兵のコビーは、ガープの副官であるボガードに頼まれ…ある資料を探しに資料倉庫で探し物をしていた。

「おい、コビー。ここちの棚にはなかったぜえ」

ヘルメツポはコビーに近づくと、棚に腰かけながらそう言った。

「ありがとう、ヘルメツポさん。次は向こうの棚見てきて貰えるかな？こっちは僕が見ておくから」

コビーは、にこやかに微笑みながらそう言った。ヘルメツポはそれを聞くと悪態をつきながらこう言った。

「へっ！よくもまあ…。こんだけの資料を取っておけるよなあ？整理もせずによォー！」

「そんな事言わないの、ヘルメツポさん。これらの資料だって世界平和の為には必要なんだから」

「そりゃあ…わかってるけどよォ？」

コビーの反論にヘルメツポはタジタジになりながら、コビーに指定された棚へと向かっていった。ヘルメツポは片手に持ったカンテラで棚を照らした。

「んーとお？B4…B4…ここか。んで、んだよく。1番上にありやがる。あんな高くに置いてどうすんだよー！」

ヘルメツポはまたも悪態をついたが、向こうの棚を見ているコビーに向かって叫んだ。

「おーい！コビー！少し来てくれえ！」

「ん？なんですかー？ヘルメツポさーん！」

「言われてた資料見つけどがよオー！一番上に置いてあつて届かねえんだー！」

「分かりましたー！すぐにそっちに行きますー！」

コビーは片手に持つていた資料をポケットに収めると、ヘルメツポの元へ走り出した。

「あれなんだがよー」

「うわっ！本当に高い所に置いてありますね！」

「チツ！グランドラインにいる連中は背丈がデカすぎんだよ」

ヘルメツポは小言を言いながら柵を見た。コビーは暫く周りを見渡すところ言った。

「梯子は…見当たりませんね…。仕方ありません！肩車しましょう！ヘルメツポさん
！」

「ええー！嫌だぜ！何が悲しくて男と肩車しなきゃならねえんだよ！」

「仕方ないでしょう？これも正義のためですよ！ヘルメツポさん！」

「チツ！仕方ねえなあ！」

コビーのキラキラした視線を受けると、ヘルメツポは悪態をつきながらも、渋々コビーの意見に従った。

「オラっ！早く乗れよ？」

ヘルメツポはコビーに背を向けながら、しゃがむとそう言った。

「ありがとうございます。ヘルメツポさん、よいしょつと…」

「よしつ！立つぞ！よつと！」

ヘルメツポはコビーを乗せたまま立ち上がった。コビーは少しふらつきながらも体を立て直すと、棚にある資料を見たが手が届かなかった。

「ヘルメツポさん！もう少し左です」

「チツ！なんだよオ！へいへい、わかりましたよオつと！」

ヘルメツポは少し左に動く。コビーは資料に手をかけようとした時。ふと…あることに気付いた。

「…？これは何でしょう？フジツポ…ですかね？」

フジツポは…確かにコビー達からすれば見慣れた物だが…。このような場所にあるのは異様だった…。しかもそのフジツポは…死んでおらず、ウゾウゾと触手を出したり引つ込めたりしていた。

「おい！コビー！何をグズグズしてんだよ！資料は取れたのか？」

「あつ…はっ！はい！待って下さい！すぐ取ります！」

「まだ取ってなかったのかよ！早くしろよ！」

ヘルメツポの声にコビーは我に返ると、フジツポから目を離して

慌ててコビーは資料に手を伸ばして取ろうとすると…。体制を崩しグラ付き始めた。

「おい！コビー！急に動くなよ！」

「そんな事言つたつて……よしっ！取れました！」

コビーはなんとか資料を手を取れたが、そのせいで更に重心が崩れた。

「やつ……やべえ！コケちまう！」

「うわわ！」

肩車をしていた2人は柵に激突すると、老朽化していた柵はその衝撃でコビー達の方に倒れてきた！

『わああああー！』

ドスンっという音とともに……もうもうと巻あがった埃が辺りに充満した。2人は柵と大量の資料にやられて気絶してしまった。

「いつつ……！痛てえ……。このボロ柵め！倒れてくるとはよオ！」

コビーより早く目を覚ましたヘルメツポは、悪態をつくるとムクリと起き上がった。もうもうと舞う埃軽く咳き込みながらも辺りを見渡した。ふと……ある箱が目に入った……。

それは宝箱の様にも見えた。しかし、何故か何年も海中に、放置でもされたかのよう……ボロボロになっていた。

それを見たヘルメツポは何気なしにその箱を自分の方に引き寄せた。その箱には金属板に打ち込まれた文字が書いてあった。

「死者の宝箱…？へっ！何だこりやあ？こんなびつくり箱まで資料かよ！」
デッドマンズ・チェスト

ヘルメツポは鼻で笑いながら、何気なしに宝箱を開けた…。

すると、突然！

「!!」

宝箱の中から黒い煙のような物が吹き出した！

それを浴びたヘルメツポは、一瞬…！恐怖を顔に浮かべたが…声を上げる間にまるで糸の切れた操り人形のように意識を手放してしまった…。

ガララつと音を立て瓦礫の中からコビーは起き上がった。

「痛たたた…。まさか倒れるなんて…。そーそうだ！ヘルメツポさんは!」

慌ててヘルメツポを探した。すると、此方に背を向けて…力無く座り込むヘルメツポの姿があった。

「ヘルメツポさん！無事ですか？怪我は？」

コビーはそうヘルメツポに問うが、返事はかえってこない。

「何処か…怪我したんですか？ねえ！返事して下さいよ！ヘルメツポさん！」

コビーは立ち上がると、慌ててヘルメツポに近づくと前に回り込んだ。

「ヘルメツポ…さん…？」

ヘルメツポは何やら箱を抱えたまま、俯いていた。

「だ…大丈夫…ですか？」

ヘルメツポの肩に手を掛けようとした瞬間、ガシツと手を掴まれた。

「へ…ヘルメツポさん…？」

ヘルメツポは音もなく立ち上がると、俯いたままコビーの前に立ち塞がった。

すると、ヘルメツポが持っている箱から不思議なメロディが流れ始めた。それが更に不気味さに拍車をかけた。

「ヘルメツポ…さん…ふざけない下さいよ！笑えませんよ！聞いてます？」

コビーは苦笑いを口に浮かべながらそう言った。すると、俯いていたヘルメツポは顔を急に上げた。

「ああ…。すまねえ、頭をうったみたいでな…。少し意識がぼんやりしてたんだ。悪かったな、コビー」

ヘルメツポは少し口に笑みを浮かべながらそう言った。

「探してた資料…見つけといたぜ？」

ヘルメツポはコビーに資料を差し出した。

「あつ…ありがとうございます…」

コビーは資料を受け取ったが、ヘルメツポの顔を凝視した。

「ん？どうかしたか？コビー？」

「いっ…いえ、なんでもないですよ。ヘルメツポさん」

「そうか…。なら早くここを片付けて…ガープさんとここに戻ろうぜ？」

「はっ、はいい！」

コビーはヘルメツポの言葉に頷くと、散らかっている周りを掃除し始めた。

片付け終えたコビーはガープのいる部屋に向かった。部屋の前に立つとコビーは言った。

「失礼します！頼まれていた資料をお持ちしました！」

「おう！入れ！」

中からの返事返つてくると、襖を開け中に入った。ガープに資料を渡すとガープはこう言った。

「偉く時間がかかったのう。コビー」

「えっ…ええ。すみません。柵を倒してしまいました…」

「ワツハツハツハ！そうか！それで？ヘルメツポはどうしたんじや？」

「頭を打つたらしく医務室に…」

「なんだ！軟弱じやのう！もつと鍛えてやろうかあ？」

「ハハハ…」

「なんじや？元気がないのお？コビー？何かあったのか？」

「実は…。ヘルメツポさんなんですけど…なんか変なんです！」

「変？」

「ええ…。何だか…いつもとは何処と無く違うような…。外見はいつもと同じなのに、中身だけ違うような…」

「ワツハツハ！ただの気の所為じやろ？」

ガープは笑いながら、煎餅をバリバリと食べ始めた。

「僕が目覚ました時に、ヘルメツポさんがある箱を抱えていたんです！」

「箱じやと？」

「ええ…。確か…箱には」デッドマンズ・チエスト「死者の宝箱」って書いてありました…」

コビーがそう言い終える間に、何か割れる音が聞こえた。コビーがその音のなった方を見ると、ガープが湯呑みを粉々に砕いていた。

”デッドマンズ・チエスト死者の宝箱」じやと…？」

ガープは睨むようにコビーを見た。コビーは戦々恐々しながらこう言った。

「いっ…一応…。その箱の中に入ってたのがこれです」

コビーがそう言って差し出したのは古びた手配書とオルゴールだった…。ガープは眉間に皺を寄せながらこう言った。

「見たのか？これを？」

「い、いや…」

「はつきり答えんか！バカモン！」

ガープの怒声にコビーはビシツと敬礼をしながらこう言った。

「はっ！見ました！手配書はそのオルゴールの中にあつて！でも、ガープさん！ここに写ってるのは一体誰なんですか？賞金額は滲んで読めませんけど…」

コビーの言葉にガープは少し黙るところこう言った。

「他言するんじゃないぞ…。いいな？」

「はっ、はい！」

「今から…35年程。昔の話じゃ…。まだロジャーが海賊王では無かったあの時代…。あの男は忽然と海に現れよった」

ガープは襖を開けると、外は今にも嵐の来そうな気配がする空模様だった。強い海風が部屋に流れ込み、積んであつた書類が舞った。

「やつの名は…デイヴィー・ジョーンズ…。かつて…海の悪霊」として恐れられ…今の四皇にも引けを取らん海賊団を率い、この海を暴れ回った男じゃ…」

ガーブがそう言うのと、オルゴールがひとりで不気味な曲を奏で始めるのだった…。

憑依した悪霊

開け放たれた襖からは、どんよりと雲行きが悪くなった空が見える…。センゴクは
ガープからの報告を聞いて頭を抱えながらも…。

「おい」

「ハッ！」

近くに居た将校にある事を耳打ちすると、そいつは慌てて部屋から出ていった。

そして、センゴクは椅子から立ち上がると歯を軋ませた。

（奴が…復活したとでも言うのか…！）

眉間に皺を寄せながら、怒りで体を震わせるセンゴク…。

（しかし…！奴の肉体などもはやこの世には無い！甦ろうとも何も出来んはず…！ま、まさか！奴は…！）

センゴクが目をカツと開くと外で雷が落ちたのだった。

一方…海軍本部の中にある客間

その部屋の真ん中に置かれた机を挟み、ある男2人が座っていた。

しかし、片方の男は不機嫌そう、目の前に座る男を睨みながらこう言った。

「なんで、てめえが……ここに居やがるんだア？ドフラミンゴお？」

王下七武海の一人……ゲッコー・モリアはドフラミンゴを見ながら、机に置かれたケーキを一掴みすると口に運んだ。

「フフフフ……そりゃあ……こつちのセリフだけ……？モリア？お前は、魔の三角地帯から出てこないハズの……引きこもりじゃねえか？」

ドフラミンゴは挑発気味にそう笑うと、机にあつた飴を口に運ぶと酒を口に流し込む。

「ケッ！センゴクがこの俺に連絡を寄越しやがったのさ！緊急の話があるってな！お前の方こそ、珍しいじゃねえか？天下の”天夜叉”様の癖に……。なあに、真面目に来てんだよ！」

モリアの言葉にドフラミンゴは不敵に笑うとこう言った。

「フフフフ……別に！ドレスローザに居ても暇だっただからなあ？面白そうな話だから……顔を出しただけさ！」

「へっ！そうかよ！それにしても七武海は俺達だけ呼び出したみたいだな……？何の話だ？」

「フフフフ……もしかすると、アンタを七武海から降ろす話かもしれねえぞ？モリア

？」

ドフラミンゴの言葉に：目の前に座っていたモリアはブチ切れた！

「テメエ！誰にそんな口を聞きやがる！七武海の中で一番！政府の野郎に貢献してんのは俺だ！テメエの様に裏でコソコソしてる様な事はしてねえ！今、テメエを殺してゾンビにしてやろうかあ！」

「フフフフフ…！やってみなよお…」

その言葉に目の前の机を蹴り飛ばし、怒り心頭のモリアは立ち上がった！ドフラミンゴは机を避けると…ひっくり返った椅子に片足を置きながら構えた。

「ブリック・パット欠片蝙蝠！」

「フフフフフ…！ゴシキート五色糸！」

あわや、2人が激突しかけたその時…！2人の人物がその間に割って入った！

「おやおやく？あんたら、海軍本部を壊す気かい？」

「ドフラミンゴ…。アンタ、洗われたいかい？」

モリアの目の前には、「海軍大将」黄猿が立ち塞がった。ドフラミンゴの前には、「大参謀 おつるが立っていた。モリアは手を下ろすところと言った。

「ケツ！命拾いしたな！フラミンゴ野郎オ！」

「フフフフフ…！お前もなあ？モリア？」

「これ！おやめ！ドフラミンゴ、いい子にしな！」

「フフフ…!! やつぱり、おつるさん…あんたにやあ敵わねえ…！フフフフフ…！」

ドフラミンゴは椅子に座り直した。モリアは怒りが収まらないのか…外に向かつて歩き出すと、襖の近くにいた海兵を睨みつけこう言った。

「何見てやがんだ！影でも取られてえのか！」

海兵をつかみあげ横に投げ飛ばすと、襖を開けた！

「何処へ行く気だ…い？ゲツコ…モリア？」

「便所だよ！帰るとでも思ってたのか！この大嵐の中を！」

モリアは黄猿に外の天気を指さすと、そこはまるでバケツをひっくり返したような大雨と凄いい勢いの風が吹き荒れていた。モリアは襖を乱暴に閉めると、近くに居た海兵の案内でトイレへと向かった…。

廊下は風のせい…電気が着いているにも関わらず、薄暗く…。所々…雨が漏っているのか…バケツやタライが置かれていた。それでなのか…大工姿の男達が沢山彷徨っていた。

「ケツ…いつか、あのフラミンゴ野郎を殺してやる！」

モリアはそう息巻きながら、トイレへと向かった。トイレの前の廊下は…先ほどまでの人がウソのように全くおらず、逆に風でガタガタと音を立てる窓ガラスの音だけが響

いていた。

「キシキシ！スリラーバーク顔負けだな！」

モリアはそう言ってトイレの中へ入ると……。薄暗いトイレの中で一人の海兵が掃除をしていた。

「テメエ！掃除してんのなら、入口に立て札を立てやがれ！」

モリアは目の前で掃除をしている海兵に向かって、怒鳴りつけた。しかし、その海兵はまるで何も聞こえてないかの様に、モップで床を掃除していた。

「おい！何無視してやがんだ！テメエ！」

モリアがその海兵を掴み、無理矢理こちらに向かせた！

しかし、その海兵の顔を見て：モリアは次の瞬間：！言葉を失った！

「……テ……メエ……」

その海兵の顔には：フジツボやカメノテ等の生物達がビツシリと、引っ付いており蠢いていた。顔色はまるで水死体のように白く濁った様な色合いになっており、目の焦点も合っていないかった……。

「ゴボゴボ……ゴボオツ！」

その海兵は急に口から水を吐き出し始めると、そのままバタリと倒れた。それを見たモリアは冷や汗かくと、その倒れた海兵を鷲掴み！先程の客間へと慌てて戻り！勢いよ

く襖を開けた！

「やつと帰ってきたか…モリア」

客間には先程まで居なかったセンゴクがいた。モリアはさっきの海兵をセンゴクたちの前に投げるとこう言った！

「おい…こりやあどういう事だ！センゴク！俺に何を隠してやがる！」

センゴクは海兵の顔を見ると、苦虫を噛み潰した様な顔を浮かべながら、怒りの籠った声で言った。

「とうとう…！出てしまったか…！」

「フフフフ…？何の事だ？センゴク？」

ドフラミンゴは横に立つと、少し面白そうにこう言った。

「お前ら、2人を海軍本部に呼んだのはこれに関係した話をする為だったのだ…！」

「その事を早く話やがれ！」

センゴクという言葉にモリアは苛立ちを顔にしながらそう言った。だが、センゴクはそれを止めた。

「いや、話す前にまだ来ておらんヤツらがいる…」

センゴクがそう言うと、襖が勢いよく開け放たれた！

「おー、おー！遅れてしまんの？センゴク」

「また遅刻だぞ！ガープ！」

センゴクは、入ってきたガープを怒鳴りつけると、また周りを見渡しこう言った。

「さて、大体は揃ったな…。さて…本題に入ろうか」

センゴクは手に力を入れながら、俯きながらこう言った。

「奴が…甦ろうとしているのだ！ヤツ…！あの…」海の悪霊「が！」

センゴクのその言葉に…！一瞬にして…その場の空気が凍りついた！

ドフラミンゴは、先程までのうすら笑みが消えた。おつるは目を見開き、黄猿は驚いたように眉を上げた。ガープは少し顔を顰めた。

「そりゃあ…何の冗談だ…？アイツは…死んだと言ったのはあ…？他でもねえ…アンタだぞ？」

ドフラミンゴは眉間に血管を浮き立たせると、センゴクに詰め寄った。

「確かに…奴の死を見届け、死体も確認したのは私だ…！しかし！ヤツは…！ジョーンズが何も保険もなしに！みすみす死ぬとは思えん！そうだろう！モリア！」

センゴクに話を振られたモリアは俯き、齒をガチガチと鳴らしていた。

「貴様は！ルーキー時代に！奴の船に乗っていたのだから！」

センゴクの言葉にドフラミンゴはモリアの方を見た。

「おい、何か言えよお？話が振られてるだろ？モリア？」

「キシ…。キイー！シシシシシシシシシシシシシシシシシ！キシシシシシシシシシシシ！」
モリアは狂ったように笑い始めた！

その異様な光景を見て、センゴク達はたじろいだ。

「モリア…。貴様…。何か知っていたのか！」

センゴクはそう言うと、モリアに少し詰寄る！しかし、モリヤは急に笑うのを止めるとこう言った。

「ああ…。船長が戻って来ただつて…。？キイシシシシシシ！そいつア…。！良い悪夢だ！

キイシシシシシシシ！」

モリアの言葉に苛立ったセンゴクはこう言った！

「貴様！知っている事を話せ！ヤツは！ジョーンズは何を…。！」

センゴクがモリアに掴みかかろうとした瞬間！

「失礼します！センゴク元帥…。！」

「…。！通せ！」

慌てて近づいてきた海兵が、センゴクへある事を耳打ちをした。センゴクはその海兵にそう命令すると襖が開けられた！

そこには、コビーと鎖で縛られたヘルメツポが立っていた。

「コ、コビー新兵入ります！」

「…。ヘルメツポ新兵入ります」

コビーはこちらに向けられた視線に、オドオドしながらもそう言った。ヘルメツポは鎖で縛られているにも関わらず、部屋の中にいるセンゴクたちを見ながら淡々とそう言った。

ドフラミンゴは、コビー達を見るとセンゴクにこう言った。

「おい…あのガキ共は一体なんだ？」

センゴクはドフラミンゴの言葉に聞かずに、モリアを睨みながらこう言った。

「貴様が喋る気が無いのなら…！本人に答えてもらおう…！」

センゴクは鎖で縛られたヘルメツポを睨むとこう言った。

「お前は何を企んでいるのだ！」

センゴクが大声でそう言う…。ヘルメツポは俯くと急に笑い始めた！

「フツ！フツハツハツハア！」

「へ、ヘルメツポ…さん？」

「コビー！お前は離れとれ！」

コビーが様子のおかしいヘルメツポに近づこうと、するとガープがそれを制した。ヘルメツポは急に顔をセンゴクに向けるところ言った。

「よオ…センゴクウ？久しぶりだなあ？」

「やはり！貴様か！ジョーンズ！」

コビーは明らかに、ヘルメツポの声では無い事にギョツとして離れた。ジョーンズは部屋をゆつくり見渡すところ言った。

「それにイ……中々に懐かしい顔が沢山いるなあ？ガープにおつる、ボルサリーノ……それと……？おやおやおやあ……？」

ジョーンズはドフラミンゴを見ると、ニヤリと笑いながらこう言った。

「あの哀れな小僧じゃないか……？あの泣き虫は元気かあ？」

「……ツツ！」

ジョーンズの言葉にドフラミンゴは眉間に血管を浮き立たせた。

「久しぶりだぜ！船長！」

モリアがそう言うと、ジョーンズは体を揺らして向きを少し変えてモリアを見た。

「なあんだ……お前もいたのかあ、モリア！久しぶりだ……、所で俺が居なくなつて何年経つた？……んん？」

「キシキシ！15年さ？船長！」

「そんなにか！クツハツ！」

ジョーンズはモリアの言葉に笑つた。そして、また見渡すところ言った。

「それでえ？この俺に何を聞きたい？」仏のセンゴク”ウ……？わざわざあ……このガキの体

をこんなもんで縛りつけるぐらいだあ？よっぽど知りたいたいんだろう？」

ジョーンズは、自身であるヘルメツポの体を少し見るとそう言った。すると、センゴクは1歩足を進めこう言った。

「貴様は！何故生きている！いや？生きてはいないのか!？」

「フハツ！流石は”智将 仏のセンゴク”だ！そこに気づけるのかあ？」

センゴクの言葉をジョーンズは嘲るように笑うとそう言った。黄猿はそれを聞いて言った。

「おかしいねえ？確かにお前さんの死体はあゝ、キチンと確認されて葬られたはずだよオ？つまり、今のお前さんは一体なんだい？」

「本当に”悪霊”にでもなったのかい？」

黄猿に続くようにおつるはそう言う。すると、ジョーンズは口に笑みを浮かべながらこう言った。

「お前らは死んだ、死んだと言うがあ？何を確認して俺が死んだと思つたんだ？脈か？心音か？それとも瞳孔か？いやあ…？胴体から切り離された首か？」

センゴクはその言葉に遺体としてのジョーンズの姿を思い出した。

傷だらけの血塗れで首と体が離れ、心臓に突き刺さったレイピア…。あの状態を姿を…。しかし、ジョーンズはこう言った。

「確かにい…？ 肉体は死んだかもしれんがア…？ 俺は、悪霊！ 肉体が要らなければあ？ 捨てればいいだけの事だア」

その言葉にセンゴクは、驚いた様子を眼を開きながらもこう言った。

「肉体を捨てただと!？」

「その通り、俺はヤツ…。」海の死神」との戦いで肉体が滅びていくのがわかった…。ヤツが最後に手に入れたあの悪魔の実のせいだア！このままではと思い、うちの乗組員の能力で抜き出したんだよ！俺の魂なんかをなあ？ ほしい？ 海の死神」は伊達じゃなかったあ…。ヤツは最後の力で俺を「箱」に封印したのさ！ ほしい…？ それもどこかのマヌケが出してくれたがなあ？」

ジョーンズはコビーを見るとニヤリと笑う。センゴクは汗を垂らしながらこう言った。

「そ…そんな事が…!」

「それにイ？ 俺には心臓が無いぞオ？ 心臓にいくら剣を刺したぐらいでは俺は死なんよ？ 俺はア！ 海の悪霊」だぞ？ それぐらいの芸当は朝飯前に過ぎん！」

その言葉にさらに苦虫を潰したような顔になるセンゴク…！ それをしり目に、今まで黙っていたある男が、ジョーンズに向けて指先を向けると…。

「玉糸！」

ドフラミンゴの指先から、ものすごい速さで放たれた糸の弾丸はそのまま……！ジョーンズであるヘルメツポの眉間に当たる！

「ぬお？」

「ヘルメツポさん！」

当たったジョーンズは糸の切れたあやつり人形のように倒れ込んだ！それを見たコビーは慌ててヘルメツポの体に近づいた！それを見たセンゴクはドフラミンゴの方を慌てて見ると叫んだ！

「ドフラミンゴ！貴様！何をする！」

「フフフフ……話なんて聞くだけ無駄だア……さつさと殺しちまった方がいい……！口くちな事になりやしねえ……こいつだけはア……必ず俺の手で殺すと思つてたんだ……！だが、殺す前にこいつは死にやがった……！だが、人生何があるかわからねえもんだ！まさか本当に殺せる時が来るなんてなあ！フフフフ……！」

ドフラミンゴは狂喜しながらそう言った。コビーは起きてこないヘルメツポの体を揺すりながら涙を流す。

「ヘルメツポさん！しっかりしてください！ヘルメツポさん！目を覚まして！」

コビーがそうしていると、ヘルメツポの手がゆっくりと持ち上がった。その手を慌ててコビーは掴み握りしめると顔を見てこう言った。

「へ……ヘルメツポさん！」

「う……ん……！残念……！まだお前の友ではなく、この俺だア！」

そのままコビーを凄まじい力でジョーンズは吹き飛ばした！それを見たセンゴク達は驚きながらもジョーンズを睨みつけた。ジョーンズはゆつくりと起き上がり、口からあるものを吐き出す。

「昔の頃よりかは能力を上手く使えてるようで安心したぞお？小僧お？だが、話の途中でえ？攻撃をするとはあ、関心せんなあ？んん？」

糸の弾丸を自身の目の前で弄ぶとそう言った。

「お陰で折角手に入れた命が1つ減ったじゃあないかあ？」

ジョーンズがそう言うと、ジョーンズとセンゴク達の間我倒れていた海兵の体が、ビクンッと少し動くと溶けていき水だけになった。

「貴様……！」

「何を驚いてる？センゴク？まさか……？この俺の力を忘れた訳では無いだろう？」

ジョーンズがククツツと笑うと、センゴクはこう言った。

「ああ……！貴様の力はマゼマゼの実……！融合自在人間だったな！」

「その通りだあ！つまりは……！命を増やす事など簡単な事なのさ！」

ジョーンズの言葉にセンゴクたちは冷や汗を流す。

「ば……バケモノ……」

コビーが怯えた声でそう言うと、ジョーンズは首をグリンつと向けてこう言った。

「フツハツハツハ！ ナハア！ その通りだ、小僧……。俺こそは”海の悪霊 デイヴィー・ジョーンズ”だあ！」

ジョーンズが笑い声を上げると、応接の間の襖が全て開け放たれた！ そして、沢山の武装した海兵達がゼファーと共になだれ込んで来た。

「よう、胸糞悪い名を乗るのは終わったか？ タコ野郎」

ゼファーはニヤリと笑いながら、ジョーンズを見た。そして、ゼファーが片手をあげると、周りの海兵達が一齐にジョーンズに向けて銃を向けた。

「おやおやあ？ これはこれは……”黒腕”のゼファーか？ 久しぶりだなあ？ まるで同窓会のようなだな？」

「ふん！ タコ野郎が生意気言いやがる！」

「家族は元気か？ ゼファー？ お前の息子、今どうしてる？」

「お前に言う義理はないだろ？ タコ野郎」

「おっと、それは酷いじゃないか？ お前の家族を助けたのは俺だぞ？」

仲良さそうにゼファーとジョーンズは言い合っていると、センゴクの咳払いでピタリと止んだ。

「ジョーンズ！貴様がなぜ甦ったのかは……！監獄でゆっくりと聞こうじゃないか！」
「何だ？俺を捕まえるのか？」

「ああ！そうだ！」

「断わればどうなる？」

「貴様をここで殺す！貴様とて、何千発も撃たれば命の残基はなくなるはずだ！」

センゴクの言葉にジョーンズは、大袈裟に驚いた表情を浮かべながらこう返す。

「おいおい、何の罪も無いこのガキを殺すのか？お前らの仲間だろう？それを躊躇せず
に？」

「それは必要な犠牲だ！致し方無い！」

「や、やめて下さい！ヘルメツポさんを撃つのは！」

センゴクの言葉にコビーは悲痛な叫びをあげる。

「その通りだなあ？小僧？俺を捕まえる為なら、コイツらはお前の友達を平気で殺すぞ
うだあ？何の為の正義か……分かんないなあ？」

「貴様！」

「アイツも正義の為の犠牲だったのかあ？今思えば……アイツを撃つたのもお前らだつ
たよなあ？可哀想なサイレント・メアリー号の連中……。今もあの場所に縛られているだ
ろうなあ？」

ジョーンズがそう言うと、センゴクは冷や汗を流す。

「どうした？ 黙ったな？ はっ、そう言えば……。アイツの事はもはや禁句だったかあ？ 世界平和に一番貢献した男を記録上からも消し去るなんて本当に酷い事をしやがるな？ ええ？」

ゼファーはジョーンズに黙って近づくと床に押さえつけた！

「黙れ、タコ野郎……。お前に俺らの気持ちがあわかってたまるか……！」

「ほう、その反応を見るにあいつを消したのは上からの命令だったか……。成程……。成程……。じゃあ、もうここには用はないな」

「何……？」

ジョーンズがそう言うと、ヘルメツポの身体が突然痙攣を起こし始めた。

「……!! おい！ 様子が変だぞ！」

「ゼファー、何があつた！」

「何か嫌な予感がするねえ……」

センゴク達が慌て出すと、ヘルメツポの痙攣が止まった。そして！ 口が大きく開けた瞬間！ 口から勢いよく黒い煙の様なものが吐き出された！

「……!!」

慌ててゼファー達が少し後ろに下がると、その煙はどんどん天井に溜まっていった。

そして、煙がヘルメツポの口から吐き出されなくなると煙の中から声が響いた。

『ナハハハハハハ！さようならだ！センゴクウ！ここでの俺の欲しい情報は粗方手に入れた！』

「貴様……撃て！」

センゴクは海兵達に煙に向かって銃を発砲させたが、銃弾は天板に当たるだけだった。

『はっ！そんな攻撃は効かんさ！そう言えば、まだお前の質問に答えてなかつたな？センゴク？俺の目的は“ある男の願い”を履行する事だ！』

「ある男の願いだと……！」

『ああ、そうだ！だが、安心しろ。俺はまだ暴れん！暴れる時は楽しみにしててくれ！じゃあなあ！フツハツハツハ！』

煙がぐるりと動き出すと……。勢いよく大窓ガラスを突き破り、嵐の中へと消えていった。

残されたもの達は茫然自失になっていたが、センゴクはいち早く立ち直ると近くの海兵にこう言った。

「おい！世界政府に早く連絡しろ！『悪霊が甦ったとな！』」

センゴクがそう言うのと稲光が部屋に差し込む！

「へ…ヘルメツポさん！」

コビーが慌ててヘルメツポに近づくと、既に後ろにいたガープがこう言った。

「安心せい。寝とるだけじゃ…」

「ほ、ホントだ…。よかつたあ…」

ホツと息をつくコビーを、他所にガープはセンゴクの横に立つとガラスの割れた大窓を見ながらこう言った。

「こりゃあ…荒れるぞ」

「うむ、奴ほどの力がある者を他の連中は…ほっとかんだろう」
「戦力を増強すべきなのかもしれんぞ？」

センゴクたちは話にゼファーも入ってきた。

「まさか…また奴と戦うことになるとはな…」

センゴクたちは荒れ狂う外を見ながらそう言うのだった。

黒き箱は何処にありや？

「ハァー！ハァー！ゲホツ、ヒイハァー！」

横殴る様な風が吹き荒れる…ある街の路地裏を慌てて逃げる人影が1人…。

その人物の後ろから声が響く。

『なあ？ギバクソン？俺は簡単な質問してるだけだア？』
「隠匿師」と言われるお前はア？
俺と契約したはずだよなあ？お前にこの俺の力を貸す代わりに…。お前にはある物を
保管してもらったはずだ？それはあ何処にある？ンン？』

「ヒツ…ヒイイイ！」

”隠匿師”ギバクソンはその言葉に恐慄きながら、必死に走る…。

しかし…

「ブツベ！」

空き缶に足を引っ掛けてしまいすつ転んでしまった…！

「ハァー！ハァー！ハァー！」

ほふく前進の体勢のまま、逃げようとするが…。ギバクソンの後ろで誰かが、ゆつく

りと歩いてくる音が聞こえた。ギバーソンは恐る恐る後ろを振り返ると……その瞬間、稲光が空に走った！

真つ暗な闇にジョーンズの顔がハッキリうつるところと言った。

「どうだ？ギバクソン？死ぬのは怖いだらう？」

「ヒイア！ぎやああああ！」

ギバーソンの悲鳴が路地に響き渡るのだった。

新世界くイナバ島く

その島には沢山の倉庫が並んでおり、近くには武装した商船が哨戒していた。その船着場からぶつくさ小言を漏らしながら歩く男がいた。

「ギバーソンのヤツめ、こんな夜に何があつて呼び付けたのか……たく」

その男は、深層海流、ウミット 七つの海を股にかける海運王である。

「あら？貴方も招かれてたのね？ウミット？」

「ステューシー嬢か、貴女も奴に？」

「ええ？電伝虫で連絡を取ってきたのよ。偉く脅えた様子で」

「私の所も同じだ。急に連絡をよこしてな」

「私たち2人だけのようね」

「そのようだ」

2人は他愛のない会話をしながら、指定された倉庫へと向かった。

指定された倉庫は長い事使っていないのか、壁のレンガが剥き出しとなり、窓ガラスも所々割れて荒れていた。その入口には大きな鉄扉があり、その扉が一人分ぐらい開けられていた。

ウミット達は怪訝な表情を浮かべながらも、その倉庫の中へと入る。

真つ暗な闇の世界が広がる倉庫の中に…ポツンと机があり、その机の上には火の着いた蠟燭が置かれていた。

「ふんだふんだ！何処にいる？ギバーソン！私は忙しいのだ！早く要件を話せ！」

「そうね、こんなしょうもないことで驚かすために呼んだのなら…殺すわよ？ギバーソン！」

ウミット達は苛立ちながら暗闇に向かってそう叫ぶ！すると、暗闇から声が響く。

「闇の中から響く声…♪契約すれば…何かを得る代わりに何かを失う…♪契約破棄は許されぬ…♪逃げてても無駄だ…アレが海の底からやって来る…♪地の果てまで追いかけるう〜♪」

その声にウミットはさらに叫ぶ。

「ふざけているのか！貴様！こんな事をする為に呼んだのなら！私は失礼させてもらう

！

ウミット達が怒って帰ろうとすると！

「な、何！」

「急に扉が……！」

勢いよく入口の扉が閉まり外に出れなくなった。すると、また声が響く。

「悪霊は探してる……♪箱は……何処だ？何処にありや？あれは……元は悪霊のもの……♪」

2人が慌てて後ろを振り返ると、先程まで人影のなかった机の所に俯いたギバーソンの姿があった。

「ギバーソン？なんの冗談だ？これは……」

「そ、そうよ」

2人がギバーソンの方へ近づくと……ギバーソンは顔面を上げると2人に向けるとこう言った！

「よオ、ウミット……。いつぶりだア？」

「!!。お……お前は！」

「そう驚くな、願いを叶えてやった仲だろウ？」

ウミットはギバーソンの声では無い声色に驚きながら冷や汗を流す。ステューシーは懐から拳銃を取り出すとギバーソンに向けた。

「貴方は一体誰？」

「お前こそ、誰だ？20年前には居なかった顔だな？いや？俺が見かけなかっただけか？」

ギバーソンはそう言うのと懐からラムの瓶を取り出した！そして、口でコルクを噛むと抜くと、息を大きく吸い込み口から勢いよくコルクを発射した！

「!!」

ステューシーはあまりの事に動けなかったが、コルクはステューシーが構えるピストルに命中した！

ピストルはステューシーの手から弾かれ、後ろに落ちた。

「さあて？ウミットオ…、お前にもこいつと同じ質問をしようか」

ギバーソンは自分の体を叩くとそう言った。ラム酒をグイツと煽るところ続けた。

「箱は何処にある？ウミット？お前にも託したはずだよなあ？」

「…ツツ！」

「まさかとは思うが…リンリンの奴に渡したなんて事は無いよなあ？」

「そ…それは…！」

「おいおい…？まさか…こいつと同じ事を言うのかあ？」

ギバーソンの顔は見えないが呆れた様な声が聞こえてくる。

「俺よりもお……リンリンのやつが怖いかあ?なあ?ウミツトくん?」

ギバーソンの言葉にウミツトはガタガタと震えた。その様子を見た、ステューシーはギバーソンにこう言った。

「ねえ?本当に貴方は一体何者?ギバーソンでは無いわね?」

ステューシーの言葉にギバーソンはピタリと動きを止める。すると、暗い闇の向こうから舐め回すような視線がステューシーを襲う。

「お前こそ何者だ?20年前……俺と会ってないな?んん?」

「私の名はステューシー……。」 歓楽街の女王」と呼ばれているわ

” 歓楽街の女王” ……大層な二つ名だなあ?ええ?」

「私は名乗ったわ!あなたの事を教えて!」

「いいだろう……!小娘エ……名乗ってやろう」

ギバーソンは勢いよく前のめりになると、ステューシー達に顔を見せながらこう言った!

「俺こそは!海の悪霊” デイヴィー・ジョーンズだあ!」

ジョーンズが乗り移ったギバーソンの顔は死人のように白くなっており、目の下には酷いくまができていた。

ステューシーはジョーンズの顔を見て、少し冷や汗をかきもこう言った。

「デイヴィー・ジョーンズ……」

「ほう、俺を知ってるかあ？ んん？ ステューシーくん？」

ねつとりした口調でジョーンズはそう言うと、ステューシーを見た。

「んん？ なんか臭うなあ……。 ああ……。 臭う……。 この香りはあ……。 んー、あのゴミクス共の国でよく嗅いだ匂いだあ……」

ステューシーの近くで鼻をヒクヒクさせると、ジョーンズはそう言った。

「まあ、いい。 それよりも、ウミットお……。 質問に答えてもらおう」

「ひつ、ひい……」

「俺の箱は何処だ？ お前の願いを叶える代わりに任せたよなあ？ 今のお前の肩書き……！ “海運王” を名乗れるようになったのは誰のおかげだ？ お前よりも凄腕だったソクラテス・オナニスを消して、その後釜をちゃんと引き継げるようにしたのは誰だあ！ 俺との契約を違反した者はどうなるかあ……。 知らん訳でもないだろう？ なあ？ ウミットオ？」

ジョーンズがそう言うと、ウミットは顔面蒼白になりながらこう呟く。

「あ……。 あんたの箱は……。 あれから、” 持っている”。 今も肌身離さずに……」

「ほお、それはそれは……。 俺への恐怖がああのパバアより上だったか？ 見せる」

「あ、ああ」

ウミットは自分のシャツの胸のボタンを外すと、革紐で吊るされた小さなキューブ上の何かを見せた。ジョーンズはそれを見ると、すかさずそのキューブをつかみ革紐を引きちぎった。マジマジとキューブを見るとジョーンズはこう言った。

「ふむ……。確かに箱だ……。よくやったあ！ウミットお……それでえ？あのババアに渡った俺のものはコイツの分だけか？」

ジョーンズはギバーソンの肉体を叩くとそう言った。ウミットは畏怖するような表情を浮かべながらこう言った。

「は……箱」についてはそうだ。あ……後、アンタのものでビツクマムに流れたやつは”ポトルシップ”だ……。ま……前に茶会で自慢しているのを見た記憶がある」

「俺の船の1隻はあのババアの手元か……。まあいい……。それで他には？そう……」槍”は”？」

「や、”槍”なのだが……。完璧な状態ではないが破片を次男が持つてると聞いたことがある」

「やはり砕けていたか……。しかし、槍の破片をカタクリがなあ？」

「あ、あの次男坊はアンタが居なくなつた後、偉く探していたみたいだ」

「ん？槍をか？」

「ち、違う、アンタをだ。槍の破片はその時に手入れたと人伝いに聞いた」

「俺をかあ……。ふん、まあアイツの事だ……。邪魔はせんだろう」

ジョーンズ達の話し合いを聞いていたステューシーは、内面冷や汗を流しながらこう思った

（海軍からの報告を聞いた時、耳を疑ったけど……。本当に生き返ってたのね。しかし、ジョーンズの探している”箱”^{キューブ}それは一体何なのかしら？

まさか、肉体を失っている事となにか関係が？それともまだ何かの力が安定していない？それに”槍”の存在……。まさかあのポセイドンの……！

あれは破壊されたはず……。あの人と共に……！）

ステューシーがそう考え込んでいると、ジョーンズはこう言った。

「俺の箱^{キューブ}”は7つある……。今のを合わせて残りは5つ……。所在がわかっているのが俺が隠した1番大事な”箱”とあのババアに渡った”箱”……。もう1つは契約で守つてもらっている……。地道に回るしかねえか……。だが、先ずはあ？」

ジョーンズはニヤリと笑うところ言った。

「もはやこの肉体に用はない！ナハハハハ！ハハハハ！」

「ヒ、ヒイ……」

ジョーンズは狂ったように笑うと、ウミット達は恐怖のあまり後ずさる。

ギバーソンの肉体がブルブルと震え出したかと思うと、口から黒いモヤが吐き出され

る！口からどンドン出てくる黒いモヤ……段々と勢いが無くなるとギバーソンは倒れた。

「では、また会おう。ウミットオ！また何かある時は会いに来るぞオ！ナハハハハ！」

黒いモヤがグルグルとウミット達の周りを回ると、窓から外へ出ようとした。

その時、ステューシーの耳元でボソツと呟かれた

（何で”政府の雌犬”が暗黒街の王をやつてるのかは聞かないでやろう。しかし、あんまり首を突つ込むと……次はその身体無事ではすまんかもしれんぞお？

脚は何本増やさりたい？小娘え？）

ステューシーはその言葉に戦慄すると、慌てて後ろを振り返つたがそこには何も無い倉庫がひろがっていた……

ノース・ブルー
北の海の何処か

海上をゆつくりと進む大きな影……。それは船？それとも怪物？いいや、違う……！それは王国！悪の軍団！ジェルマ66”を要するジェルマ王国である。

その王国の内部の廊下を進む黒い影……。最深部へとどんどんと進む……そこへ不意に声がかけられた。

「貴方、何処へ行くの？その先は…地下牢しかないわよ？何も無い場所に行く前に訓練でもしないとイケないんじゃないの？」

「…」

「答えなさい！あなた…もしかして、この国の人間じゃないわね？」

「い、いえ、レイジュ様…私はこの国の兵士です」

ピンクの長い髪を手でかきあげながら、ヴィンスモーク・レイジュはため息を吐きながらこう言った。

「兵士ならわかるわよね？その先には地下牢しかないって事ぐらい？今は捕虜もいないわよ？一体何しに行くの？」

「少し用事が…」

「だから何もな」

「その先に用事があるのです」

レイジュはその言葉に少し固まった。

「な、何を言っているの？その先なんて何も」

「いいや、あるさ…」

レイジュはさらにギョツとする先程まで喋っていた兵士の声では無い声が響いた。

「お前との契約だったものなあ？レイジュくうん？」

「貴方は……」

「契約履行の時が来たぞ、お前が欲するものと俺が欲するもので交換だ。俺が欲しいものはわかるなあ? んんう?」

ジョーンズは兵士の顔を歪ませながらそう言うのだった。

《ビーヨン! ビーヨン! 緊急事態発生! 緊急事態発生! ビーヨン! ビーヨン! 第0研究室において侵入者! 繰り返し。第0研究室において侵入者! 即刻排除されし!》
けたたましく鳴るサイレン音にジャッジは慌てて研究室に向かいながら、合流してきた科学者に言った。

「何事だ!」

「どうやら、正規のルートで入らずに研究室に入った者が居るようで……」

「映像電伝虫の映像では誰が映っている?」

「じ…実はレイジユ様のようで……」

「チイツ! 大馬鹿者が!」

ジャツジは忌々しげに舌打ちすると、ズンズンと研究室に向かう。

地下牢の奥の壁には周りの石壁には不釣り合いな金属で出来た扉があり、そこへ向かうまでに地下牢の檻にめり込まされたジェルマの兵士達の姿があった。

「な、何だこれは」

明らかレイジユの仕業ではない痕跡の数々に、ジャツジは驚きながらも奥の扉に手をかけた。

ドアを開けると……そこには大きなタンクと共に巨大な培養槽が置かれており、緑色の液体の中に浮かぶ人がいた。ジャツジはその培養槽の上に人影がいるのを見ると叫んだ！

「レイジユ！お前は一体何をやっている！勝手にこの研究室に近づくなとあれほど！」
「お父様……！」

レイジユはジャツジの姿に少しだけ驚いたが、すぐにこう返した。

「いいえ、お父様……もう今日からこの研究室に近づくことはなくなるわ」

「何だと？」

「だってー」

「おつとお、まだネタばらしはしないでもらおうか」

レイジユとジャツジの会話をレイジユの横にいたジョーンズが遮った。

「貴様は……！一体?！」

「お前との話相手はここまでだア、先に身体を手に入れる」

ジョーンズはニヤリと笑うと、胸ポケットからキューブ箱”を取り出した。そして、それ

を口に咥えるとそのまま培養槽に落ちて行った。

ジャツジはそれを見て、近くの科学者にこう言った

「おい！あれは一体何の兵士タイプが入っている？MBか？MHか？MSTか！どれだ
！」

「どつ、どれでもありません、あれは…。研究凍結となった…。恐るべき強者計画」の
…」

科学者が説明しきる前に培養槽が勢いよく吹き飛んだ！

飛び散った液体が蒸気となって辺りを見えづらくすると中から声が響く。

「やつと手に入れた！実によく馴染むぞ…。この肉体は！ナツハハハ！これで一々乗り
移らなくて済む！」

蒸気が晴れていくとそこに立っていたのは、オレンジ色の長髪を垂らした男だった。

男は髪の毛をかきあげながらこう言った。

「気分がいい…」

すると、そこに！

ヘンリーニードル
「起電ニードル！」

電光石火の勢いで膝蹴りを喰らわせたその人物を見て、レイジユは言った

「ニジ！あなた帰ってきてきて…」

「えらく出迎えが少ねえと思つたら…なんだアレは？」

「よく戻つた！ニジ！やつを殺せ！」

「言われなくても…！」

ニジはジャツジの言葉にニヒルに笑いながら、蹴り飛ばした男の方を見た。しかし、水蒸気によつて姿はハッキリ認識は出来なかつた…。

すると、突然！水蒸気の奥から何かが飛び出してきた！

「な、なん？」

ニジは慌てて避けようとしたが…ソレは…避けきれぬレベルの大きさではなかつた！

「ぐっ！」

「ニジ！おのれえ！」

ニジは瞬間に吹き飛ばされた。それを見たジャツジは何処からか出した槍を構えた。水蒸気の奥からニジを吹き飛ばした存在を見てジャツジは驚愕の表情を浮かべた。

「な…何だこれは…！」

そこにあつたのは水蒸気の奥から伸びる巨大なタコの触腕だつた！大きさは海王類に匹敵するレベルのものでつた…。すると、水蒸気の奥から声が響く。

「良いだろう、体を慣らすためだ。少し遊んでやろう…なあに恐れることは無いぞお？」

「俺たちで遊ぶだど？ふざけるな、貴様の息の根を止めてやる」

ニジはその言葉に激高し、突っ込んで行った！

「超電光剣！」

ニジはバチバチと放電する剣を抜き放つと、高速移動しながら男へと迫る！迎撃の巨大なタコ足をひらりと交し、男の胸に剣を突き刺した！男の体が勢いよく引き攣り、瘻攣起こした！所々から煙が経ち始めた。

「ふん、たわいもない」

ニジはニヒルに笑うとそう言った。しかし、次の瞬間……！

「もう終わりかあ？小僧お？わざわざ電気マッサージ……ご苦労様」

男は胸に突き刺さった剣をガシツと掴むとそう言った。ニジはそれを見て驚愕の表情を浮かべると剣を引き抜こうとしたが何故か抜けなかった。

「おやおやおやあく？抜けなくて不安になってるのか？小僧？んん？」

「どういう事だ!?何故、電撃が効かん!？」

ジャツジは困惑した表情浮かべながら、そう言うとなんかこう言った。

「ゴムに幾ら電撃を通そうが無駄だろう？それにゴムは滑り止めにもなる」

水蒸気が晴れると男の肌は黒っぽくなっており無機質な感じに見えた。

「さあて、俺からもお返しをしなくちゃな？」発せられたのなら、やり返さねえとなあ

「？」

男は右腕のタコ足を引つ込め、左手で右腕を何やらぐにぐにすると、右腕は瞬く間にエビの爪のようなものになった！男はニジを左腕で逃げられないように掴むところを言った。

「お前はテツポウエビって言うエビを知ってるか？小さいエビなんだがな、あいつにはすごい特殊な力がある…それはなあ？」

丸み帯びたエビの爪をニジの横腹に突きつけるとさらに続けてこう言った。

「こーやってなあ？爪の歯が擦り合わさると…！」

男がそう言った瞬間！凄まじい爆発音と共にニジが吹き飛ばされた！

「プラズマが発生して、4000度以上の高熱と凄まじい衝撃波が発生する。どうだ？勉強になつたらう？」

男は白い煙をあげるエビの爪を揺らしながらそう言った。その姿を見たジャツジはあることに気づいた。

「その姿…何処かで…見た記憶がある」

「なんだあ？お前はまだ気づかぬえのかア？ジャツジいーいや、ガルーラ？と言えばいいか？」

「何故それを！」

「この俺を本当に忘れたのかア？ ジャツジい？ お前も1度だけ俺と契約したなあ？」 四国斬り” 手伝ってやったはずだア…？」

「き、貴様は…。ま…まさか…！」

「ああ！ そうとも！ 俺はデイヴィー・ジョーンズ！” 海の悪霊” だア！」

ジョーンズは笑いながらそう言うと、ジャツジはたじろぐ。

「貴様は…死んだはず！」

「いいやあ？ 死んじやいない…確かについ最近まで封印はされていたがな？ 悪霊である俺がそう簡単に死ぬとも思ったのか？」

「ツツ…!!」

「まあ、肉体がないのは不便だからなあ？ 万が一の為にスペアを作っておいて正解だった！」

ジョーンズは感極まる様に自分の体を撫でる。すると、吹き飛ばされたニジが猛スピードで戻ってきた！

「貴様だけは殺す！」

「ほお、あれでもまだ立てるかあ？ さすがは改造人間だな、そのスピード、CP9の剃レベルか…」

ジョーンズは自分に刺さった剣を引き抜くとニジへと向けた。

「少し眠ってもらおうかあ？」

武装色の覇気を剣にも纏わせ、ジョーンズはニヤリと笑いながらこう言った！

”海死蜃楼！”

ジョーンズがそう言いながら薙ぐと、ニジへ向けて斬撃が飛ばされた！慌ててニジは防御したがそれでも止められず、また吹き飛ばされる形となった！

「これでしばらくは起きては来れんだろう…さあてえ？レイジユくん？契約履行といこうかあ？」

ジョーンズは手に持っていた剣を勢いよく地面に突き刺すと、上にいるレイジユを見て笑うのだった。

「ええ…」

「レイジユ…！貴様…！何をこいつに願った！」

「ナハハハハ！もう教えてやれ、小娘え…！お前が何を願ったのかを！」

「わ…私が願ったのは…母を甦らせること！見返りはジョーンズの肉体を用意すること
を！」

「ソラを…？ふざけた事を抜かすな！あれはもう死んだのだ！」

「いいやあ？死んでないのさ？それがなあ？」

「何だと？」

ジョーンズの言葉を聞いたジャッツジは驚愕の表情を浮かべた。さらにジョーンズは続けた

「確かにい？お前の妻であるソラは死にかけてはいた。だがア？俺の能力とある物を使えばあ？助けることも出来た…。それにお前は妻が死んだ時、ちゃんと確認したのかア？俺が意図的に仮死状態にしていたらどうするう？んん？」

ジャッツジは妻の死んだ時を思い出し、両膝をついた。

「そう、俺はこの小娘と取引した。俺の肉体を作り、俺がその肉体に受肉した後で小娘の母親を助け、甦らせるとなあ！さあ！契約履行の時は来た！小娘何処にある？」

レイジユはジョーンズを見下ろしながらこう言った。

「こつちよ…」

レイジユは壁に付いた基盤を操作すると、壁が上にあがり始めた。壁の向こうには白い冷気が立ち込めており、そこにポツンとこじんまりとしたカプセルが置いてあった。白く凍りついた硝子の中に液体に浸かった女性の姿が見えた。

「ソ…ラ…」

ジャッツジは絞り出すようにそう言うかとカプセルに近づいた。レイジユはその様子を見て驚いた表情を浮かべながらこう思った

（あんな顔をする父上を見るのは初めてだわ…。冷酷…戦う為に感情は不要だと言って

いたのに……やはり、あなたは母さんを愛してたのね)

「おい、小娘え……！早く出してやれ、じゃないと何も出来んぞ？」

「え、えええ！」

ジョーンズの言葉に我に返ったレイジユはカプセル横の基盤を操作した。

少しすると、プシュツという音が響きゆつくりとカプセルの扉が開いた！

「さあて、どけ！」

カプセルの近くにいたジャツジを蹴り飛ばすとジョーンズはソラのお腹に手を当てた。

「劇物を全て取り出せたらいいがなあ？」

ゆつくりと手をソラの体に沈みこませ、かき混ぜるように体の中を探り始めた！

「んんん？これか？」

ジョーンズはそう言うと、ソラの中から金属の塊のような物質を取り出した。

それはどんだん……体からでてきた。ジョーンズはあらかた取り終えたのかソラのお腹から手を引き抜くとソラが目を覚ました！

「んんんううう……、……は？……どいっ？」

ソラは薄目を開けながら、周りを見渡し始めた！それを見たレイジユはあんまりにも感極まって抱きついた！

「母さん！目が覚めたのね！」

「あ、貴女はも、もしかしてレイジユ？大きくなったわね？私はあれからどれぐらい寝ていたの？」

「20年近くよ…母さん！良かった…！本当に目が覚めて！」

「おいおい、感動の再会の所悪いがまだ終わってないぞ？」

ジョーンズがそう言うところをソラはこう言った。

「あなた…どこかで？」

「いいやあ？アンタとはこうやって顔を合わすの初めてだあ…あんたはあの時意識不明だったからなあ？」

「そ、そう」

ジョーンズはそう言うのと自分の体の中からあの箱を取り出し、その箱の中からまた箱出した。そこから2つのゴブレットと大きな瓶と小さな瓶を1つずつ取り出した。

「おい、ジャツジい？」

ジョーンズは呆然とソラを見るジャツジにそう言った。しかし、反応が無いので思いつきり平手打ちをすると、ジャツジはゆっくりとジョーンズの方を見た。

「何を惚けている？ジャツジ？お前は無駄な感情はいらんやないんじやなかつたか？ま、それはどうでもいいことか？お前のクローン兵を1人寄越せ」

「あ、ああ」

ジャツジはジョーンズの言葉に力なく頷くと、近くのクローン兵に合図を送った。クローン兵は前へ進むとジョーンズにゴブレットを渡され、小瓶に入った液体を垂らした。

「これでいい、お前はそれを飲め」

クローン兵は何も疑わずにそれを飲み干した。そして、もう一つのゴブレットをソラに渡した。

「お前さんはこれは飲め」

「これは一体？」

「飲んでから説明しよう…安心しな毒じゃないさ」

ソラが意を決してそれを飲み干すと！その瞬間！クローン兵の周りに水が湧き出したかと思うと！クローン兵の水が取り囲みぐるぐると回転し始めた！

「ガばおガポオ！」

「……!!」

クローン兵が助けを求めようと手を伸ばすが…徐々に皮膚が裂かれ、水がどんどん真紅に染まり始めた！水の勢いがおさまる頃にはそこにクローン兵の姿は無く、ただ骨が転がって居るだけとなった。

「い……一体何なのこれは……」

レイジュは絶句するソラを抱きしめながらそう言う。とジョーンズはこう言った。

「おいおい、感謝して欲しいね……これでそいつは寿命を先延ばしを出来たのさ！このクローン兵が後生きれたであろう！寿命をコイツのものにする事によってな！これこそ、神秘の力！《生命の泉》アヴァン・デ・ビータの力だア！」

「《生命の泉》……」

ジョーンズは笑いながらそう言う。と壁に向かって歩き出す。

「では、諸君！いつかまた会うこともあるだろう……。その時はまた何かを願うのなら俺はいつでも契約をする事を……おっと、忘れてた」

ジョーンズは踵を返し、レイジュの手を握ると何かを体から抜き出しこう言った。

「これで契約成立、母親と元気に暮らせよ……小娘え？」

「は、はい！」

「では、諸君！さらばだ！ナハハハハ！」

ジョーンズはそう高笑いすると壁の中へと消えていった！

原作開始前（0巻世代）

海の底からやってくる

雷がバリバリと鳴り響く嵐の海

その中を進む一隻の軍艦があつた

「慌てるな！ ゆっくり進め！ これぐらゐの嵐でこの船は沈まん！」

そう、海兵たちに叫んでいるのはセンゴク中将だつた

すると、マストに稲妻が落ちマストが燃え上がった！

「マストに火が！」

「急げ！ 早く消火するんだ！」

海兵たちは慌てて火を消す作業に取り掛かっていた

センゴクは黙って自分らの進む先の方を睨んでいた

すると、センゴクの持つ電伝虫が鳴つた

プルプルプル…プルプルプル…ガチャツツ！

「こちら、センゴク！」

「コングだ、どうだ状況は？ センゴク」

「まだ、例の海賊団は見えませんが……しかし先程、盗聴用電伝虫には今航海している海域にいるという情報は入っております」

「そうか、何としてでも見つけてくれ」

「分かっています」

「では、健闘を祈る」

センゴクは電伝虫を切ると今回の任務の事を思い出していた……

それは、クロス海賊団の壊滅……

クロス海賊団船長であるクロス・モーガンは海軍の練習艦を拿捕し、海軍から身代金を奪おうとしたが……。失敗して命からがら自分の海賊団の船と共にこの嵐の海に逃げ込んだのである

センゴクに渡された命令はまだ解放されていない海兵の救出、そしてモーガン海賊団の討伐である

しかし、なかなか見えない海賊団にセンゴクは少し焦っていた

「もしかすると、この海をもう抜け出したのか……うむ……」

すると、見張り台にいた海兵がセンゴクに向かって叫んだ

「中将……！4キロ先に難破した船らしきものを発見！旗は……クロス海賊団です！」

「何！急いでそこに向かうぞ！」

「ハッ！」

海兵たちがドタドタと動き出した

軍艦は周りの暗礁に気をつけながら進み、難破した船に近づこうとしたその時！

「なんだ？何の音だ！」

水飛沫とともに何かが

難破した船の近くに浮上してきた

その浮上してきたものは船だった

しかし、その船は異様な船で

ボロボロのマストに、異様な形の船首には死神の像、

船首は更にワニの様な形をしている

三本マストのガレオン船だった

「なんだ！アレは！コーティング船か！」

驚愕の顔を浮かべるセンゴクの耳に

浮上してきた船からパイプオルガンの音が鳴っていた

海兵たちは畏怖の表情を浮かべ

センゴクはハツと我に帰り、急いで部下に命令を下した

「浮上してきた船に、大砲を向けろ！急げ！」

「ハッ！了解致しました！」

ドタドタと我に返つたように動き出した海兵たちは、急いで浮上してきた船に砲門を向けた！

「よく狙え！よし！撃ち方よおーい！」

「おいおい、何もしてない船にい海軍は大砲を撃つのか？」

センゴクは号令を言おうとすると後ろから声が聞こえてきた

後ろを振り返るとそこには異形な姿をした男が立っていた

タコのような顔つきで髭のような部分はタコの足

片腕はカニ爪

もう片腕は骨

片足は義足

服装は所々にフジツボなどが付いており

帽子にも付いていた

「なんだ！貴様は！」

センゴクはこの訳の分からないバケモノに叫んだ

すると、バケモノは煙管をくわえて、少し吸うと煙を吐きながら言った

「なんだ貴様はつて…その船の船長だがあ？」

どうやら、浮上してきた謎の船の船長らしい

センゴクは続けた

「貴様！どうやって軍艦に入って来た！」

すると、バケモノ船長の周りにはいつの間にか銃を持った海兵が囲んでいた

そして一斉に構えた

「おいおい、こっちは何もしていないじゃないか？」

「信用にならないからだ！まずは質問に答えろ！貴様は海賊か！」

とセンゴクは目の前にいるバケモノ船長に言った

するとバケモノは煙管を咥えながら、しゃべり出した

「ふむ…。海賊でも無いがあ…正義の味方でもお…無いぞ？」

その瞬間、一人の海兵が目の前にいる怪物に、向けて発砲した！

「何をしている！サカズキ！」

「こいつはア海賊ではないが…正義の味方でもないと言うとつた…つまり悪じゃ！」

しかし、目の前にいる怪物は倒れる様子はなかった

「酷いことをするなア……一応お……今のは効かなくても痛いんだがなあ……穩便に済ませようとしたが……。やめだア！」

「今のは宣戦布告ととらえていいんだな？」

「そういうと、怪物は自分の腰についていた宝石の散りばめられたカトラスに手をかけると、触り出した

すると、何故か軍艦が少しづつ軋み始めた

「馬鹿な部下を持つと、苦労しますなあ……。中将閣下殿お？」

「センゴクは身構えて、能力を発動しようとした

しかし、怪物は続けた

「たがア……。中将とやり合うには骨が折れるな……。ただの無力化だけにしといてやろう！この俺に刃向かった者を吊るせええー!!!」

「そう怪物が叫んでカトラスを抜くと、軍艦が大きく揺れ、海兵たちやセンゴクがよろめいた。その瞬間、足にまるで生き物のように動くロープが巻き付き、海兵たちを吊り上げ始めた！」

「「うわあああああ!!」」

「貴様アアア！」

「センゴクは何とかロープを外して、武装色の覇気で怪物に殴りかかろうとしたが、拳は

カトラスに阻まれた。ガキインツと火花が散る。

「おつとお!!危ないじゃないかあ? センゴクくん?」

「何故! 貴様が俺の名を! ぐむつ!」

シユルルルルつとセンゴクの四肢にロープが巻き付き、まるで羽交い締めのようにされ、センゴクも吊るされた。

「それは言えんなあ?」

そういうと、怪物は船首の方に歩き出した。嵐の雨音と義足で歩く音だけが、人が吊るされた軍艦に響いた。

すると、船首の近くに吊るされたサカズキが叫んだ

「おんどりやア! 許さんけんのオオ! この借りはきちんと返しちやるけ! 怪物!」

その叫びを聞いた瞬間、怪物は一瞬止まり、そして、サカズキの近くで大声で言った
「ハアツ! 怪物う? 俺の事かあ? 違うぞお? 俺は怪物じゃあない! 俺の名はデイ
ヴィー・ジョーンズ!! 海の悪霊だ!」

そう叫ぶと、ジョーンズは船首の方へと歩いていくと、壁の前に立ちまた振り返って
こう言った。

「それでは、海軍諸君! 目の前にある海賊船は俺が頂く! ではなあ!」

そういうと、ジョーンズは壁に体を沈めていった

センゴクはその光景に驚きながら呆然としてみると、軍艦の真ん中から人質だった海兵達が出てきた。

すると、またもやゴゴゴゴゴゴ……と音がしてきた。

難破した海賊船の周りから海賊船の何倍もあるうかというタコの足が出てきて海賊船を海の中に引きずり込んだ。

そして、近くに浮いていた謎の幽霊船も一緒に潜っていった。

「オノレえええ！」

センゴクは情けなかった。ジョーンズを追おうともしたが任務のうち一つは完了したので仕方なく帰還することにした。

嵐の中大変だったが、センゴク達はその後無事に帰還できた。

しかし、この時の事はまだ序章に過ぎなかった……

転生

ゴポツポポポ…

海の中を潜行する海賊船の船長室で

ジョーンズは椅子に座っていた

「ふう…危なかつたあ…いやあまさか、あそこにサカズキがいるとは思わなかつたなあ…でもいいやセンゴクに会えたし！」

実はこの男…転生者なのである

なぜこうなったのかと言うと…

く
???
く

「いてててて…なんだ?こころは?」

男は真っ白い世界の中で目が覚めた

「確か、俺はあの海賊映画の最新作を見に行く途中だったはず?あれ?」

男が悩んでいると地面から黒い服のセールスマンみたいな男が出てきた

「オーホツホツホ……こんなこともあるんですねえ……」

男は不気味に喋った

「なんだ！お前は！」

男は叫んだ、するとセールスマンみたいな男はそそくさと名刺を取り出してきた
「どうもすみませんねえ……ワタクシ、死神転生協会のジョンと申します……宜しく」
「死神転生協会？何言ってるんだお前は？」

「こいつは馬鹿か？とも言いたげに男は言った

すると、ジョンは笑いながら言った

「おやおや？お忘れですか？貴方は先程トラックに轢かれて死んだんですよ？」

「トラックに轢かれて？何を……」

男は青ざめた表情になりながらジョンに掴みかかろうとした

すると、ジョンはステッキで男の身体に触れた

「まだお分かりいただけませんか？仕方ありませんねえ……」

ジョンはステッキを更に強く男の身体に押し込んだ

すると、男の身体から血が吹き出し、傷口が開き始めた

「う……わああああア、ア、ア、ア、ア、ア……！」

ジョンは慌てる男の様子を見て楽しむ様に笑うと男に手で触れた。

すると、男の身体は元に戻っていた。

「死んだのをわかつて頂けましたかな？」

ジョンはそういうと手帳出してきた

「俺は死んだのか……どうすればア……」

男は落ち込んだ様子で頭を抱えていた。

ジョンは手帳をペラペラめくりながら、男の話聞いて、少し間を開けて言った

「本当なら、貴方を地獄で裁き受けさせ……地獄か天国かを決めるんですが……少しこちらで手違いがありますねえ……本当は貴方は死ぬ人間ではなかったんですよ」

ジョンがそう言うのと男は顔上げてジョンを睨んで叫んだ

「手違いだと？手違いで済まないだろ！」

ジョンは煩く感じたように目を細めながら男を見て言った

「本当は、有り得ないこと何ですがねえ……特例として貴方を転生させてあげちゃいます！」

そういうと、ジョンのステッキからポンツと音がしたかと思うと、

花吹雪が出てきてステッキの先に紙でおめでとうと書かれたのぼりが出ていた

「貴方が望む物語の世界に転生させてあげちゃいます！それと、特別に特典を4つつけてあげましょう！」

ジョンの言葉に男は少し考えて……。そして、叫んだ！

「なら、転生先は『ONE PIECE』がいい！

で、特典は……。

あの海賊映画に出てくる海賊船を3隻！

それとあの海賊映画に出てくる船を操れる魔法のカトラス！

後は覇気は見聞色と武装色を使える様に！

最後に、俺の考える悪魔の実の能力！」

ジョンは目を細めて笑うと

「オーホツホツホホー！それで本当によろしいですかな？」

ジョンは男に問うた。男は言った

「これでいいー！」

ジョンは持つてるステッキで地面を3回ノックしたすると、

男の後ろに扉が現れて、

扉が開いた瞬間、吸い込まれるように男は落ちていった

落ちていく時、男の耳にはジョンの声が聞こえてきた

「オーホツホツホー！もう少しサービスもしてあげましょう！」

容姿はそれなりで原作が始まる前にしといてあげます！
それでは、良い人生を……」

ジョンは自分の被っていた帽子を片手で持ち上げて
降っていた……

………

「ハッ！少し寝てたな」

ジョンズはそういうと立ち上がり

オルガンの近くにある

棚のドアを開けた

すると、中には沢山のボトルが置いてあり

中には船が入っていた

「カリビアンの中で出てきた船をボトルに詰める事が出来るとは思わなかったなあ…

でもこれで船を集めていつでも眺められることが出来るな！」

ジョーンズには少し収集癖があるようだ

「それにしても、この能力よく出来てるよなあ…一回解除してみるか！」

そう言うとジョーンズは鏡の前に立って

能力を解除した

すると、そこには怪物の姿ではない

オレンジ色の髪をした好青年が立っていた

「フウ…この能力は万能だけど疲れるなあ…。

次は何をするかなあ…仲間でも集めるか！」

そういうと、ジョーンズはケラケラと笑いながら近くにあった

ラム酒のビンに手を伸ばして

口で歌を歌いながら酒煽った

「ヨーホー♪…ヨーホー♪…海賊暮し…酒を飲みほせ♪」

海賊船はゆつくりと海底を進んで行った

悪霊式乗組員集め

穏やかな満月の夜の海を一隻の船が航海していた

「ギヤハハハ！今日も上手くいったな！馬鹿な奴らを拉致することに！」

そう、大声で笑っているのは連れ去りのカルロス

懸賞金は3千万ベリーの男だった

「そうですね！船長！」

部下達も釣られて笑っていた

「拉致した人間はヒューマンシヨップに売れば金になる！笑いが止まらねえなあ！ヒヤハハハ！」

そう言つて、カルロスは酒を飲んで

すると、部下の一人がこんな事を言い出した

「そう言えば、船長！知ってますかい？あの噂！」

酒を飲むのをやめてカルロスは部下の方を見た

「あん？何だア？何の噂だ？」

カルロスを笑いながら部下に言った

部下はこう答えた

「海の悪霊の噂ですよ！」

「ハッ！海の悪霊だア？なんだそりゃ？」

カルロスは部下に対してお前は馬鹿なのかとも言わんばかりの視線を向けて笑っていた

しかし、部下は続けた

「何でも、海の底から船が出てきたと思うと

近くにいる船を沈めて

生き残った乗組員を自分の元で働かせるらしいですぜ……」

部下がその話を言い終わった瞬間

一瞬の間が空いたかと思うと

周りが笑い出した

「「ギャハハハハハ！」」

カルロスは腹を抱えながら笑い

苦しそうになりながらも言った

「ヒィ……ヒィ……そんなことがある訳ねえだろ？」

その悪霊とやらに会えるのならあつてえなあ？

本当にいるんならな！ヒヤハハハ！」

しかし、その笑い声を遮るかのように

近くの檻の中から声が聞こえてきた

「いるさ！海の悪霊は存在する！そしてお前達を殺しにくるぞ！」

「あん？なんだお前は」

カルロスは立ち上がりその声がした檻の方に近づいた

そこには黒髪の青年がいた

「俺の名はニコ・ルチアーノ！オハラ出身の考古学者だ！」

ルチアーノはそうカルロスに叫んだ

カルロスはルチアーノを見ながら 言った

「名前なんか聞いてねえんだよ…なんで喋ってるんだ？あ？」

そうカルロスは言う

腰につけていた銃を手に取り

ルチアーノに向けた

しかし、ルチアーノは怯む気配も見せなかった

「ツツツ！テメームカつくんだよ！」

カルロスが銃の引き金を引こうとした瞬間

ゴゴゴゴゴゴ…の音がしたかと思うと
カルロス達の船の後方にドーンつと水飛沫をあげて
ジョーンズの船が浮上してきた！

「何だありや！」

カルロスはそう叫んだ瞬間！

ジョーンズの船の船首の砲門が開いたかと思うと

中から三連装のカノン砲が出てきて

カルロスたちの船を攻撃し始めた

カノン砲から砲弾が飛んでくる度に

カルロスの船は大きく揺れ

当たった砲弾はカルロスの船をめちやくちやしていった

「「うわあああああ！」」

カルロス船は瞬く間にボロボロになり

カルロス達がいる甲板上にあったものは瞬く間に壊されていった

一発の砲弾がマストに当たり

マストがバギイツ！と音を立てて倒れた

カルロスの船はもうマストの柱は折れ
航行ができない状態になっていた

「ぐう…クソオ！」

カルロスは瓦礫の中から立ち上がり

周りの見渡した

所々焦げた煙のせいで見えにくかったが

甲板上がまるで瓦礫の山とかしていた

「ううう…！」

カルロスは呻き声聞こえた方を見ると

瓦礫に埋もれて倒れているルチアーノを見つけた

「テメーのせいだ！テメーのせいでこうなったんだ！死にやがれ！」

カルロスは八つ当たりの様なことをルチアーノに叫ぶと

近くに落ちていた銃を手に取り

銃口を向けた！

その時！カルロスの後ろから

ゴツ！ゴツ！ゴツ！つと何かを引きずる音が聞こえてきた

カルロスは恐る恐る振り返るとそこには

ジョーンズが立っていた

「ふうふう……死ぬのは怖いだろうか？」

パイプの煙を吐きながらジョーンズはカルロスに言った

すると、カルロスはジョーンズに銃を向けて撃った

「へへへー海の悪霊だが高なんだか知らねえが銃には勝てねえだろ？」

俺の船をめちゃくちゃにした罰だ！」

そう言ったがジョーンズは倒れる様子はなく、

カルロスの近くでカトラスを触った

するとカルロスの首にロープが絡まり

カルロスを持ち上げた

「グエエエエ！」

ジタバタもがいてるカルロスに近づき

ジョーンズは言った

「ここで死ぬか？それとも俺の船で百年間水夫として働くか？

どちらかを選べ！」

カルロスは苦しみながらも

ジョーンズの目を見て言った

「分かった！誓うよ！ハアツ！…あんたの船で働くよ！グウェー！」

ジョーンズはカルロスの言ったことに満足気に頷くと

コートの中を探り、中からぶつ切りになったサメの頭を出してきて

カルロスの身体に押し当てて言った

「integration 体 化 ！」

そう、ジョーンズが叫んだ途端

サメの頭がカルロスの身体に沈み込み

カルロスの身体がウニウニと小刻み動き出して

カルロスは苦しみ始めた

「うわあああああ！何だこりゃ！身体が！ぐぎいやああ！」

カルロスは叫び声をあげていたが次第に声をあげなくなり

終いには喋らなくなってしまった

その間にカルロスの身体がまるで粘土のように練られているようになり

すると、カルロスの身体が薄皮で包まれたかと思うと

薄皮が破け、中から

サメと人間が一体化したようなバケモノが出てきた

ジョーンズはにんまり笑うと

そいつに近づき言った

「どうだ？目覚めは？」

すると、バケモノは言った

「最高です…船長」

「名前は覚えているか？」

「いいえ…船長」

「なら俺が名付けやろう！お前はマツカスだ！」

「分かりました…船長」

ジョーンズは少し嬉しそうに笑うと

マツカスに命令した

「マツカス！この船を近くの島に捨ててこい！」

「アイアイ…船長」

マツカスはそういうと甲板から降りていった

ジョーンズは自分の船に戻ろうと甲板を歩こうとして後ろを向くと

ルチアーノがこちらを不思議そうに見ていた

ジョーンズ言った

「なんだ？お前らもアイツのようになると思ったか？

安心しろ、お前らは近くの島で逃がしてやる…二度と捕まるなよ」

そう言って、ジョーンズは帰ろうとすると

ルチアーノはジョーンズの前に立った

「少し頼みたいことがある…」

「なんだ？」

「俺も連れて行ってほしい！」

「は？」

ジョーンズは困惑の表情を浮かべていると

ルチアーノは続けた

「アンタについて行ったら、なにか発見できそうなんだ！

頼むこのとおりだ！」

ルチアーノはそういつて土下座をした

ジョーンズは少し困ったが

ため息少しついで、ルチアーノを見て言った

「うちの船は少し特殊だぞ？それでもいいんなら来い」

ルチアーノは土下座をしていた顔を上げ、ジョーンズの方を見て笑った

デイヴィー・バック・ファイト1

ジョーンズの船は無人島の近くに停泊していた

ジョーンズはパイプオルガンの前ある

椅子に腰掛けながら

変身を解いた状態で座っていた

「ふう……たまたま奴隷船を見つけて

偽善で助けたけど……失敗だったかなあ……」

ジョーンズは座りながら悩んでいた

ふと、煙管をくわえ

少し吸ってはいた

「まあ……でも……」

普通の乗組員を一人手に入れたし、

それにしてもあのニコ・ルチアーノ……って

もしかすると、ロビンの父親なのかもなあ……」

そう、ジョーンズはぼうつと考えていると

何かの飛翔音が聞こえたかと思うと

船が大きく揺れた

「!!!
何事だ！」

ジョーンズは揺れた衝撃で

椅子から落ちたが

慌てて立ち上がり

能力でいつもの姿に変身した

そして、船長室の扉を勢いよく開けた

すると、マッカスがこちら向かって走ってきていた

「船長！海軍です！」

マッカスが叫ぶと

またジョーンズの船の近くに砲弾が着弾して

船が揺れた

「ぐうッ！俺の船に手を出したことを後悔させてやる！」

そう、ジョーンズが言うと

腰につけているカトラスを掴み動かすと

帆をまとめていたロープが自然に緩まり

帆をはりはじめた

瞬く間にジョーンズの船は動き出し

海軍の軍艦がいる方へと向きを変え始めた

「キャプテンジョーンズ！僕にもなにか出来ることは無いかい？」

ルチアーノが下の船室から出てきて

ジョーンズにそう言った

ジョーンズはチラツとルチアーノを見ると

マツカスに命令した

「マツカス！ルチアーノを連れて、アレでクラークンを呼び出せ！」

ジョーンズはそう叫ぶとカトラスを抜き

海軍の軍艦の方に向けて構えた

すると、船首にあつた砲門が開き、三連装のカノン砲が出てきた

ジョーンズは持っているカトラスを大きく上に掲げ

そして振り下ろして言った

「撃てエエエ！」

ドン！つとカノン砲が発射され始め

海軍の軍艦を攻撃し始めた

その頃、ルチアーノ達は

ある装置の前に立っていた

「マツカス…さん？で良かったかな？これはなんだい？」

ルチアーノはそう訪ねた

マツカスは面倒くさそうにしながら言った

「このパドルを回すと、ここが浮き上がって急に落ちる。そうすると海に衝撃が走るの

さ…そうすればクラーケンがやってくる…」

マツカスはそう言うのとパドルの側面に出ている

棒を掴むとパドルの周りを周り始めた

その様子を見て、ルチアーノも慌てて手伝い始めた

10回ぐらい周りを回るとパドルの真ん中から

何かが浮き上がったかと思うと

急に落ちた。すると、海に衝撃が走った

グオオオンつと何かが鳴く声が出たかと思うと

ジョーンズの船の近くから大きなタコの触手が現れた

ジョーンズはそれを見ると叫んだ

「クラークン!!あの海軍の軍艦を沈めろ!連中を生かして返すな!」

またクラークンは鳴くと

触手が海に沈んでいき

カノン砲が砲撃している海軍船の方へと向かっていた

ジョーンズは抜いていたカトラスを鞘に戻して

海軍の軍艦の様子を望遠鏡で見ている

海軍の軍艦はカノン砲の攻撃でそれなりに被害が出ていたが

軽微の様だった

「海軍共め…慌てて火を消したりしてるとして事は、まだ戦う気はあるみたいだな。だが、

それも無駄だあ!」

ジョーンズが様子を見ていると

軍艦の近くの海が泡立ち始めたかと思うと

クラークンの触手が軍艦の周りから現れ始めた

海兵たちはクラークンの触手に銃撃や斬撃をくわえていたが

クラークンの触手は傷一つつかなかった

すると、クラークンの触手が軍艦の方へと倒れ始め

軍艦を破壊し始めた

そう様子を見て、ジョーンズはニンマリと笑いながら言った

「これでいい……これこそが俺だ……マツカス！ クラーケンが軍艦を破壊し終わったら生存者を探してこい！」

その言葉にマツカスは聞いた

「助けるんで？」

「いいや……ただ死なせるのではなく……少しギャンブルをな……」

そういうとジョーンズは自分の触手で

ポケットを漁り、中からタコの絵柄のコイン出してきて

手の触手で弄び始めた

「キャプテンジョーンズは意地悪な性格なんだ」

と、ルチアーノがその様子を見ながらクスリと笑った

デイヴイー・バック・フアイト2

保存日時：2017年03月15日（水） 23：47

「ぐううう…ハッ！」

気絶していたモモンガ曹長は

目を覚まし、自分の体の上に乗っていた瓦礫をどかして、立ち上がると周りを見渡した

「これは…なんという事だ…」

モモンガは周りの光景を見て絶句した

さつき現れた化物のせいで、軍艦は真つ二つに折れ今にも沈みそうになっていた。

「さつきのバケモノのせいだ…クソ！」

そう言ったモモンガは

いってもたつてもいられなくなったのか

瓦礫の山になったところを見て

そこへ走り出した

「誰か！誰かいないか！」

そうモモンガが叫ぶと

瓦礫の山から呻き声が聞こえた

「うううう …！」

慌ててモモンガは、瓦礫を押しどけると瓦礫の山から海兵が出てきた

モモンガはその海兵をかつぎ上げると大声で言った。

「しつかりしろ！大丈夫か！」

そうモモンガが海兵を揺ると、海兵はゆっくりと目を覚ました

「ハッ！うわああああ！助けてくれえ！」

海兵は目を覚ました途端！喚き出した！

「しつかりしろ！大丈夫だ！あの化物はいない！安心しろ！」

そう、モモンガが叫ぶと

喚いていた海兵はその言葉に

キョトンつとすると辺りを見渡し

モモンガの方を見て言った

「曹長殿…？モモンガ曹長！ありがとうございます！！」

海兵は涙を流しながら、モモンガに抱きついた

モモンガは海兵に向かって言った

「よく生き残った……」

そうモモンガは言うのと海兵を見た。

すると、海兵は言った

「あのタコのバケモノの触手が軍艦に倒れてきた時……もうダメかと……！ グランツ中将は！」

そう、言うのと海兵はヨロつと立ち上がりあたりを弱々しく見渡した。

周りの状況を見て顔は青くなっていた。

その様子を見て、モモンガは悔しそうに歯をギリツと噛んで

この状況になる前の事を思い出していた

——時間前——

「カルロスの船はまだ発見できんのか！」

そう部下に檄を飛ばしているのは

海軍本部中将 鉄血のグランツだった

「ハッ！ まだ見つからないであります！」

そう、一人の部下が言った

そういうと更にグランツは声を荒らげた

「これだから、最近の奴は！たるんどる！」

グランツは叫ぶと

部下の一人を殴った

「グッ！」

殴られた部下は倒れそうになりながらも

すぐピシツとなり

グランツの方を見た

すると、高台に登って周りの様子を見ていた部下が

グランツに叫んだ

「グランツ中將！前方にある無人島の近くに停泊している

謎の船を発見致しました！」

その言葉にグランツは近くで望遠鏡使ってる部下から

望遠鏡を乱暴に奪い取ると

その方向を見た

確かに無人島の近くには1隻の船が停泊していたが

まるで幽霊船ようだった

その船を見て、グランツはある事を思い出した

それは自分の同僚であるセンゴクが報告していた

あの悪霊の話を、グランツは急いで部下に対して言った

「何をしている！貴様ら！さっさと砲撃準備をせんか！」

グランツは叫ぶと、部下達は慌てて用意を始め出した

すると、グランツに向かって走ってくる

モモンガの姿があった

「グランツ中将！なぜあの船を攻撃するのですか！あの船は海賊船でも何でも無いんですよ！」

そうモモンガはグランツに言ったが

グランツはモモンガを殴り飛ばすと叫んだ

「この腰抜けが！！攻撃する理由などどうでもいいのだ！怪しければ、沈めるまでだ！」

グランツはモモンガは睨んだまま

部下達に言った

「撃ち方よおおい！撃てエー！」

そういうと、砲門から砲弾が発射され無人島の近くに停泊している船に襲いかかっ

た。しかし、発射された砲弾は一発も命中せず、全て船の近くに落ち水飛沫をあげていた。

「この馬鹿どもが！しつかり狙わんか！」

グランツはそう部下に檄を飛ばしていると、停泊していた船がゆつくり動き出し船首をこちらに向けたと思うと砲撃し始めた！

ヒュッと風を切るような音がすると、マストにあの船の砲弾が命中しマストが音を立てて崩れていった。

「グッ！マストが！」

モモンガはそう言うと、走り出して腰につけていた刀に手を伸ばし

居合いでマストを切った！倒れてきたマストは二つに切れ海に落ちていった…。

しかし、あの船から発射される砲弾は、まだまだ降り注ぎ…

船首に付いていた砲台も完全に破壊され沈黙した。

「おのれえ！砲台が！」

そうグランツは悔しそうに叫んだが、もうこの軍艦には相手を攻撃するほどの能力はなくなっていた。

「おい！急いで負傷者の救護に当たれ！」

そうモモンガは近くにいた海兵に叫んだ。

「ハッ！」

海兵は急いで負傷者の救護を行おうとしたが、グランツに止められた。

「何をしている！馬鹿共！誰が勝手に持ち場を離れていいと言った！」

グランツの言葉にモモンガは怒りの色を顔に見せながら、グランツにじり寄りと言った。

「中将！それはあまりにも酷いです！我々は仲間ではないのですか！」

「弱い者は淘汰される！それが世界だ！」

そう、モモンガとグランツが言い争いをしていると、ドンツと海が振動したかと思うとオオオオと何かか鳴く声が不気味に鳴く声が聞こえた。

「なんだ？何の音だ！」

グランツは周りを、不安そうに見渡した

すると、軍艦の左右の方向から

軍艦の何倍もあるかという大きなタコの触手が現れた！

「なんだ……この……化物は！」

グランツが驚愕の声を上げていると、そのタコの触手はゆつくりと軍艦に向かって倒れだした。

「「うわあああああ!!!!」」

モモンガは何とか攻撃しようとしたが

「させん！うおおお！グッ！」

倒れてきた瓦礫が身体にあたり

失神してしまった

その後、船は破壊された

—————

モモンガが沈む前の事を思い出していると

破壊された軍艦の近くに

例の船が近づいてきた

その瞬間、シュルルルつと音がしたかと思うと

モモンガ達の足にロープが絡まり

吊り下げられた

「ぐお！なんだ！これは！」

必死に解こうとしたが外れなかった

すると、吊り下げられていたロープたちが動き始め

海の上に浮いている甲板の残骸に集まり始めた

すると、周りの所からもロープが来ており

そのロープの先には生き残った海兵たちが吊り下げられていた

「ほかの連中も生きていたのか…」

その様子を見て、海兵たちがまだ生き残っていた事に胸をなでおろした。モモンガだったが、周りを見渡して連れてこられた連中の中にグランツ中将がいることに気づいた。

「グランツ中将……無事でしたか！」

そう、モモンガは言ったがグランツの様子を見て言葉を失った。

グランツ中将は体が操舵輪と融合しており

目は虚ろになりながら、何かをブツブツ呟いていた

「俺達は船の一部……俺は船員……船の一部……」

モモンガが呆然としていると

例の船の方からパイプオルガンの音が不気味に鳴り響くと

モモンガ達の近くにあったマストから、

サメと合体したような男が現れるところ言った

「お前らに船長が会いたがつてる…拒否するのは勝手だが、拒否するとクラークンの餌になるぞ？いいな？」

男がそう言うのと、近くの海兵が怯えながら、ゆっくりと頷いた

すると、男は腰にぶらさげていた貝を口に当てると吹いた！貝はピイイイ！ツと鳴った。

すると、モモンガ達がいる海の上に浮いた甲板の板が、大きく揺れ浮き上がった

モモンガは、びっくりして甲板の隙間から下を見ると、クラークンの足が甲板を支えながら上に押し上げていた。

瞬く間に、モモンガ達は例の船の上に押し上げられると

ガタンッと甲板にモモンガ達が落とされた。

タコの顔をした男が義足の音を響かせながら、モモンガに近づいて来た

顔を近づけて、煙を吐きながら言った

「どうだ？…死ぬのは怖いだろうか？」

その言葉に海兵達が固まっていると

その化物は左の手にコイン三つ取り出して言った

「だが…お前らにチャンスをやろう…。生かしてやるチャンスをなあ…？この三つコイ

ンを賭けてな…。

しかし、負けたらその中将の様にお前らも俺の船の一部にしてやる…。分かったな？」

男がそう言うと、モモンガの近くにいた海兵は顔を青くしながら

頷いていた

「…宜しい…なら始めようか

俺の名を冠する（デイヴィー・バック・ファイト）を！」

デイヴィー・バック・ファイト3

「1…2…3…4…5…6人か…なら、この中から代表者3名が俺と戦ってもらおう…」

そう、ジョーンズが海兵たちの前でそういつたその時

「デイヴィー・バック・ファイトだど？…ふざけるな！」

モモンガは怒りのこもった声で叫んだ！

ロープで縛られた体をもがくと、ロープをほどき目の前にいるジョーンズに切りかかろうとした！

しかし、ジョーンズがまたカトラスをいじくると、更に体にロープがきつく巻きついた。

「おいおい…せつかく生き残るチャンスをやろうとしてるのに…」

死に急ぐな海兵君？」

そういうと、ジョーンズはマッカスの方を見て、合図を送るとマッカスは船室から、樽を転がしながら運んできて捕まってる海兵とジョーンズの間には置いた。

「さアアア…まずはサイコロで決めようかア…」

そういうとジョーンズは自分の服の中から、サイコロと少し淵のかけたどんぶりを出してきた。

「ワノ国ではサイコロを使ったゲームの中にチンチロリンっというゲームがあるそう
だア…俺よりも出目がデカくないとお前らの負けだア…」

そう、ジョーンズは楽しく目を細めながら、海兵達を見た。

そして、ジョーンズがまた目でマツカスに合図を送ると、モモンガの横にいた海兵を
掴んで目の前にある樽の前に座らせた。

「ヒイイイ！助けてくれエエ！」

そう、海兵が叫んでいたが、マツカスが海兵の首に剣を突き立てると言った

「キャプテンは…発言を許可していない…次、叫ぶとお前を殺すぞ？」

海兵はマツカスを見ながら、こくこくつと涙を流しながら頷いた

「あまり脅してやるな…マツカス…怖がってしまっだらう？」

「分かりました…船長」

そう言いながら、ジョーンズもマツカスもニタニタと嫌らしく笑っていた

「さア…始めようか…第1のゲームだ！」

ジョーンズがそう言うと、海兵の前にサイコロを投げてよこした

「さア…サイコロを振れエ…万が一にもお前が負けると、お前の責任でお前ともう一人

の仲間が俺の船の一部になるんだからなア？」

そう、ジョーンズは海兵を見て、蔑むように笑った。

海兵はあまりのプレッシャーに手が震えているようだった

「うううう……うわあああああ！」

海兵はそう叫ぶと樽の上に置いてあつた。

サイコロを掴んで、どんぶりの中に勢いよくサイコロを投げ入れた！

カランカラン！つとどんぶりの中でサイコロが転がる様子を海兵は固唾を呑みながら、見ていた

すると、サイコロは転がらなくなりカランつと音を立てて止まった

「二二二か……なかなか良いのを出すじゃないか？」

ジョーンズの言葉に一瞬間が明るくなつたが、ジョーンズがどんぶりの中に手を突っ込みサイコロを持ち上げて振つた。

カランカランつとまたサイコロが転がりだしました止まった。その出た目をジョーンズは見る

口角を上げながら、ニイつと笑つて海兵の方を見ると言った。

「残念だったなあ……海兵くうん

出目は四五六……俺の勝ちだア！」

ジョーンズのその言葉に海兵はみるみるうちに顔が青ざめ、恐怖の表情が現れた。「さアアア……負けた君から、まずは俺の船の一部になってもらおうか！」

そう、ジョーンズが叫ぶと目の前に座っている海兵の手を掴んだ。

すると海兵の足がみるみるうちに甲板に沈み込み始めた。

「ヒイイイ！俺の足が！助けてくれ！嫌だアアア！」

モモンガはその様子を見て驚愕の表情を浮かべていた

「何だと！お前は！何の能力者なんだ！」

モモンガの言葉にジョーンズは海兵の手を掴んだまま言った

「俺はマゼマゼの実を食べた！融合自在人間！こうして、人間を無機物などに混ぜ込むことも出来る！」

ジョーンズに手を掴まれていた海兵は下半身は既に甲板と一体化しており泣き叫んでいた。

「俺の体があああ！うわあああああ！」

その様子にジョーンズは海兵の頭を掴むと一気に海兵を混ぜ込んだ。

「ふう……これで一人、さアもう一人だ……」

「誰にしよかなア……ん……こいつにするか」

そうして、海兵を掴むと船に混ぜこみ始めた。

「やめてくれ！俺を船に混ぜないくれ！許してくれええ！」

そう海兵は叫ぶがジョーンズは笑いながら言った。

「恨むんなら、負けたあの海兵を恨め…それに安心しろ、死にはしない…その代わりに永遠に苦しみ続けるだけだ…俺の船の一部となつてな！」

笑いながら、ジョーンズは海兵を甲板に混ぜ込んでいった。

そうして、海兵を混ぜこみ終わるとまたモモンガ達の方を見て言った

「ギア…第2のゲームを始めようか？海兵諸君？」

その言葉を言ったジョーンズの顔を見て

モモンガは恐怖の表情を浮かべた

デイヴィー・バック・フアイト4

「次は…そうだな…ロシアン・ルーレットでもしようか？」

ジョーンズはクククつと笑うと

ルチアーノの方を見て言った

「ルチアーノ！俺の船室に行つて、林檎の入ったカゴを持ってきてくれ」

そう、ジョーンズがルチアーノに命令すると

ルチアーノは目を細めて口には笑みを浮かべながら言った

「仰せのままに、キャプテンジョーンズ…」

ルチアーノはそういうと

ジョーンズの船室へと歩いていった

暫くしてルチアーノがカゴを持って出てきた

「これでいいのかな？キャプテン？」

「そうだア…これでいい」

ジョーンズは、ルチアーノが持ってきたカゴを受け取ると

海兵達の前に置いてある樽の上に置いた

「では…海兵諸君…第2のゲームの始まりだア！」

まずは、このカゴの中には美味しそうなリンゴが四つ入っている…

しかーし！この四つのうち一つは、俺の能力で爆弾を混ぜ込んだ特製リンゴだ！もし一口でも齧ってしまうとー発でお陀仏だからなあ？

気をつけてゲームをしようじゃあないか？」

ジョーンズはそう言うのと、愉快そうに海兵達を見ながら

目を細めて笑った

海兵達はジョーンズの言葉に身体を震わせながら

怯えていた

「俺にはまだ家族がいるんだ！死にたくない！」

「ヒイイイ！何でこんな目にい！嫌だア！」

「神よ！我々を救い給え！」

海兵達は口々に恐怖に染まった言葉を吐いていた

しかし、モモンガだけはジョーンズを睨んで目を離さなかった

「さアア…誰に挑戦してもらおうかなア？」

ジョーンズは楽しそうに片腕の蟹の爪を動かしながら

海兵達の顔を覗き込みながら、品定めをしていた
そして、十字架を握った海兵の前で立ち止まると

海兵の頭を掴んで、顔を近づけて言った

「この後に及んで、神様頼みかア？諦めろ！お前らは俺の船を攻撃した時から神に見放
されてるのさ！」

「黙れ！悪魔め！神は祈った者に助けの手を差し伸べてくれるのだ！」

海兵はジョーンズの言葉に反論した

ジョーンズはその言葉に一旦固まると

その海兵の頭を掴んだまま

樽のある所まで引きずり出した

「なら、お前の信仰心とやらを試してやろう

お前の神は、祈れば助けてくれるんだろう？

さあ…祈れえ！…私をお救い下さい！…ンンン…悪しきものからア！

つてなあ！」

ジョーンズは、歯をむきだしにしながら笑うと

その海兵を樽の前に座らせた

ジョーンズはドカッと座ると言った

「さあ…カゴに手を突っ込んで

リングを一個掴んで、一口齧れ…

さあ…始まりだア！」

ジョーンズがそう言うのと

海兵はカゴの中に手を突っ込んだ

海兵は暫く手を突っ込んで

思案顔になりながらも

リングを一個掴んだ

「本当にそれでいいんだな？間違うと一瞬で頭が消し飛ぶぞ？」

ジョーンズはククツと笑ったが

海兵はジョーンズを目に恐怖の色を浮かべながら

睨んで言った

「うるさい！悪魔め！お前の甘言など受けないぞ！

神は私を必ず救ってくださるのだ！」

その言葉にジョーンズは

ムツとしながら言った

「なら、早く齧れ…」

怖いのかア？」

その言葉に海兵は少し小刻みに震えながらも

リングゴに口をつけて勢いよく齧った

シャクツツという音がしたが、爆発はしなかった

「チツ！成功したか…」

次は俺の番だな」

そう言うのと、ジョーンズは手をカゴに突っ込んで

すぐにリングゴを掴んだ

そして、少し顔の触手で触ると

リングゴに口を近づけ齧った

しかし、ジョーンズも爆発はしなかった

「俺も爆発しなかったみたいだな

さあ…次で決まるぞお♪」

ジョーンズは楽しそう笑いながら言った

「さあ…お前の番だ…」

早く選べ！ 神に祈れば当たりかハズレかわかるかもしれないぞオ？」

そう、ジョーンズは海兵に顔を近づけて言った

しかし、海兵は目を瞑りながら、片手で十字架を強く握り

何かを呟きながら、カゴに手を突っ込んだ

少しして、海兵はカゴから

リンゴを掴んだ

「それに決めたんだな？なら、俺はこれにしよう…

それではア…一緒に齧るぞお？」

ジョーンズがそう言う

海兵は手が震えながらもリンゴを口に近づけた

そして、ジョーンズもリンゴを口に近づけ

一斉に齧った

ガリツとジョーンズの方から音がした

シヤクつと海兵の方からも音がした

海兵は何も起きなかった

そして、捕まっている仲間達の方を向くと

ニコツと笑って近づこうとした…

しかし、その瞬間

海兵は姿も形もなく吹き飛んだ

モモンガは信じたくなかった

目の前で仲間が吹き飛んだ事実を

もうもうと立ち込める煙の匂いと血の香りを

「うおおおおおあああ！」

モモンガは叫んだ

目の前で死んだ仲間を救えなかった自分が情けなかった

そして何よりもあの悪霊をいつか絶対に殺してやる！と

そのモウモウと立ち込める煙の中から

手が伸びてきたかと思うと

デイヴィー・バック・ファイト5

「次の勝負は何にするかあ？ククッ…」

ジョーンズはモモンガ達の前に立つと顎に手をつけながら、ニヤニヤ笑いながら見渡していた。

モモンガは今にも目から血の涙を流しそうな悔しそうな表情を浮かべながら、ジョーンズを睨みつけた。

そして、ジョーンズはモモンガの前に立つと言った

「ふむ？いい表情をしているなあ…海兵君？

…よし！次のゲームを決めたぞ！」

ジョーンズはそう言うと、カトラスに手をかけ動かし始めた。

すると、モモンガに巻きついていたロープが動き始め甲板の外へとモモンガを引っ張り始めた。

「クソッ!!」

モモンガはロープを外そうともがいたがロープはモモンガを引っ張って、海面に浮いた甲板の瓦礫の上にモモンガを落とした。

「グッ!!」

モモンガが瓦礫の上に落ちると体に巻きついていたロープが外れた。

「何をさせる気だ!! 化け物め!」

モモンガは立ち上がると、甲板から見下ろしていたジョーンズを睨んで叫んだ。すると、ジョーンズは片手に持っていた刀をモモンガに投げて言った

「さあ!最後のゲームだ!その剣で俺の乗組員と死闘をして貰おう!」

ジョーンズ立つてる横からサンゴ礁の様な塊になった。

グラランツ中将が立っていた

「グラランツ中将! 貴様あ! 中将に何を!」

「いいや? こいつは君の知ってる中将ではないぞオ?

俺の船の新しいクルーだ! グライアス! あいつを叩き潰せ!」

「アイアイ…船長オ! グオオオオ!」

グライアスは叫ぶと、モモンガのいる瓦礫の所に飛び降りた

グライアスが着地すると海の上に浮いた甲板の瓦礫が大きく揺れた

「中将! 気を確かに! 目を覚まして下さい! 貴方は海兵です!」

モモンガはそう叫ぶとグライアスを見た

しかし、グライアスは虚ろな感じでブツブツと何かを呟いていた

「俺は、船の一員…船の一部！船の一員！船の一部！お前を殺すううう！」

ゴライアスはそう言うのと突進してきた

モモンガは慌てて避けるが

ゴライアスのデカイ体のせいで

運悪くモモンガは喰らってしまった

「カハツ…！ググウウ…！」

「殺すう！殺すう！」

倒れたモモンガにまた突っ込もうと、ゴライアスは走り出してきたがモモンガは慌てて立ち上がり避けながら言った。

「中将オ！思い出してください！」

甲板の上からジョーンズはその様子を見を下ろしながら

モモンガに言った

「おいおい？逃げてばかりだと勝負にならないか？ちゃんと戦わないと死んでしまうぞお？」

モモンガはジョーンズは睨みつけるが突進をしまくるゴライアスを避ける事で精一杯だった。

「クソオツ！」

とうとう、モモンガは刀を抜くと、ゴライアスとの間を取り構えた

「中将！すみません！」

モモンガはそう言うのと、居合切りをした！

斬撃はサンゴ礁の様になったゴライアスの体を破壊した

「ぶぉぉぉぉぉぉ！俺えの身体があぁぁ！」

ゴライアスは叫びながら、ボロボロの体でモモンガに向かってきた

「少し痛いですが我慢してください！」

そして、また刀を構えると、向かってきたゴライアスに居合切りをした

すると、向かってきた筈のゴライアスは、モモンガの後ろで地響きを立てて倒れた

「峰打ちです…すみません…中将…」

哀しそうな声を出しながら倒れたゴライアスを見ながらモモンガに言った

その様子を眺めていたジョーンズは悔しそうにしながら、叫んだ！

「それまでだ！この勝負はお前の勝ちだぁ！海兵君！」

そしてジョーンズが後ろを向いた瞬間！モモンガは刀に手をかけながら、ジョーンズのいる甲板まで跳躍した

「ジョオオオオンンンズウウウウ!!!」

ジョーンズはその怒声に気づき後ろを振り返ったが、モモンガの剣が目の前に迫ってきた。

「ザシユウ!! つと音がするとモモンガの斬撃がジョーンズを切り裂いた
「やったか?!」

モモンガはそう叫んだが、片手のカニの爪がモモンガの首を掴んだ

「何! グツ!!」

「油断しすぎてたなあ……ここまで俺を傷つけたのはア……」

お前が初めてだあ……」

「!! お前! その顔!」

「ん? ああ、素顔が見えてしまったてるか……」

モモンガの斬撃のせいで、能力で顔を変えていたのが切り裂かれたせいで、素顔が見えてしまったのだった

すると、ジョーンズはカトラスを触りながら、モモンガの方を見て言った

「気に入ったあ! お前は助けてやろう……しかあし! 俺に逆らった分はもう一人の海兵に償ってもらおうとしよう!」

そして、後ろに振り返ると

ロープで縛り付けられていた海兵を掴むと言った

「マツカス！この海兵を連れていけ！」

「分かりました…船長お…」

「嫌だあ！モモンガさん助けて！うわあああああ！」

マツカスに引きづられながら、海兵は叫び声をあげながら、船倉へ連れていかれた
「いつそのこと俺も殺せ！」

「何故殺さなくてはならん？お前を殺してもなんの得にもならんからなあ？お前は俺の
噂を広める駒になって貰おう！」

モモンガはもがきながら、ジョーンズに言ったが、ジョーンズは笑いながらその言葉
をかけた

「ルチアーノ！ボートと救命発信用電伝虫を用意しろ！」

「わかったよ！キャプテン！」

ルチアーノはボートを海の上を下ろし始めた

「それではまた会おう…海兵のモモンガ君？」

そう言うともモンガを船の手すりまで引つ張っていくと、モモンガを突き落とした
海に落ちたモモンガは、おろされてあつたボートに、何とかしがみついた
すると、目の前に浮いていたジョーンズの船はゆっくりと沈んでいった

「お前を許さないぞ！ ジョオオオオンズウウ!!!
モモンガの怒りの声が静かな海に響き渡った
」

悪霊の爪痕 1

「しつかし…見つからんのくグラント中將は…」

そう眩きながら、軍艦の船首で煎餅を齧りながら、ガープは海を眺めていた。何故、ガープがグラントを探しているかと言うと、コングからの命令だったからだ。

「ガープ准将！近くの海域から救難信号を受信しました！」

慌てて部下の海兵がガープに近づいてきた

「何？救難信号じゃと？どこらへんだ？」

「ここより、西に約12キロ進んだ方角です！」

「そうか、救護をするか！おい！今から救難信号の受信した方角に船を向けろ！急げ！」

ガープは大声で笑いながら、部下に指示を出した

「ハッ！了解しました！」

海兵は敬礼をすると他の部下達も慌てて動き出した。海兵たちは、マストのロープを操作しマストに風を受けるようにして、船の速度をあげていった。

そうして、軍艦は目的の海域まで到着した。

「ガープ准将！目的の海域に到着致しました！」

「そうか！ガツハハハ！急いで周りを探索するぞ！」

そうして、海兵たちは周りの海を見渡していた。すると、見張り台にいた海兵が叫んだ！

「ガープ准将ー！2キロ先にボートが浮いてます！」

あれは…：グランツ中将の軍艦の救命ボートです！」

「何じゃと？どれじゃ？」

ガープは目を凝らして海を見ると、海軍のマストが付いた救命ボートが浮いており、よく見ると救命ボートには海兵らしき人物が倒れていた。

「おい！誰が乗つとるぞ！急いで救助するんじゃ！」

ガープは部下達にそう命令すると、部下達は慌ただしく動き出した

軍艦は救命ボートに近づき船の手すりからロープをおろし始めた。

一人の海兵が救命ボートに降りると、倒れている海兵の顔を見ると叫んだ！

「ガープ准将ー！倒れている人物はモモンガ曹長です！」

「何じゃと？モモンガか！ワシにも確認させろ！」

そう、部下の言葉を聞くと、ガープは甲板からボートに飛び降りた！

ガープが飛び乗ったせいで救命ボートは、ミシツと軋む音がしてボートが大きく揺れた。

「もう！危ないじゃないですかー！ガープ准将！」

「っ！っ！っ！すまん！すまん！」

ガープは部下の注意に耳を傾けながら、豪快に笑っていた。

「ううっ……」

モモンガは少し呻き声あげた

「!!ガープ准将！モモンガ曹長はまだ意識があります！」

「うむ……わかっとする！おい！お前らー！早くこいつを運んでやれ！」

ガープがそう叫ぶと、救命ボートにロープの付いた担架が降ろされ

担架にモモンガを乗せると上にあがっていた

「ん？何じゃ？これは？」

ガープがモモンガを救助して、自分も船に戻ろうとした。

その時！モモンガの倒れていた近くに救難信号電伝虫とは

違う電伝虫が落ちていた。

「これは……映像電伝虫か？」

ガープが拾ったその電伝虫がこの後、嵐を呼ぶ事となるとはまだ誰も知らない……。

悪霊の爪痕2

「うううう…ハッ！ここは…？」

モモンガは病室で目が覚めベットから這うように起き上がった。

「俺は…？…ぐっ…！うううう…！」

しかし、起きあがった途端体の傷が傷んだ。

すると、病室の扉がガチャッと開いた

「おー…！やっど起きおったか！元氣そうでなによりじやわい」

「ガープ准将！ここは！」

「安心せい！ここはマリolfオードの海軍病院じや！」

「マリolfオード…俺は…助かったのか…」

ガープの言葉にモモンガは、まるで糸の切れたマリオネットのようにベットにへたり

こんだ。

「ガープ准将…俺は一体どれだけ寝ていましたか？」

「そうじゃのうく漂流していたのを助けてから約10日ぐらいかの」

「10日もツツ…！！」

「それよりも何があったんじや？グランツ中將はどうした？」

モモンガはガープの言葉に

怒りと哀しみの混じった表情を浮かべた

「中將は……ッ！化け物に殺されました……ッッ！」

モモンガは悔し涙を流しながら

俯いた状態で語り出した

「仲間の海兵達も……ッ！皆！怪物にッ！食われ！誰も助けられなかった！」

助けを求めていた仲間の手も掴めなかったッッ！」

「そうか……。それは辛かったのう……。そいつの名はわかるか？化け物の名じや」

ガープの言葉にモモンガは怒気をはらんだ声で叫んだ

「奴の名は……ッ！デイヴィー・ジョーンズッッ！！海の悪霊と名乗っていましたッッ！」

私はッッ！奴が憎い！」

「そうか……わかったわい……お前さんは少し休んどれ……ワシらが敵をとってやる……」

ガープはそう言うともモンガの病室を後にした

—————

くく海軍大広間くく

「では、グランツ中将の一件を説明させていただきます!!」

モナコ中尉は海軍の将校達がたくさん座っている前で説明を始めた

「うむ…頼む」

コング元帥はモナコ中尉を見ながら言った

「生き残ったモモンガ曹長と電伝虫の履歴を頼りに推測ですが…」

まず、グランツ中将は、「海賊」連れ去り”のカルロスの討伐の為、スパニョーラ諸島に向かいました」

モナコは海兵達を見ながら、黒板に貼り付けてあるカルロスの手配書を指し棒で指し海図にも指した。

「しかし、目撃情報のあったスパニョーラ諸島近海にはカルロスの船団を影はなく、グランツ中将は停泊していそうなスパニョーラ諸島の入江を搜索し始めました様です」

モナコ中尉は自分の後ろのボードに貼られている海図を挿し棒で指した

「スパニョーラ諸島…。あの小島が沢山ある所か…」

手前の席に座っていたゼファー大將はそう呟いた。

「そして、グランツ中将はある島の影に1隻の船らしきものを発見し、そして攻撃をした模様であります！」

モナコ中尉の言葉にセングクは顔を顰めて言った

「その船はカルロスの船だったのか？」

「いえ…？違う様です…。生き残ったモモンガ曹長の話によると、

”不審船は攻撃せねばならん！”と言って攻撃をしたと」

「…!!!。あいつは…何をやっとするんだッ！」

セングクは頭を抱えながら、困惑した表情を浮かべた

「ガツハハハ!!グランツ中將らしいわ！」

その様子を見て、ガーブは煎餅を齧りながら大声で笑った。

「ふん…あいつらしいな」

ガーブの言葉にゼファーも同意していた

「続けてよろしいですか？」

「ああ、続けてくれ」

コングはそうモナコ中尉に言った

「それでは、攻撃を開始したグランツ中將の軍艦ですが…不審船に砲弾は命中せず、全て至近弾だったそうです」

モナコ中尉はまた後ろを向くと、ボードに白いスクリーンを下ろし始めた。

「今から見て頂くのは、生存者であるモモンガ曹長と共に救命艇に載せられていた映像電伝虫です」

白いスクリーンの前にボロボロの映像電伝虫が置かれた…その電伝虫の殻にはタコがカモメを襲う柄が書かれていた。

「では映させて頂きます！」

映像電伝虫の殻の上にあるボタンを押した…

悪霊の爪痕 3

砂嵐のように映像が乱れていたが……急に映像の乱れが止むと、一脚の椅子が置いてあった。映像はしばらく椅子を映していたが……。

何かを引きずる音と義足の音が聞こえ始め……画面外からジョーンズが現れ、その手元には鎖で羽交い締めにした血塗れのグランツ中将の姿があった。

「やあ……海軍諸君！映像電伝虫を見てくれて嬉しいぞ……？俺の名はデイヴィー・ジョーンズだ！」

ジョーンズはそう言うと、椅子に座り電伝虫を見ながら言った

「まずは、この中将君だが……。話し合おうとしたら……急に殴りかかってきてなあ……？少々痛めつけさせてもらったあ！」

ジョーンズはそう言うとグランツの頭を掴み揺さぶった。

「おい……起きろお！おい！チツ！マッカス！水をかけるー！」

「あいあい……船長オ」

マッカスが画面外から、現れ失神しているグランツめがけてバケツの水を浴びせた。

「うう……ハッ！」

「目が覚めたかね？中將くうん？」

「ぐっ！貴様は！」

グランツはジョーンズの姿を見ると、襲いかかろうとしたが鎖で縛れていて、ただジタバタしただけだった。

「おいおい……。暴れるな……。今、映像を撮っているんだ……。静かにしろオ」

そう言うと、ジョーンズはカトラスを触ると？画面外から縄が這って来て、グランツの体にまるで蛇のように体に巻き付き口を塞いだ。

「むー！むー！」

「ふむ……。では話を戻そう……。こいつは俺の船を砲撃したア！俺の船は軍艦を攻撃したりしていないのにだ！何もしていない船を砲撃するのがお前ら……。海軍の方針なのか？」

ジョーンズはそう言うと、

画面外に問いかけた

「お陰様で……。俺の船にも少し損害が出た……。見ろお！」

あの手すりを吹き飛んで一部なくなっているだろう？」

声に怒りの色を混ぜながらジョーンズは叫んだ

「海軍諸君！一つ教えといてやろう！行き過ぎた正義は海賊よりもタチが悪い！それを信じて、こんな馬鹿な事をしでかす奴も、出てくるからなあ！」

ジョーンズはグランツを踏みつけると、もう一度、顔を電伝虫へと向けた

「俺はいい事もしているんだが……？お前ら海軍の救助もしてやった！

それに海賊も潰してやったあ！」

ジョーンズがそう言うのと、コートから二つの海賊旗を出してきて広げた。その広げた海賊旗はモーガンの海賊旗とカルロスの海賊旗だった

「この二つの海賊団は、俺が潰してやった！なのに、何故か！お前ら海軍は俺の船を攻撃をしやがった！」

ジョーンズは電伝虫を睨むと椅子から立ち上がり、言い放った。

「……いいだろう！お前等がその気なら俺にも考えがある！俺は海賊になってやろう!!そして、お前らを沈めまくってやる！」

ジョーンズはそう言い放つと、片手のカニ爪でグランツの首を掴み持ち上げると

「まずはこいつからだ！」

そうして、近くにあった珊瑚と壊れた操舵輪を掴むと、グランツの体に押し当てるといった。

「integration
一体化！」

ジョーンズがそう叫ぶと、グランツの体の中に珊瑚と操舵輪が入ってゆき混ざり始めた。

「むー！むー！」

グランツは暴れていたが、だんだん動かなくなりぐったりするとグランツの体がグネグネと変化し始めて、まるでサンゴ礁のようになったグランツが出来た。

「こいつは、俺の船でこき使わせてもらう！」

ジョーンズは変化したグランツ見て言い放つと、画面外から声が聞こえ始めた。

「船長…生き残りがいました…」

「そうか！マッカス良くやったあ！そいつらはデイヴィー・バック・ファイトの犠牲者になってもらう！」

ジョーンズは後ろを向くと、ゆっくり歩き出して少し立ち止まって言い放った。

「では、海軍諸君！次、会う時は…お前らが海で死ぬ時だア！」

ムーハッハッハッハ！」

笑い声を響かせながら…ジョーンズが去ってゆく後ろ姿を映して
映像はそこで終わった…。

悪霊の爪痕 4

映像電伝虫の映像が流れなくなると、海軍大広間はしんつと静まり返った。

しかし、次の瞬間　…！センゴクは拳を振り上げ、目の前にあるテーブルを思いつきり殴りつけた

「ぐぐぐ…おのれえ…あの時私が倒していればこんな事には…！」

センゴクは怒りの表情を浮かべながら、俯いて絞り出すように声を漏らした。

「おい…センゴク落ち着け」

「これが落ち着いていられるかあ！ゼファー！我々の正義をけなされたんだぞ！」

「何も悔しいのはお前だけじゃない…！周りの顔を見ろ！センゴク！」

ゼファーの言葉にセンゴクはハツとして周りを見渡した。周りの海軍将校達も怒りの表情を浮かべていた。

「諸君…これは由々しき事態だ」

コングは周りを見渡し、少し間を起きながらしゃべり出した。コングの言葉にガープは黙りながら煎餅をくわえた。

「奴は我々に挑戦状を叩きつけてきた！我々の正義は奴に屈するべきか？違う！この海

の平和の為！奴を捕まえなくてはならない！」

コングは声を荒らげながら、叫んだ！

「我らの絶対正義の名の元に！」

コングがそう叫ぶと！海軍大広間は万来の拍手と歓声があがった！

将校達がコングの言葉に沸き立っていると、大広間の襖が大きく開け放たれた。

「コング元帥ー！コング元帥ー！ご報告したい事が！」

一人の海兵が慌てて海軍大広間に入ってくると、コング元帥の座ってる前に敬礼しながら、叫んだ！

「ご報告申し上げます！海軍第7支部基地が壊滅！負傷者多数との報告あり！」

「何だと！何があつた！」

海兵の報告にセンゴクは立ち上がった。

そして、海兵は続けた

「海軍第七支部はジョーンズの海賊船により、砲撃を受け崩壊！」

軍艦は、出航した途端クラークンに襲われ沈没した模様！海兵達はロープで吊るされてたようです…。そして！海軍支部の建物にはタコのモチーフとしたジョリーロジャヤーが書かれていたそうです！」

海軍大広間にいた将校達は報告にざわついていた

「何という事だ……！ コンング元帥！ 奴の首に懸賞金つけて早く指名手配を！」

「わかっている！ 今回の一件で奴の危険度が分かった！ 初回の指名手配だが！ 高額の懸賞金をかける！ 諸君！ 奴を早く捕まえるぞ！」

「……ハッ！……」

コンング元帥の言葉に将校達は立ち上がり、敬礼をした

「……絶対正義の名の元に……」

そうして、将校達は海軍大広間から出ていった

ジョーンズを一刻でも早く捕まえるために

「がっはっは！……こりや面白いのお……！……まるで狩りをするみたいじゃ！」

「ガープ！ 笑うんじゃない！ 全く……おっ！ おツルちゃんじゃないか？」

センゴクはガープと海軍大広間を出て歩いていると、おつる少将が後ろから歩いてきた。
た。

「えらい事になったね……！……しかし、どうするんだい？」

「確かにジョーンズを逮捕するのも重要だが……。最も恐るべきことはジョーンズが出てきた事によりほかの海賊達がどう出るかだ！ やつの出方次第では偉大なる航路グランドラインが火の海になるぞ！」

センゴク達はそう話し合いながら、マリンスフォードの廊下を歩いていった……。

その日の号外には海軍支部崩壊事件などの記事と共に1枚の指名手配書が入っていた

海の悪霊

デイヴィー・ジョーンズ

懸賞金・2億2千万ベリ

ジョーンズが起こした事件は世間をあつと驚かせ…海の強者達の耳にも入っていた。

「親分！金獅子の親分！」

手下の海賊に声をかけられ振り返った。

着流しを着たこの男名は

海賊艦隊提督―金獅子のシキー

「なんだア？何があつた！」

「この記事を見てください！」

「何だ？あー……海軍支部崩壊？……ジハハハハハハ！こいつは面白れえ事をしやがる！それにこの懸賞金とこの顔！まともな奴じゃねえな！ジハハハハハハ！こいつは俺の部下に欲しいな！ジハハハハハハ！」

金獅子はジョーンズの手配書を見ながら笑い続けた

――

「ふむ……ダイヴィー・ジョーンズか……面白そうな男だ」

赤い傘をさしながら号外を読みながら歩いている一人の男……

この男の名は。パトリック・レッドフィールド

またの名を孤高のレッドと呼ばれている海賊である。

「1度会ってみるか……この男に……」

ニヒルにレッドは笑うと、暗闇に消えていった

大海原を行く一隻の鯨の形をした船

「オヤジー！」

「あん？なんだア？」

号外を持って走り寄ってきた男の前に、座っている鼻には白い立派な三日月型の髭を蓄えた大男の名はエドワード・ニューゲート！またの名を白ひげである。

白ひげは号外を読むと、近くにあつた酒を煽り笑いながら言った。

「グララララー……いつあ！面白い事をやりあがつたなあ！

センゴク共も鼻を明かされたらうよ！

海軍相手にこんなことをしでかすなんて何て野郎だ！グララララー！」

白ひげは酒をさらに煽りながらこう言った。

晴れ渡る海を進む一隻の船……甲板の手摺にニュースクーが止まると、一人の男が近づいてきた。

「ん？ニユースクーか…。一部貰おうか…」

この男の名はシルバース・レイリー…。またの名を冥王である。

レイリーは号外の記事を読んでいると、船室の扉が勢いよく開けられ

中から目つきの悪い男が出てきた

「おい！レイリー！何読んでるんだ？」

「ああ…ロジャー…号外の記事が出ててな」

レイリーに話しかけてきたこの男こそ…後の”海賊王”ゴール・D・ロジャーである。

「なんの号外だ？」

「海軍支部が破壊され、中將が殺害されたらしい」

「へえー！そいつあすげえ！でやった奴の名は？」

「デイヴィー・ジョーンズって言うらしい…ん？デイヴィー・ジョーンズ？」

「お？どうした？レイリー？」

「いや、大昔にいた海賊の中にデービー・ジョーンズって言うのがいたそうだが…」

「なら…そこに載ってる奴はお化けなのか？レイリー？」

「そうじゃないだろうが、だが二つ名は海の悪霊か…わからんな」

「ガツハハハ！面白いことになりそうだな！レイリー！」

「何が面白いんだ？ロジャー？」

「だって！こいつもこの先の航海でいつか出会ってやり合うだろう？そう考えると楽しみなんだ！」

ロジャーの言葉にレイリーはため息を吐きながら言った

「そんな事をしてたらいつか死ぬぞ？ロジャー」

レイリーの言葉にロジャーは少し歩き振り向くと

「俺は死なねえぜ？相棒？」

そう言いながら、ロジャーはレイリーを見てニヤリと笑った

—————

海を進む一隻の奇抜な海賊船

「ママー！ニユースだよオ！」

「ああ？なんだい？」

男が船室に入ると大きな女が座っていた。

名をシャーロット・リンリン

またの名をビックママである

「お菓子の話かい？それともお茶会かい？」

「違うよオ！今日の号外でね！面白い手配書が入ってたの！コレエ！」

ビックママは手渡された手配書を見ると口角をあげながら言った。

呪われた海賊船と2人の姉弟1

偉大なる航路くスニツチ諸島沖合く

「うわあああああ！ ジョーンズだア！」

「俺はまだ死にたくねえよお！」

「助けてくれえ！」

ジョーンズは1隻の海軍軍艦を攻撃していた

「マツカス！ クラーケンを呼び出せ！ 一気に沈めろ!!」

「アイアイ…船長お！」

マツカス達が慌ただしく動きながら、装置の方へと向かっていくのを見てジョーンズはため息を吐いた。

「ふう…（何故弱いのに攻撃してくるかねえ？ 海軍は…。手を出さなきゃあ…こつちも沈めんのかな…）」

ジョーンズは自分の船を見て少し心の中で考えた。

（やはり、フライングダツチマン号は目立つなあ…。これじゃあ…まともに補給も出来ん…。弾薬も、食料も、あと少しだ…。特に酒が先になくなりそうだな…）

ジョーンズがそう考えていると、もう既に海軍の軍艦はクラーケンによって海の底に引きずり込まれそうになっていた。

「ふん……沈んだか……。さて、どうするか……」

「キャプテン・ジョーンズ！何を悩んでいるんだい？」

ルチアーノが後ろから声をかけると、ジョーンズは少しルチアーノの方を見ると言った。

「最近、ああやって海軍の軍艦を沈める機会が増えただろう？そのせいで、砲弾が無くなりかけだ……。しかし、この船だとそこら辺の島に補給をするわけに行かんから……。困ってるんだ」

「なら、ジョーンズ！違う船で補給に行けばいいじゃないか！どこかの船を奪ってさー！」
「海賊船を襲って、拿捕できても武装は弱いだろうし、すぐにバレだろうよ……。俺らが奪った海賊船だつてな？」

「なら、どうしようか？」

「うむう……。そうだ！あの手があつた！」

「ジョーンズ！なにか思いついたのかい？」

「なあに……。色々とな！マックス！急げ！潜航するぞ！」

「船長オ……生き残った海兵はどうします？」

「あん？救命ボートに乗せて流せ！ピストル一丁持たせてな！」
「了解」

マツカスは甲板の上に連れてきていた海兵達を海へと放り投げると
ボートを下ろした

「急げえ！出航だア！」

「「ウオオオオオオオ！」」

マツカス達は船倉へと入っていった

すると、フライングダッチマンは轟音を立てながら

海へと潜航していった

—————

海軍G—6支部

「おのれ！ジョーンズめ！またしても！」

カリフラワー大佐は部下の持つてきていた書類を勢いよくテーブルに叩きつけると
声に怒気をはらませながら叫んだ。

「これで今月で二回目だ！一回目は！調査船！今回は！巡視船！

我が支部少ない艦船を！ことごとく沈めおつて！」

「しかし、またジョーンズの船は潜航され行方不明です…どうすれば」

「分からん！本部の連中めえ！早く奴を仕留めれんのかあ！」

カリフラワーの怒声が支部に響き渡っていった

—————

フライングダッチマンは無入島の入江に停泊していた

「ここら辺なら見つかることないだろう…」

ジョーンズは望遠鏡で周りを見ると、船室に入っていた。

「ふう…さあて！あの船の出番だ！」

ジョーンズは、オルガン近くにあるクローゼットへと向かうと、扉を開けた。いくつもあるボトルシップの中から、ジョーンズは赤い帆と船首の骸骨が特徴的なボトルシップを掴んで船室から出ていった。

ジョーンズは右舷の手すりの部分まで歩き言った。

「ここら辺なら出しても大丈夫そうだな…。よし！」

ジョーンズがそう言うと、そのボトルシップを空中へと投げ…そして、落ちてきたと

ころをジョーンズのカトラスで切った！

すると、何とも言えない破裂音とともに煙が立ち込めた

「ゴホツゴホツ！ふう…。何とか成功したみたいだな」

煙が晴れると…そこには！

赤い船体に赤い帆！船首には骸骨が火のついたゴブレットを持った像がある！あのボトルシップと同じ船がそこにはあった！

「おおお！生で見るとやっぱり違うな！アン女王の復讐号！」

ジョーンズは興奮気味に声を上げると、ハッと我に返って言った。

「どうせなら！顔も変えてくるか！」

ジョーンズはそう言うときまた船室戻ると、一枚の大鏡の前に立つと…能力で顔を変え始めた。手で顔をマゼマゼすると、ジョーンズの顔はまるである映画の黒ひげのようになつていた。

「うーん…。やはりこの顔もいいが…。やっぱり！この顔が…！」

また混ぜると…そこにはある映画に出てくる猿好き船長と同じ顔になつていた！

「そうそう…この顔！やはり海賊といえばバルボッサだよなあ！」

ジョーンズは暫し鏡の前でポーズをとっていたが

「はっ！この服じゃおかしいな…。やっぱり黒い服じゃないと…」

ジョーンズは自分の着てる服を見ながらそう呟いた。

そうして、あたりを見渡すとロープがぶら下がってる場所があった。

「ん？ロープ？」

ジョーンズがロープを引っ張るとクローゼットの近くから箆筒が出てきた。

「ほう！箆筒……」

ジョーンズが箆筒の扉を開けると、中から一枚の手紙のような物が出てきた。

—————

お久しぶりですねえ……

随分そちらの方で楽しんでおられるようで

転生用の特典がまだ余裕があったので

これも付けておきました

では、良い人生を！おっっほっほっほ！

—————

「なるほどお……これは有難い！」

ジョーンズがそう言いながら箆筒を開けると、色々な海賊衣装と武器

そして意外な物が置いてあった！

「これは！まさか！」

ジョーンズがそれを掴みあげると声を上げた！

「北を指さないコンパス!!」

北を指さないコンパスとは、北を指さない代わりに自分の欲しいものを指し示す魔法のコンパスなのである！

「これがまさかあるとは！これで一々記録指針ログポースに頼らなくてすむ！」

ジョーンズはそう言いながらスポンにコンパスをなおすと、服選び着替え始めた。

そうして、また鏡の前に立つとそこにはバルボツサが立っていた。

「これでいいだろう！よし！」

そう言うジョーンズは船室から外へ向かって走っていった。

扉を勢いよく開けて操舵輪のある上へと登ると甲板に作業している船員に向かって叫んだ。

「おい！野郎共！隣の船に乗れ！出航するぞ！」

「キャプテン・ジョーンズ！なんだい？その格好は？」

ルチアーノがそう質問するとジョーンズは少しニカツと笑いながら言った

「変装だよ……！ナハハ！」

そう言うと、片手に持っていた派手な羽根の着いた黒い帽子を被ると、カトラスを抜き放ち叫んだ。

「さっさと動け！このろくでなし共！フハハハハ！」

そう、ジョーンズが笑うと船員達も笑いながら動き出した

「さあて！あの船で補給に向かうぞお！」

行き先はここから近い！トルトゥーガだ！フハハハハ！」

そうして、ジョーンズの笑い声が入江内に響き渡っていった

呪われた海賊船と2人の姉弟2

偉大なる航路にある島

その名もトルトゥーガ。 ” 嘲りの島 ” ジャヤの様に

海軍でも迂闊には近づけない島であり

ここに来る船の殆どは非合法的な活動をしている船ばかりで

海賊船などが補給地として寄ることで知られている

その島にアン女王の復讐号は近づいていった

「島が見えました…船長…」

マッカスが艦尾にある鐘の近くに立つジョーンズに近づきそう報告すると、ジョーンズは振り向き手すりに手をかけながら言った

「いいで！港に近づいたら、錨をおろせ！

マッカス達はこの船で船番をしてろ！

ルチアーノ！お前は俺と一緒に上陸だ！」

「了解！船長！」

ルチアーノがマストからロープをつたって甲板に飛び降りると

ジョーンズの方を見て手をふり上げながら笑った

アン女王の復讐号はゆっくりと船着場に近づき

錨を下ろした

「いいな？ マツカス？ 俺ら以外に誰かが船に乗り込んできたら…。

分かっているな？」

「分かっています… 船長オ…」

ジョーンズの言葉にマツカスはニヤリと笑った

すると、ジョーンズの横にいたルチアーノがジョーンズの肩を叩き言った

「船長！ あの船を見てくれ！」

「あん？」

ジョーンズはルチアーノが指を刺された方を見ると

沢山の船が停泊しているところにジョーンズが知っている海賊旗を掲げた船があった

「あれは…（あれは…まさか！ 金獅子のシキか？ あのフワフワの実能力者の？）」

「金獅子のシキが率いる金獅子海賊団だね…。

面倒な事になったよ…。 どうする？ 船長？」

「ルチアーノ…。俺らは補給に来てんだ…。

なるべく面倒事に巻き込まれないようにしよう…。いいな？」

「了解！キャプテン！」

ルチアーノとジョーンズは街の方へと歩いていった…

「ギャハハハハッ！もつと酒を持ってこおい！」

「ここら辺の海は俺の庭みてえなもんだあ！ひっひっひっ！」

「財宝の隠し場所？ある訳ねえだろ？ヒヤハハハ！」

「おい！オメエ！何笑ってんだ？ああん？」

街のいたるところから怒声や笑い声、時々銃声が聞こえ

誰かの悲鳴の聞こえる街…。それがここトルトゥーガである

その街の真ん中にある1件の酒場

そこには金獅子のシキが率いる金獅子海賊団が宴をひらいていた

「野郎共お！今日！俺の懸賞金が上がったア！それを祝して飲もうぜえ！ジハハハハハ

ハ！」

「おめでとうございます！金獅子の親分！」

「乾杯！！」

シキが乾杯の音頭をとると手下の海賊達は一斉に乾杯した

「ゴクツ！くつくつ！プハア！ジハハハハハハ！やっぱりうめえなあ！…あん？」

シキがジョッキをテーブルに叩きつけながらそう言っている

酒場のドアが勢いよく開いた

そこに立っていたのは黒を基調とした海賊衣装に身を包み羽の付いたつばの広い帽子を被った男だった

すると、男言った

「ん？お取り込み中だったか？（やべえ…金獅子のシキじゃん…）」

そう、扉を開けてしまったのはジョーンズだった

ジョーンズはゆっくり歩きながらカウンターに近づくと

酒場の亭主に言った

「オヤジ！ラム酒を2ケースとワインを3ケースそれとビールを2樽くれ！（シキと目を合わせないでおこう…）」

「あいよ…」

ジョーンズの注文にオヤジは少し返事をする、奥に引っ込んでいった

ジョーンズはカウンターで待っているとシキの手下が近づいてきた

「おい！お前！宴の邪魔なんだよ！出て行きやがれ！」

（うるせえなあ…貫うもん貫ったら出ていくから少し待つてよ）

しかし、ジョーンズは振り向きせずにかウンターの方を見ていた
それを見てイラついたのかシキの手下はピストルを抜くと

ジョーンズの方に向けた

「おい！オメエ！無視してんじゃねえよ！」

（チツ！面倒事に巻き込まれたくなかったが仕方ねえ！）

そう言いながら、シキの手下はピストルの引き金を引いた！

しかし、弾は出なかった…

シキの手下は自分の持つてるピストルをよく見ると

自分の手と一体化していた

「うわあああああ！なんだあああ！こりやあああ！」

シキの手下は叫び声をあげると

ジョーンズはゆっくりと振り返りいった

「銃は無闇矢鱈に人に向けるもんじゃあない…」

そいつを絶対に殺してやるという覚悟持つて向けるもんだ…

その覚悟がないんなら、それをしまいな…

あつ、そうかしまえないんだったな？なら、手伝つてやる…」

ジョーンズはそう言うどピストルと一体化している手を掴むと
体の中混ぜ込んでいった

「うわあああああ！やめろオ！何をしやがるう！」

「何って…。治してやってるんだが？」

ジョーンズが手を体の中から外に出すと

手下の海賊の手には一体化していた筈のピストルが無くなっていた

「うわああ！あれ？俺のピストルがねえ！」

「テメエ！俺のピストルをどこにやりやがった！」

「ピストル？ピストルならあるじゃないか！」

お前の中にな！フハハハハ！」

「何を言ってるやが…る?!?!」

手下の海賊は顔を青ざめながら身体をさすると

泣きそうな声を出していた

すると、ジョーンズはおもむろに片手を天井に向けると

片手からどこからとも無くピストルが現れ

引き金を引いた

「おっと、お前のピストルはここにあったようだ！」

まさか本当に体の中に入れられたと思ったか？

このマヌケ！フハハハハ！」

ジョーンズは笑い声をあげながらシキの手下を見ていた
すると、奥でその様子を見ていたシキが近づいてきた

「ジハハハハハハ！お前え面白れえなあ！」

俺様の部下になる気はねえか？ジハハハハハハハ！」

呪われた海賊船と2人の姉弟3

「…あん？ニワトリが人間の言語を喋るんじゃあねえよ…。」

そのウルセエ口を閉じてとつとと失せろ」

ジョーンズはチラツツとシキの方を見て

そう言い放つとまた視線をカウンターの方に向けた

「え？ニワトリ？ニワトリどこ？」

シキがジョーンズの言葉にキョロキョロしている

手下の海賊がシキにツツコミを入れた

「親分の事ですよ！テメエ！親分の事を馬鹿にしゃがったな！」

手下の海賊達はそう言うと一緒に銃を向けた

「おいおい…。今、俺とこいつが話してるだろうが…。」

少しお前ら黙つてろ！」

シキはおどけた様子をやめ、目を細めながらジョーンズを見ると

またしゃべり出した

「ジハハハハハハ！俺様に啖呵をきるとはさらに気に入ったぜ！

俺と一緒に組めば、この世の全てを支配出来る！

もう一度言う：俺様の手下になれ！」

シキはさらにジョーンズに顔を近づけて言った

しかし、ジョーンズはカウンターの奥の方を見つめながら

ラム酒の瓶を口に運んでいた

「…何故、俺がお前の下につかなくちやいけない？

何か俺にメリットでもあるのか？

それにお前みたいな男の下につく予定は無い」

ジョーンズの言葉にシキは少し黙ると

葉巻を少し吸い、煙を吐くと言いつつ

「つまり、それは…この俺様に殺してくれってことだよなあ！」

シキはそう叫ぶと腰についていた刀を抜き

ジョーンズに向かって振り下ろした

しかし、刀はジョーンズに届く前に止められてしまった

「…オメエその手は…」

シキの刀はジョーンズが変化させた左手である

蟹の爪に止められていた

そして、ジョーンズはグツと蟹の爪に力を入れシキの刀を折った

「この俺をそんな刀で殺せると思うなよ……!金獅子イ!」

ジョーンズの言葉にニヤツとシキは笑うと

もう一つの刀を抜くと言った

「ジハハハハハハ!面白くなつてきやがったぜえ!」

今にも大喧嘩に発展しようとした

その時……!酒屋の扉が勢いよく開けられた!

そこに立っていたのはジョーンズがかぶっている帽子と同じぐらいの大きさの黒い帽子をかぶり海賊風の服を着てて少し日焼けした女だった

「あん?」

「誰だテメエ!」

ジョーンズとシキは入口にたっている女の方睨むとそう言い放った

すると、女はツカツカとカウンターの方に歩いてくると

ジョーンズの方に近づき言い放った!

「あの港に停泊してある赤い海賊船は貴方のよね!

あれをあたしに寄越しなさい!」

「は?何言つてんだお前?」

ジョーンズは女の言葉に呆気にと取られていると

シキが女に向かって言った

「おいおい……少し落ち着けよ……！ ベイビーちゃあん」

「喋りかけんな！ 変態！」

「変態……って……」

シキは女の言葉に部屋の隅の方でいじけていた

「で？ どうなの？ 私にあの船を譲る気になった？」

「お嬢さん……。海賊が船を寄越せって言われて

はい、そーですかって言って譲る奴がいるはずないだろう？」

お前は馬鹿かとも言いたげにジョーンズは

女の方を見るとそう言い放った

すると、女は腰にぶら下げていた銃を抜くとジョーンズに向けた

「分かったわ！ もう頼まない！ 命令よ！ あの船を私に譲りなさい！」

「フフツ！ そんな物でこの俺を脅せると思ってるのか？」

「私は本気よ！ 早く寄越しなさい！」

「なら、お嬢さん……！ 海賊からなにか奪いたけりや……！

力づくで奪うんだなあ！」

ジョーンズは笑いながらラム酒を煽った

しかし、女は少しも撃とうとしないので痺れを切らした
ジョーンズは女の方に近づき

女の持っている銃の銃口を自分の胸に押し当てた

「ほら、早く引き金を引け……！」

そうすれば俺から船を奪えるかもしれんぞ」

「……うわあああああ！」

女は引き金を引いた！

破裂音とともに弾が発射されジョーンズの胸を貫いた

ジョーンズは少しヨタヨタとしながら後ずさりすると

女の方を見て少しニヤツと笑うと言った

「……寒い」

音を立ててジョーンズは倒れ込んだ

その光景をシキは笑いながら見ていた

「ジハハハハハハ！あの馬鹿野郎が勝手に死にやがった！

ジハハハハハハ」

「アンタが悪いのよ……！近づいてくるから……！」

わ、私は！私は悪くないわ……！」

女はブツブツ言いながら

店から出ていこうとしたその時！

「おいおい……どこへ行くんだア？まだ俺は死んでないぞ？」

その言葉に女は恐る恐る後ろを振り返ると

死んだ筈のジョーンズが立ち上がろうとしていた

しかし、先程の顔ではなく顔が変化していた

「小娘……言ったらろう？俺をそんなものでは殺せんのださ！」

「あ……あ……アンタ……その顔……！」

「！！！！」

女の目の前にはあの海の悪霊が立っていた！

そして、ジョーンズの姿を見て

周りの海賊は驚きのあまり声を出せずにいると

ジョーンズは周りの反応見てこう言った

「あーあ……お前のせいでせっかくなの変装が台無しだあ……！」

さあて、お嬢さん？」

ジョーンズは女の方に近づきニヤリと笑いながら

顔を近づけながら言った
「死ぬのは怖いだろう？」

呪われた海賊船と2人の姉弟4

「あ……ああ……！」

女はジョーンズの姿を見てその場にへたりと座り込んだ

女が座り込んだ所にジョーンズは義足の音を響かせながら近づき言った

「さて……この俺を撃つたんだあ……」

それなりの覚悟をして貰おうか？お嬢さん？」

ジョーンズは怯えて座り込んでいる女を見ながらニヤリと笑った

すると、ジョーンズの後ろからシキが近づいてきた

「ジハハハハハ！テメエがまさかあの悪霊だったとは！

恐れ入ったぜ！」

シキはそう言いながらジョーンズの横に立つと

一緒に女を見下ろしていた

そして、女が着けているベルトにシキが触れると

女は浮き上がった

「えっ? きやあああああああ!」

女は浮き上がった事に悲鳴をあげていると

シキは浮き上がった女を見て笑いながら言った

「おーおー……いい声で泣くじゃねえかあ! ベイビーちゃあん!」

「おい……金獅子イ! いらん事すんじゃねえよお……」

シキと一緒に浮き上がった女を見ながらジョーンズは少し文句言っただが、ジョーンズはシキと一緒に笑っていた

そして、女を見ながら言った

「おい! 女! 俺の質問に正直に答えろ! いいな?」

じゃないと……。この横にいる奴に頼んでお前を

さらに高く浮き上がらせるからな?」

ジョーンズの言葉に女はコクコクつと顔を揺らす

と涙目でジョーンズの方を見た

「よろしい……。ならば、最初の質問だア……。お前の名前はあ?」

「私の名前は……。アンジェリカ……よ」

「ふむ……。アンジェリカねえ……」

なら、アン! 第二の質問だ! お前は海兵か?」

「…違うわ」

「おい…！なんで少し言葉に詰まった？」

お前まさかCPとかじゃねえだろうなあ？

正直に答えねえとさらに高く浮き上がらせるように頼むぞお？」

ジョーンズはアンジェリカを睨みながら言った

するとアンジェリカは顔を青くしながら頷くと言った

「本当よ！私は海軍でも世界政府の役人でもないわ！」

「なら、証拠を見せてみる？」

私は世界政府の関係者ではないって言う証拠をなあ！」

「ある訳ないでしょお！そんな物！」

「なら、最後の質問だ…！いいいな？」

正直に答えろ…！じゃねえと浮き上がらせる以外に俺の能力で

顔を混ぜて化物見たくしてやる…。いいいな？」

ジョーンズの言葉にアンジェリカは少し困惑した表情を浮かべた

その顔を見てジョーンズはラム酒の瓶をカウンターに混ぜ込んだ

ラム酒の瓶はどンドン混ぜこまれていきBARカウンターと一体化した

「こうなるってことだ…。おわかり？」

ジョーンズはカウンターと一体化したラム酒の瓶を

アンジェリカに見せつけると

アンジェリカは顔を青ざめながら頷いた

「さあてえ！最後の質問だあ！

何故？俺の船が欲しかったんだ？言ってみろお」

ジョーンズの言葉にアンジェリカは少し俯きながら言った

「弟……弟が誘拐されたのよ……」

海軍にね……それで助けるために船が必要だったのよ……！」

「じゃあ……なんで俺の船を選んだんだ？」

「だって……この港に停泊してある船の中で海賊旗を掲げていないし！

見張りもないさうだったし……それに大砲も沢山あったから……！」

「ほお……なるほどお……。そういう事か……。おい！金獅子イ」

「ああ？なんだア？」

「降ろしてやってくれ」

「おう……。いいぜ？ジハハハハハハ！」

シキはそう言うと言力を解いた

すると、浮き上がったいたアンジェリカは急に床に落ちていった

「きゃああああっ！」

アンジェリカがあと少いで床に激突するかと思われた瞬間……！
ジョーンズがアンジェリカをキャッチした

そして、ジョーンズはお姫様抱っこしながら顔を近づけ言った
「お前の弟を助けたいか？」

もしも、この俺がお前の弟を助けるのを手伝うのなら

お前は俺に何を支払える？」

「……金ならいいわ！でも、もしも私の弟が帰ってくるのなら！

私は全てを貴方にあげるわ！」

アンジェリカの言葉にジョーンズはニイイと笑うと言った

「その言葉に二言はないな？」

本当にお前の弟を助けられたら……お前は俺に全て捧げるんだな？」

「ええ……！誓うわ！」

「良し！なら、血の契約といこうかア！」

ジョーンズはアンジェリカを下ろすと

ジョーンズは服の中からナイフを取り出すと

左手の変身を解き指先を少し切って

アンジェリカの手には押し当てた

すると！見る見る間にアンジェリカの手には

ジョーンズの血が混ざりこんでいった

「よし！これでお前は俺と契約で結ばれた訳だ！」

ジョーンズはアンジェリカを見ながらニツと笑った

謎の女アンジェリカが弟の為にジョーンズとの契約を交わしたその頃

酒場の端っこでローブを被った男が

ジョーンズ達の様子を観察しながら

電伝虫でどこかへ連絡しているのだった

呪われた海賊船と2人の姉弟5

アンジェリカがジョーンズと血の契約した頃……

軍艦に護衛された世界政府の船の姿があつた

その世界政府の船の甲板には檻に入れられ、鎖に繋がれた男の子がいた

「ひくっ！ひくっ！……ここから出してよう……。」

男の子が泣いていると

黒いスーツを着て背の低い男が歩いてきた

「おやおや？どうかしたかね？そんなに泣いていると

私達が悪者みたいじゃないか？ん？」

そう男が言うと言檻の中の男の子は男を涙目で睨みつけると言った

「お前達は悪者じゃないか！ぼくをさらったくせに！」

男の子の言葉に男は少しニヒルに笑いながら

何処からか出した鞭で男の子を叩いた

「うっ！」

「言葉遣いになっていない…。」

君には聖地に着くまでに教育が必要のようだ…！」

男が鞭を振りおろそうとした瞬間！

黒いスーツを着た部下が走ってきた

「ベケット長官！例の女を見つけたと追跡していた部下から

報告がありました！」

「ふむ…。やっと思つけたか…。それで？女の場所は？」

「場所はトルトウーガであります！」

部下の報告にベケットは少し顔を顰めると言つた

「トルトウーガ…。あの海賊共の吹き溜まりか…。」

「長官…。さらにもう一つ報告が…。」

「ん？何かね？」

「実は女の近くに海賊の金獅子のシキと海の悪霊ジョーンズが

いるそうであります…。」

「ほう？あの最近話題の海賊達か…。」

「ふむう…。君、急いで進路をトルトウーガに船を向けたまえ

愛しのお嬢さんを迎えに行こうじゃないか？」

ベケットはそういうと口角を上げると

檻の中の男の子を見下ろしながら言った

「君のお姉さんは見つかったそうだな。良かったじゃないか

一緒に聖地に行けるぞ？死ぬまで世界政府の道具としてね？」

そういうとベケットは檻の中の男の子を見ながら

蔑むように笑った

—————

一方、トルトウーガでは

「それで？アン？お前の弟とやらは海軍に連れてかれたそうだが？
なぜ連れてかれたんだ？」

ジョーンズは椅子に座らされているアンジェリカ見ながら言った

「弟は…悪魔の実際の能力者だったのよ…」

「能力者？能力者なんて偉大なる航路には腐るほどいるだろ？」

「能力者は能力者でも特殊なのよ」

「特殊？」

「そう、弟はヨチヨチの実を食べた…予知人間

少し先の未来が見ることが出来るのよ」

「予知…か、何故その能力を海軍は欲しがったんだ？」

「予知ができると言うことは、これから先に起こる事件や戦争、

ましてや世界政府の脅威となる連中を前もって知っておけば…！

今のうちに消す事ができるからよ」

「海軍はそんな子供をさらってまで何かをしたいのか…」

ジョーンズはそう呟いた

すると、アンジェリカは首をブンブン振りながら言った

「違うわ…。弟の能力を欲しがっているのは海軍じゃない…！」

世界政府よ…！その中でもあの男が一番欲しがっているのよ…」

「あの男？」

「CP9長官…カトララー・ベケットツツ！」

アンジェリカは悔しそうな顔をしながら言った

ジョーンズはアンジェリカの言葉に少し考えながら言った

「ベケット?」

「そう!あの男が弟を連れ去る様に、海軍を私達に差し向けて来たのよ!あの男は弟の能力を使って世界政府に楯突く者を、全員消すつもりなのよ!そして、世界政府の中での名声を得るためにね!」

アンジェリカは言葉を荒らげながら言った

ジョーンズはそれを聞き言った

「CPか…いいだろう…物資の積み込みが終わり次第

船を出航させてやろう!」

「それは有難いけど…。貴方は何処に弟が運ばれているのかわかるの?」

「いんや?」

「なら、駄目じゃない!」

アンジェリカの言葉にジョーンズはコートの中を探り

あの北を指さない羅針盤を出す

アンジェリカの手の上に渡した

「何よ?これ?」

「それは、北を指さない記録指針とも言えはいいか…。

まあ…いい!」

「お前が今一番欲しい物は何だろなあ？」

「何を言ってる……？」

ジョーンズはそう言うのと羅針盤の蓋を開けた

すると、針がグルグル回っていたがある方向を指して止まった

「北西……か、今お前から見て北西の方向にお前の弟がいるぞお？」

「嘘!?!こんなので分かるわけないじゃない!」

アンジェリカがそう言うのと地団駄を踏んだ

ジョーンズは目を細めながらアンジェリカを見ると言った

「ようし……なら、あいつに聞こうか……？」

そう言うのとアンジェリカに背を向けて歩き出し

酒場の端に座っているローブの着た男の前に立つと

左手をカニの爪で男の首を掴み

男を持ち上げて言った

「何を報告していたのかな？さつきからチラチラと見てたしな？ん？

ああ……！そうかア！さては！お前は道案内人か？

CPは気が効くじゃないかあ！」

ジョーンズは笑いながら言うときさらに続けた

「では、CP君？死ぬのは怖いだろうか？」
そう言うとジョーンズはニイッと笑った

呪われた海賊船と2人の姉弟6

「ぐうううう!!」

ジョーンズのカニ爪に首を絞められた男は

声からうめき声を漏らしながらジタバタと暴れていた
「さあ、どこに連絡をしていたかを吐いてもらおうか!」

ジョーンズはさらにカニ爪に力を込めた!

すると、男はニイッと笑を浮かべると言った

「もう遅い!お前らはこの島で死ぬんだ!」

その女に関わったせいだな!

男は笑いながら、アンジェリカを指さして言う

さらに叫んだ

「その女を捕まえるために!ベケット長官がこの島に海軍の軍艦を10隻引き連れて
向かって来てるのさ!

すぐにもこの島は火の海になるだろう!

もうお前らはおしまいなんだ!」

男の言葉に酒場は少し静まり返ると

堰を切ったように海賊達が騒ぎ出した

「海軍が来るぞお！」

「世界政府がこの島を潰しに来るぞ！」

「早く逃げろお！」

「今のうちに船を出して逃げるんだ！」

海賊達が慌てていると

シキがおもむろにピストルを出す

近くでパニックになっていた海賊の一人を撃ち抜いた！

「ガタガタ騒ぐんじゃねえ！オメエら!!」

海賊ならドンツと構えやがれ！

海賊になった時から死ぬ覚悟ぐらいしてやがるだろうが！

またなんか言ってみろ！お前らを一人残らず殺してやるからな！」

シキの言葉に海賊達が静まると

ジョーンズは男に向かって言った

「で？海軍の軍艦が10隻…。この島に向かってきてきているだけか？」

「そ…そうだ！」

「そうかア！それはいい事を聞いたあ！」

ジョーンズの言葉にアンジェリカも周りの海賊達もビックリした

そして、慌ててアンジェリカがジョーンズにしゃべり出した

「まさか！海軍の軍艦10隻とやりあう気？」

「ああ…そうだが？」

「勝てるわけないじゃない！相手は海軍の軍艦が10隻もいる大艦隊！それに比べて貴方は1隻しかない船！勝ち目なんか無いわ！」

「誰が俺の船はあの船だけだと言ったんだ？」

「え…まさか？」

「確かに真つ向から行けば、俺と言えど無事ではないだろうがあ…」

真つ向勝負じゃなければ勝てるさ…。それに俺の通り名を忘れたか？

俺の通り名は海の悪霊だあ！」

ジョーンズの言葉に周りの海賊達やアンジェリカは呆然としていると

掴み上げられている男の服の中から、電伝虫を着信音が聞こえてきた

プルプル…プルプル…

「おやあ？どーやら長官殿から連絡のようだぞお？」

ジョーンズは男を見ながら

意地悪そうに笑うとさらに言った

「おい！アン！少し電伝虫を取ってやれ！」

「……分かったわ！」

ジョーンズは持ち上げていた腕を少し下げると

アンジェリカは男の服の中を探り始めた

すると、男のローブの中から黒い略帽を被った電伝虫が出てきた

アンジェリカはその電伝虫の受話器を取った

すると、ガチャッと音を立てると

電伝虫の目が半目の鋭い目つきに変わっていた

「……様子はどうかね？クラウス君？」

「!!ベケツトツツ!!」

電伝虫から聞こえてきた声に

アンジェリカが憤怒の表情を浮かべた

「あの女はまだ動いていないのか？早く報告したまえクラウス君？」

ベケツトの声が電伝虫から聞こえてきていたが

アンジェリカは怒りのあまり何も喋れずにいた

ただただ、電伝虫を恨めしそうに睨みつけることしか、しなかった

その様子を見て、ジョーンズは呆れて電伝虫をアンジェリカから奪い取ると、電伝虫に向かつてしゃべり出した

「これは、これは…。CP9長官殿じゃないか」

「む？君は誰かね？」

「おっと…。これは失礼したあ…。俺の名はジョーンズだ」

「ジョーンズ…？ああ…。最近話題の…。」

そうなる…。私の部下はどうなったのかね？」

「長官殿オ？お前の愚かな部下は

今、俺に首を掴まれてもがいているぞお？」

「ふむ…。少し部下に変わってくれないかね？」

「…いいだろお！」

ジョーンズは電伝虫を持っている手をクラウスに近づけた

すると、クラウスは謝り出した

「申し訳ございません！ベケット長官！こんな結果になってしまい！」

「クラウス君…。」

残念だよ…。君はもう少し優秀だと思っていたんだがね…。」

「ベケット長官？」

「君は私の組織には必要ない…。利用価値のない駒は捨てるに限る…。

しかし、君の犠牲のおかげで女を捕まえる事が出来る…。

そこだけは、評価しておくよ。」

「ベケット長官！待っててくださいい！」

「同じ事を二度も言わせるんじゃない…。

君はもう要らない…。さっさと死に給え」

ベケットの言葉にクラウスはまるで生気を失った様に呆然としていた

電伝虫の向こう側からベケットはジョーンズに向かって言った

「さて…。ジョーンズ君？その近くにいる女を私に差し出せば

君達の命は保証してあげよう」

「断ると言ったら？」

「君達が…。ただ滅ぶだけだがね？」

「そうか…。

なら…。こう言おう！返事はNOだ！

お前らを一人残らず！暗い水底に沈めてやる！」

ジョーンズは笑いながら言い放つたすると

電伝虫の向こうから冷えた笑い声とともにベケットの声が聞こえてきた

「つまり…。それは宣戦布告でいいのかな？」

「その通りだ！」

「では…。君達は海の藻屑となり給え…。」

それと…。聞こえているかい？ アンジェリカ君？

君の弟はかなり強情だねえ？ 少し躰をさせてもらったよ

「ベケツトツツ！ 弟に何をしたの！」

弟に更になにかしたらあなたを必ず殺してやるわ！」

「ふふふ…楽しみになっているよ…。」

では、ジョーンズ君御機嫌よう」

そう言うと電伝虫は切れた

ジョーンズは電伝虫を掴むとそれをクラウスに混ぜ込んだ

「!? うわあああああ！ 体が！ 体があああ！」

ジョーンズはクラウスを離すと

自分のコートの中からタコの触手が

顔に付いた電伝虫を取り出してしゃべり出した

「おい！ ルチアーノ！ 物資の積み込みはどれくらいで済む？」

（もう少しで済むよ！ キャプテン！）

「そうか！少しマツカスと変わってくれ」

（了解！マツカス！キャプテンから！）

「マツカスか？お前に少し頼みたいことがある」

（何でしょうかア？船長オ？）

「急いでダツチマンをトルトウーガに持って来い！」

（了解しましたア…船長）

そう言うとき、電伝虫を切ると

ジョーンズはアンジェリカの方に歩き出し

アンジェリカを抱えあげると

シキの方を見て言った

「金獅子イ！また会おう！少し俺は海軍の艦隊を沈めてくる…。」

そう言うときジョーンズは歩き出した

その姿を見たシキは笑いながら言った

「ジハハハハ！やっぱり気に入ったぜ！ジハハハハハハハハ！」

戦いに備えよ1

ジョーンズはアンジェリカを担ぎながら

酒場を出ると

周りを行き交っていた海賊達はぎよつとした

「おい……あれ……！」

「最近……出てきたルーキーの……」

「海軍基地を半壊させた犯人……」

「海軍本部中將を再起不能に追い込んだ男……」

ジョーンズは周りを無視して港に向かって歩き出した

すると、アンジェリカが騒ぎ出した

「……ちよつと！降ろしなさいよ！」

腕と足をじたばたさせながら暴れてると

ジョーンズは鬱陶しそうに顔を顰めると

ジョーンズは担ぎあげていたアンジェリカを落とした

「痛ッッ！何するのよ！」

「少しはそのうるさい口を塞げないのかあ？ アン？」

「あなたが落とすからでしょ！」

「お前が暴れるからだろお？」

「あなたが担ぎあげるからよ！」

ジョーンズはうんざりした表情を浮かべると

アンジェリカに言った

「お前は早く弟を助けたくはないのかあ？」

「!!助けたいわよ！」

「なら、黙ってついてこい……」

ジョーンズはそう言うのと船着場の方に向かって歩き出した

アンジェリカもそのあとを追った……

—————

一方……トルトゥーガ向かってきている海軍の艦隊

その中で一際大きく砲門の多い軍艦……

その船の名はエンデバー号

ベケットが乗船している軍艦である。

その船の牢屋の中でアンジェリカの弟は泣いていた

「ひくっ…ひくっ…！姉さん…。」

アンジェリカの弟が薄暗い牢屋ですすり泣いていると

向かいの牢屋から声が聞こえてきた

「おいおい…。うるせえなあ！寝れねえじゃねえかよ！」

「ひっ！ごめんなさい！」

「分かりやいいんだよ！分かりやあよ！それにしてもよお？」

向かいの牢屋の男が鉄格子に手をかけると

少し力が抜けたような声を出したが

アンジェリカの弟をいる牢屋の方を覗き込んだ

「おい坊主？お前は何して捕まったんだ？」

「僕？僕は何もしてないよお…！何もしてないのに攫われたんだ！

うっ！」

アンジェリカの弟は涙を流しながら鉄格子を掴んだ。

すると、男は言った

「おいおい！気をつけろよ！海楼石が入ってるからな！

それにして何もしてないのか！そりや難儀なこった！そりやア…？お前の名

前はなんてんだ？」

「僕の名前？僕の名前はルーク：マーベラス・D・ルーク：」

「ほお…」D”か…」

「おじさんは？」

「俺か？俺はジョン・ロウって言うんだ！」

「ジョン？」

「ああ！知らねえか？それなりに有名だと思うがな？」

「知らない…。あまり島の中以外の事は知らなかったから…」

「ちっ！そうかよ…」

「おじさんは海賊なの？」

「お！分かるかい？そうだけ！溶解”のジョンとは俺の事よ！」

”溶解”？」

「おう！そうだ！俺はドロドロの実を食べたんだ！触ったものを溶かしたりできる！」

「じゃあ…何で…。おじさんは？捕まったの？」

ルークの言葉にエドワードは少し静かになると

鉄格子にもたれかかりながら言った

「俺はなあ…ルーク？ある小さな海賊団を率いてたんだ…。んで、ある時…ある島にあつた銅像を溶かしたのさ…。それが運の尽きだ！その銅像は天竜人の銅像か何かで

よ……。それで俺は狙われることになった……。世界政府と海軍によ……。でも、俺は気にせず航海をしていた……。しかし、そんな時！ある男に出会ったのさ！」

「ある男？」

「ルーク……お前……」海の死神「……って知ってるか？」

「海の死神？知らないよ……」

「海の死神って言うのはなあ？ルーク……。俺ら海賊からの恐れられる名さ……。そいつにあつた海賊は無事ではいらねえのさ……。んで、俺は運悪くそいつに出会ってしまった……。俺の海賊団は壊滅に追い込まれて、捕まった俺は貴族の奴隷になるためにこの船に乗せられたのさ」

「そうなんだ……。大変だね……。おじさんも」

「……まあな」

ルークはジョンと喋りながら、三角座りをして

隅っこの方で縮こまって寝てしまった……

—— ルークは夢を見た……

燃え盛る軍艦の艦隊……

軍艦の周りから出てくる大きなタコの足：

ボロボロのマストをした船：

船が火を吐きながら向かってくる：

そうして、その風景を夢で見ていたルークの前に人影が現れる

まるでタコの化け物のような格好をした男が自分を見を下ろしている

その男の近くに自分の大切な肉親である姉が倒れている

その男はルークを見下ろしながら言った

「死ぬのは怖いだろうか？」

—————

「うわあ！はっ！はっ！はっ！はあ…」

ルークは驚いて声を上げた

そして、目覚めた

「今までの予知夢とは違う…」。

今までの予知夢は音なんか聞こえなかった…！

あれは一体…何なんだろう…。」

しかし、ルークの眩きは薄暗い船底に消えていった

—————

一方、トルトウーガでは、

ジョーンズとアンジェリカは

船着場に到着して、アン女王の復讐号が停泊している場所に向かっていた

「本当に策はあるんでしょね！」

「ああ…。あるさ…。」

アンジェリカの間に鬱陶しそうに目を細めながら歩いていると

アン女王の復讐号の近くまで来た

周りの栈橋には物資が積まれており

それをルチアーノやボロボロの布纏い変なお面をつけた男達が運び込んでいた

「あ！キャプテン！帰ってきたみたいだ！」

ルチアーノがジョーンズの姿を見て言った

すると周りの変な男達もジョーンズ見た

「ルチアーノ！マツカスからの連絡は？」

「もうすぐ着くそうだよ！キャプテン！」

「そうか！大変…宜しい！」

そう言うと、ジョーンズはアンジェリカを連れてアン女王の復讐号に登って行った
アンジェリカはアン女王の復讐号の甲板あがると

周りの見渡し、ギョツとした手すりや色々な飾りのところに

人の頭蓋骨や大腿骨なんかが使われているではないか！

「ね…ねっ…ねえ？これ何？」

「あん？人の骨に決まってるだろうが？」

「見りや分かるわよ！誰の骨よ！」

「あん？そりや知らねえなあ？」

ジョーンズのその言葉にアンは卒倒しそうになりながらも

ヨタヨタつとしながら、海側の手すりに手をかけて持ちこたえた

すると！まるで地響きのような音が聞こえたかと思うと

アンジェリカが見ていた景色の中に

水飛沫をあげながら、フライングダッチマンが浮上してきた

「!!!何…よ…あれ…!!!」

アンジェリカが後ずさりをする。と何者かに当たった

そして、ゆっくり後ろを見るとゴライアスが立っていた

「きゃああああ！」

アンジェリカが悲鳴をあげていると

ジョーンズが近づいて言った

「ようこそ！お嬢さん！悪名高き我がジョーンズ海賊団へ！

あの船は俺の船でフライイングダッチマン号だ！

そして、あの船を操るのは俺の手下達だ！」

ジョーンズはそう叫ぶと

アン女王の復讐号の帆柱からマツカスたちが出てきて言った

「船長…準備が出来ました…」

「そうか…良くやった！アン？聞いてんのか？おい！」

手すりに寄りかかっているアンジェリカを揺すった

しかし、反応がない

「おいおい！気絶してんのかよ」

アンジェリカは驚きのあまり、失神したのであった

戦いに備えよ2

ベケットが率いる海軍の大艦隊は
トルトウガに向かう為

夜の海を進んでいた：

ルークは薄暗いジメジメとした牢屋の中で寝ていると
牢屋が並ぶ通路を1人のCPの職員が歩いてきて
ルークの牢屋の前で止まった

「マーベラス・D・ルーク！

ベケット長官がお呼びだ！出る！」

「えっ……なんで……？」

男の言葉にルークは後ずさると怯えた声を上げた

その様子を見てCPの男は言った

「つべこべ言わずに出るんだ！」

男は牢屋の扉を開けて

ルークのいる牢屋の中に入ると

ルークを掴み持ち上げた

「うわあああ！降ろしてよお！離してよお！」

「うるさい！黙れ！」

ルークを持ち上げた男は牢屋を出ると

ルークを掴みあげたまま、甲板に出る階段を上っていった…

—————

デイヴィー・ジョーンズ side

「ん…うん……はっ！」

失神していたアンジェリカは

ベットから起き上がった

「私は…どうしたの？それに…ここは…？」

起き上がって周りを見渡すと

そこは赤を基調とした豪華な船室だった

すると、船室の扉がノックされた

「…!!誰?」

船室の扉が開くと

ルチアーノが入ってきた

「おや? やつと起きたみたいだね? 無事そうで何よりだよ」

ルチアーノはアンジェリカの寝ているベットに近づいた

アンジェリカはルチアーノの顔を見て

驚愕の表情を浮かべて言った

「あなたは…化物船員と一緒に居た…!」

「ハハハ…。そういうイメージがついちやったか…。

こつちも急に失神したからびっくりしたよ」

ルチアーノはアンジェリカ of 言葉に頬をポリポリとかきながら

苦笑いを浮かべた

「!!そうよ! 私は失神したんだった!

ねえ! 私が失神してどれくらいいたったの?」

「ん? そうだねえ? もお…夜だからあ…。

あれから…2時間くらいだよ?」

「2時間…!!船は!」

「ん？船かい？もう出航したよ？」

「えっ……」

「君が失神している間に物資の積み込みも終わったし

この船とフライングダッチマン号は出航したよ？」

「嘘……」

「それよりもアンジェリカ？船長が呼んでるよ？」

「え？何でよ？」

「アンジェリカを晚餐会に招待するようにつて言う船長の命令だからね？さあ、立った
立った！」

「ちよ……ちよつと！」

ルチアーノはアンジェリカの手を引きながら立ち上がらせた

そして、船室を出ると甲板上に出る階段を上り

甲板に出ると、そこにはマツカス達が作業をしていた

「ひっ！」

アンジェリカが怯えた声をあげると

ルチアーノは苦笑いをしながら言った

「大丈夫だよ？いい人達ばかりだから！」

「おいおい？ルチアーノオ？女を連れてどこいくんだア？」

「可愛い女だなあ？おい！ギャハハハハハハ！」

マツカス達が笑いながら言う

ルチアーノが言い返した

「ハハハ…。船長のところさあ！」

ルチアーノがそう言うのとマツカス達は黙ってまた作業し始めた

そして、ルチアーノ達は船長室に向かう階段を登り、

船長室の扉をルチアーノがノックをして言った

「船長！アンジェリカ嬢をお連れしました！」

すると船長室からジョーンズの声が響いた

「そうか…。中に入れろ！」

「だつてさ…。さあ…。中にお入りよ」

アンジェリカはビクビクしながらも

船長室の扉を開けた…

戦いに備えよ3

アンジェリカが船長室に入ると

その空間はアンジェリカが寝ていた船室と同じく赤を基調としており、至る所に蠟燭が燭台の上に置いてあった。

その部屋の真ん中に、赤い炎のような色のステンドグラスを背に

ジョーンズは椅子に座りながら、机に広げた海図を見ていた。

すると、ジョーンズは海図を見ていた顔をあげると

アンジェリカを見て言った。

「そこでボサツとせずにさっさと、こっちに降りてこい……。」

しかし、アンジェリカはジョーンズの言葉にも反応せず

ジョーンズの顔を見ながら呆然としていた

「おい……！聞いているのかア？アン？」

「あ……あなた！誰よ？」

「おいおい……？失神のせいで記憶でもなくしたのか？」

ジョーンズはアンジェリカの言葉に呆れた表情を浮かべながら言った。

そして、さらに言った

「ここはアン女王の復讐号の船長室だ…。」

この船の船長はただ一人…。この俺だ…おわかり？」

「えっ？まさか…。」

「やっと思いついたか？俺だよ…。ジョーンズだ」

「ええええええ!!!」

アンジェリカは驚きの表情を浮かべ声を上げた。

しかし、アンジェリカが驚くのも無理はない…。

何故なら、今のジョーンズは変身を解いており

後ろで縛ったオレンジ色の髪に切れ長の目で赤い目をした青年がいるからだ！

「ん？ああ？そうか…この本来の姿で会うの初めてだったな

これが変身する前の俺だ…。覚えとけよ」

「ほ…本当にあなたが…!!あのジョーンズなの？」

ジョーンズはその言葉を聞くと

溜息を吐いて机の上に置いてあつた

タコの足や蟹の爪などを掴むと身体に混ぜ込んで

すると、体や顔がみるみるうちに変化していき

いつもの”海の悪霊”の姿になっていった

「ふう……これでもいいかあ？」

「!!」

「さて、そろそろ晚餐にしようか」

ジョーンズはそう言うのと椅子に座りながら

腰に付けているカトラスの柄を触つたすると

急にアンジェリカの後ろの扉が開くと

そこには大量のロープが蠢いていた

「きゃあああああー」

アンジェリカはその光景に悲鳴をあげたが、

ジョーンズはさらにカトラスの柄を操作すると

たくさんロープがアンジェリカを優しく包み込んだ。

ジョーンズのいる机の前まで下ろすと

他のロープがアンジェリカの後ろに椅子を置いてきちんと座らせた。

そして、ジョーンズがさらにカトラスを操作すると

他のロープが鳥の丸焼きやパンや酒や新鮮なフルーツの盛り合わせなどを運ぶと、

ジョーンズ達が座る机の上に並べていった。

ジョーンズは最後にもう一回カトラスを動かすと全てのロープが船長室が出ていった。

アンジェリカはその様子をびつくりした様子で見えていたが

料理の美味しそうな匂いに、お腹を鳴らして恥ずかしそうに顔を赤らめた。

(そういえば…。ルークを助けるのに頭がいっぱいで

このところまともに食べてなかつたわね。)

その様子をジョーンズは見て

ニヤツと笑うと言った

「まずはお前の弟を救う前に腹ごしらえだあ！遠慮をせずに腹一杯に食うといい！」

ジョーンズの言葉にアンジェリカは不思議そうな顔を浮かべながら

ジョーンズを見た

それに気づいたジョーンズは言った

「なんでこんな事までするのかと言いたい顔だな

何でこんなことをするかって？それはお前は、この船の客人だからだ！」

「でも、いくら客人とはいえおかしいわ！海賊がこんなに優しいなんて！もしかして、何

か裏でもあるのかしら？」

「何も裏はないさ…？それとも俺と一緒に食べるのが嫌なのか？」

嫌なら、他の船員と一緒に食わせるぞ？」

アンジェリカはジョーンズの言葉に少しギョッとすると慌てて訂正をした

「違うわ！そういう意味じゃないのよ！」

「なら…早く食うがいい！」

ジョーンズは片手の蟹爪を机に叩きつけて怒鳴った

「分かったわよ…た…食べればいいんでしょ？」

アンジェリカはそう言うのと近くにあつた

クラムチャウダーを飲んだ

すると、口の中に魚介の濃厚な旨みと牛乳のまろやかな味が口いっぱい広がった

「!!何よ…これ…ものすごく美味しい！」

そう言うのとクラムチャウダーを凄い速さで食べ始め

周りの料理にも手を伸ばし始めた

その様子を見ながらジョーンズはワインの瓶に口をつけながら

生牡蠣にレモンを絞って、それを口に放り込んでいた

そして、ジョーンズが口で咀嚼する度に豊潤な味が口に広がるのを目を細めながら堪能していた

そして、ジョーンズは目を開けると料理にがつついていているアンジェリカを見て言った
「えらく食べるな？お嬢さんよ？」

それは全部うちの船員が作ったんだがなあ？」

ジョーンズの言葉にアンジェリカは

少し料理を口に運ぶ手を止めて

驚愕した表情を浮かべながら

ジョーンズの方を見た

そして、ジョーンズは言った

「ふふ……。それはいいとして……」

どうだ？デザートに青リングでもいかがかな？」

アンジェリカの前に青リング差し出した

アンジェリカはその差し出された青リングを少し警戒していると

ジョーンズは言った

「安心しろ……。毒なんか入れちゃいないさ……」

すると、アンジェリカはジョーンズが持っていた林檎を掴むと

その林檎をおもいっきり齧り、咀嚼した

アンジェリカの口には青リングの甘酸っぱい味が広がった。

アンジェリカはそれに顔をほころばせているのを

見ながらジョーンズはワインの瓶を飲み干すと

ビールのジョッキを掴み、鳥のもも肉齧りついた

少し咀嚼すると口は肉汁でいっぱいになり

それをビールで流し込んだ。

そして、またアンジェリカを見ると言った

「お前の弟を救う策をこれを食べた後に教えてやる…。

だから、まずは食え！」

その言葉にアンジェリカは頷くと

黙々と食べ続けた

—————

ルーク side

ルークはCPの男に掴み挙げられながら、

エンデヴァアの甲板に出ると

慌ただしく海兵やCPの職員が動き回っていた

それを知り目にルークはベケットのいる船長室へと運ばれていった

CPの男が船長室の扉に立っている海兵に近づき、挨拶を済ませると扉を3回ノックした

すると、船室からベケットの声ともう一人の会話が途切れ途切れ聞こえてきた
(ですから……長官……これは……無理……ですが！)

(ふむ……だが……何故？……それには……)

男がもう一度ノックをすると

会話がやみ、ベケットの声が聞こえた

「誰かね？」

「失礼します！マーベラス・D・ルークを連行して参りました！」

「ふむ……そうか。入り給え」

「失礼致します！」

船長室の扉を開けるとそこは豪華な装飾が施されていおり

部屋に至る所に調度品が置いてあった

壁には大きな海図が貼り付けてあり、

近くにはベケット自身の肖像画が飾られていた

その部屋の右側に机があり

そこにベケットが座っており

近くには海軍コートを羽織り、コートの下は小綺麗な礼服を着ており

、立派な略帽を被っており、白粉カツラを付けた将校が立っていた

「ノリントン君。」

これから、私はルーク少年と話す予定があるのでね…

出て行ってくれたまえ…」

「しかし、長官！今はCP9のエージェント達も任務の為に居ないのに！どうやって！あの海軍支部を壊滅させた怪物を倒すんですか！」

「ふむ…。君は今のこの艦隊戦力では

トルトゥーガにいるあの悪霊に勝てないか？」

「そうとは言ってはいません！」

しかし、多大な損害が出ると進言したいのです！」

「そうか…。だが、私が勝てない戦いに挑むと本当に思っているのかね？ノリントン少将」

「い…いえ！そんな事は！」

ベケットはふと、腕時計を見ると言った

「私の切り札がそろそろ合流してくるはずだ…」

ベケットはそう言うのと立ち上がり

ノリントンとルーク達を見て言った
「少し甲板に出て見ようじゃないか……」

そして、ベケット達は船室を出て

甲板上に出ると

軍艦の艦隊の後ろからエンデヴァーよりもふた周りほど大きな船が近づいてきた
見張り台の海兵が叫んだ！

「あ……あああ……あれは……サイレント・メアリー号だあ……」

見張り台の海兵の言葉に周りの海兵の顔が明るくなつた

—————

この船は一体何か？

この船の名はサイレント・メアリー号

普通の海軍の軍艦よりも大きく

船首には戦いの女神の像があり

マストの大きな帆には双頭のカモメの絵が書かれており

船首と艦尾に連装回転砲塔が4門

普通の砲門が左右合わせ80門

三本マストの戦列艦であり

オックス・ロイズ号の再来とも言われている
海軍最強の軍艦である

それを指揮するのは：

—————

ベケットはサイレント・メアリー号を見るとニヤつと笑った

ノリントンにはあまりの事に驚愕の表情を浮かべていた

ルークは呆然とサイレント・メアリー号を見ていると

サイレント・メアリー号からエンデヴァー号に跳ね橋がかけられ

サイレント・メアリー号から一人の男が降りてきた

その男は頭の黒い髪をオールバックにし、鼻が高い顔つきで勇ましく

服装は海軍コートの下は黒い軍服を着ており、胸にはたくさんの勲章が光っていた

腰にはレイピアをさしており、柄の先にはカモメのマークがあった

この男の名は：アルマンド・サラザール：

海軍大将で海賊からはひどく恐れられており：

もしも、海でサラザールに出会おうと

それは命日と言われるほどである

海賊達から付けられた通り名は

”海の死神”や”海の処刑人”と呼ばれるほどである…

サラザールはベケットに近づくと

歯を見せながら笑うと言った

「それで？何処にいる？俺が殺すべき海賊は？」

海の死神VS海の悪霊1

ルークside

サイレント・メアリー号が合流した

ベケットの率いる海軍の艦隊は

トルトゥーガ諸島の近海まで迫ってきていた

ルークはエンデヴァー号の船長室にある

椅子に座らされていた

そして、ルークの目の前にはベケットが優雅に紅茶を飲んでおり

更に、ルークの横にはサラザールがこちらを見ながら

レイピアの手入れをしていた

すると、突然サラザールが口を開いた

「こいつが…。」例の少年”か…?」

少し拍子抜けした部分もあるが…」

「その子が確かにそうですよ?サラザール大将殿」

「ふむ……。こいつが海賊共をこの世から消しきる……鍵になろうとは！」

世の中分らないものだな」

「ええ……。全ては政府の利益の為……。政府の害になる者は早めに摘まなければならない……。それにはこの少年の能力が必要なのですから……」

ベケットの言葉にサラザールは少しニイッと笑うと

つられてベケットも含んだ笑みを浮かべながら 笑った

「それで？この少年を狙っている海賊の名は？」

「ふむ……」

ベケットは紅茶に口をつけて少し飲むと

自分の座っている机の引き出しを漁り

一枚の指名手配のポスターを出して

サラザールに向けた

「奴の名はデイヴィー・ジョーンズ……。またの名を『海の悪霊』といい
億超のルーキーだ……」

ジョーンズの指名手配のポスター写真を

サラザールは食い入るように見ると

こう呟いた

「海の…悪霊…？ククッ！クハハハハ！」

サラザールは急に笑い出し

そのせいでベケットもルークも

少しギョツとした表情を浮かべ驚いた

「この男の事はよく聞いているぞ…。」

我らの正義に喧嘩を売った愚かな海賊だあ！」

そう叫ぶと、サラザールはレイピアを瞬時に抜き

指名手配のポスター写真を引き裂いた

そして言った

「フッフフ…！今日はこいつの命日なるだろう…！」

サラザールはひどく興奮した様子で

肩で息をしながらレイピアで引き裂いた手配書を眺めながら

それを見て、ベケットはため息を吐きながら

紅茶をまた飲むと言った

「まあ…海賊は貴方にお任せしますよ…。サラザール大将

しかし、目的はジョーンズだけではないのだよ……？

もう一つはこの少年の姉を無事保護をする事にありますからな……。すぐに船を沈めるのはやめて頂きたいのだが？ いいですか？」

サラザールに釘を指すようにベケットは呟くと

サラザールは言った

「それは分かっている！先に民間人を保護してから船を沈めるとも」
「それでいいですが……」

またベケットは紅茶を飲むと

船室のドアがノックされた

「失礼致します……！」

そう言う中に入ってきたのは

左目に眼帯をつけた

サラザールの副官のレサロ中佐だった

「トルトゥーガが見えてまいりました！」

レサロの言葉にベケットが言った

「ふむ……。着いたか」

ベケットの言葉を尻目にサラザールは

レイピアを抜くと上を見上げながら言った

「さあて、始めるぞお…海賊狩りだ！」

海の死神VS海の悪霊2

ルークside

「急げ！トルトゥーガに停泊している船を

外洋に出さない様に湾を封鎖するんだ！」

『ハッ!!!』

ノリントンの命令に海兵達は慌ただしく動き出した

ノリントンは電伝虫をポケットから取り出すと

周りの軍艦にも指示を出し始めた

「只今より、この湾を封鎖する！全艦隊は指示通り動いてくれ！」

((了解！))

ルークが捕えられているエンデヴァー号は

一列に並んだ軍艦の最も真ん中におり

そのエンデヴァーの前にはサイレント・メアリー号がいた

エンデヴァー号の甲板上では

ベケットが椅子に座りながら優雅に紅茶を飲みつつ

包囲網をしようとしている艦隊の様子を

見ながら言った

「ふむ…ノリントン君はよく働いているな」

ベケットの近くにはルークもいた

ルークはひどく怯えていた

「うう…姉さん…」

そのルークの様子を見てベケットは言った

「よく見るといい…。君を助けようとした者がどれだけ苦しむか…。

それにこの席は特等席だ。島が燃え盛るのがよく見えるからねえ…。」

ベケットはククツと笑うと

また紅茶を飲んだ

ルークは俯きながら目に涙を溜めて呟いた

「姉さん…。」

ベケットが紅茶を飲んでいると奥から

ある男がベケットに近づいてきた

その男は

髪をオールバックにして

三角の形をした帽子をかぶり

茶色いコートに身を包んだ

鋭い目つきと目の下にクマのある初老の男

この男の名はマーサー

ベケットの副官である

「長官……。湾の封鎖は完了しました……。しかし、アンジェリカの乗ったとされる赤い船は停泊していないようですが……。宜しいのですか？」

「うむ……。あの女は必ずやこの少年を奪還しようとしてくるはずだ

だから、またこの島に戻って来なければならぬだろうからね……。」

「……そういう事でしたか……。このマーサー……。一生の不覚です。」

「それよりもマーサー……。第二作戦は進んでいるのかね？」

「それは滞りなく進んでおります……。」

「ふむ……。そうか、宜しい……。では、始めるとしよう……。」

そう言うとベケットは

持ち上げていたカップをソーサーに置き

マーサーに言った

「ノリントン少将に上陸命令を出したまえ

サラザール大将にはまだ停泊している海賊船を砲撃してもらおうようにするのだ…」

「了解致しました…。」

マーサーは奥に引つ込むと

電伝虫を使いノリントン少将に指令を伝えたのだった

—————

ノリントン side

「全艦隊！必要最低限の乗組員以外は全員トルトゥーガに上陸する！

安心しろ！我々にはサラザール大将がついている!!」

ノリントン少将は自分の乗船している

軍艦の船首の砲塔の部分から部下に指令を出した

海兵達は先程まで作業していた手を止め

ノリントン少将の言葉を聞くと海兵達は言った

『了解ッッ!!』

「なら、急げ！早くボートを降ろすんだ！」

ノリントン少将の言葉に

海兵達はボートを海に降ろし始めた

ノリントンは満足そうに海兵達を見る一方で

少し不安を感じていた

それは、トルトゥーガの湾に何故か薄い霧のようなものが

立ち込めていたからである

(この霧はなんだ？まさか…何かあるのか？)

ノリントンは少し不安になりながらも

海兵達が乗っていくボートを見つめていた

—————

サラザール side

「フフツ！ベケットめ！嬉しい事をやらせてくれるじゃないか！」

サラザールはベケットからの指令を聞き

口角を上げながらサラザールはレイピアを抜くと

サイレント・メアリー号の司令所に立つと叫んだ

「いいか！戦友諸君！只今より本艦は

停泊している海賊船を砲撃する！

いいか！この島から海賊共を生きて返すな！」

『了解しましたア!!』

「宜しい！砲門を開け！目標は……！停泊中の海賊船だア！」

サラザールの部下は慌ただしく動き始め

瞬く間に発射準備が完了した

レサロはサラザールに近づいて言った

「閣下……発射準備完了しました」

「良し！撃てええええ!!」

サラザールの号令と共に

サイレント・メアリー号から発射された船は

トルトウーガの港に停泊していた

海賊船達を次々と破壊していった

「さて……！ジョーンズ……！俺の前に出てくるがいい！」

サラザールはそう言うとうと

レイピアを真っ直ぐ燃え盛る海賊船の方向に向けて笑った

—————

海兵 side

海軍の軍艦から降ろされた

多数のボートがトルトゥーガの港に向かおうとしていた

一人の海兵が一生懸命オールを漕いでいると

「ん……あれ？」

目の前に居たはずの仲間のボートが消えたのだ

一緒に乗っていた海兵達もざわつき出した

「霧のせいで見えねえのかな？」

「もう先に進んだんだろ？」

「おかしいなあ？さっきまで前にいたと思ったが……」

「おい！早くしろ！早くしねえと上陸できないだろ！」

「そ、そうだな……」

また海兵はオールを漕ごうと

水面を見ると

海に何か太いものが動いたのが見えた

「ん……？何だ……あれ？」

すると一緒に並行していたボートの近くに

急に水飛沫が上がったと思うと

海の中から前を進んでいたハズのボートの残骸が浮いてきた

「え……？」

その瞬間……。海の底からたくさんの大きなタコの触手が出現した!!

そして、オールを漕いでいた海兵は叫んだ!

「クッ！ククッ！クラーケンだアアア！」

しかし、海兵が叫んだ瞬間

叫んだ海兵と共に仲間の乗ったボートは

海の底に引きずり込まれた

そして、海兵達の叫び声は無情にも

砲撃の音でかき消されたのであった

海の死神VS海の悪霊3

ーノリントン少将sideー

「ん？何故だ？なんでだれも…。上陸したとの連絡をよこさない？」

ノリントンは不思議に思い

腰に下げていた望遠鏡を掴むと

海兵達がボートで向かってるトルトゥーガの船着き場を見た
霧のようなものがかかったトルトゥーガの船着き場を見ると

1隻もボートのようなものは無かった

「一体何が…。」

ノリントンは一番霧の濃い目の前の湾に望遠鏡向けた

すると、濃い霧の中に何かの腕のようなものが

動いているのが見えた

「おい！すまないが探照灯を前の湾に向けてくれ」

『ハッ!!』

ノリントンには近くにいた海兵に命令すると

海兵は船先にある探照灯を湾の方に向けた

濃い霧の中に点消灯が当てられると

ぼや／＼と何かが見えてきた

「あれは……!」

ノリントンが見たものそれは

ボートに乗っている海兵達を食べようとするクラークンの触手だった!

「!!!緊急事態だ!電伝虫を繋げ!包囲網をさせてる軍艦に探照灯を湾に向けるよう指示してくれ!緊急用の鐘を鳴らせ!早くしろ!」

ノリントンはそう海兵に命令すると

海兵は慌てて電伝虫を使って周りの軍艦に知らせた

そして、もうひとりの海兵は艦尾にある鐘を鳴らした!

包囲網をしいている軍艦が探照灯を全艦向けると

霧がかつてるトルトゥーガの湾は明るくなった

そこには!湾の真ん中にはクラークンが大きな口を開けて

海兵達を飲み込んでいっているのが見えた

「クソ！急げ！早く仲間達を助けるんだ！」

ノリントンの号令に海兵達は

軍艦の砲塔をクラーケンに向けた

「よし！撃て！」

クラーケンに向けて

砲弾が発射され、クラーケンの触手に命中した

「グおおお！オオオオオオン！」

クラーケンは苦しそうに声を上げると

触手を海の底に沈めていった

「サラザール大将に連絡をとれ！これは罠だ！」

海兵は慌てて電伝虫でサラザール大将に連絡を取ったのだった

—————

ーサラザール side ー

「何だと？クラーケンだと？」

サラザールはノリントンの報告を聞いて

怪訝な顔をした

「どうしたのですか？サラザール大将」

「クラーケンは北極海にしかないはずだ…」

「そうなんですか？」

「ああ…。もはや！」

「どうしたんです？」

「フツフツフ…成程…。ジョーンズか…。深海の悪霊とは…よく言ったものだ…」

サラザールは少し笑うと言った

「急げ！海兵たちを救助するのだ！」

『ハッ！』

—————

ーノリントンsideー

「撃って撃って撃ちまくれ！」

『了解！』

軍艦からクラーケンに向けて

大量の砲弾が振り注いでた

「グおおおん！」

クラーケンは触手を引っ込めると

海の中に潜っていった

「！いなくなつたぞ！」

「何処に行つた？」

「まさかこの船を狙う気じゃあ？」

「この包囲網を敷いてる軍艦がそんなことをさせないさ」

そう海兵たちが喋っていた瞬間

バキッと何かが壊れてる音がした

「……何の音だ！」

「ノリントン少将！舵が効きません！」

「何だと！」

ノリントンは慌てて艦尾から海の方を見ると

クラーケンの触手が舵を壊していた

「……おのれえ！」

ノリントンはそう言うと

懐からピストルを取り出し

クラーケンの触手に向けて発砲した

すると、クラーケンの触手はまた海の中に沈んでいった

「クソツッ！」

ノリントンがそう言っていると

突然！爆発が起こり、軍艦が大きく揺れた！

「何だ！何が起こっている！」

「少将！ご報告申し上げます！船内に突然！バケモノのような海賊が現れました！」

「何だど!?それにこの揺れはなんだ！」

「そのバケモノ達は！火薬庫に手投げ弾を投げ込んだ模様！」

「何い！」

ノリントンは慌てて船室へ入っていくと

そこには戦っている海兵の姿があった

「あ！ノリントン少将！」

「ウガアア！」

「クソツッ！このオ！」

まるで海の生物と一体化したような海賊が

海兵に斧を振り下ろそうと襲いかかっていた

その様子を見たノリントンはピストルでその海賊を撃ち抜いたが…

「ウ……ウガア、ア、ア、ア、ア！」

そのバケモノは死ななかつた

逆に更に暴れ出したのであつた

「ウアアアア！」

「クソ！ 離せ！ 化け物め！」

ノリントンは剣を抜くと海兵に加勢しようとしたが

さらに軍艦が大きく揺れた

その衝撃でそのバケモノは壁をぶち抜いて

何処かに行つてしまった

「おい！ 早く立て！ 上に出るぞ！」

「はい！ ノリントン少将！」

慌ててノリントンと海兵は

船室から甲板上に出ると

ノリントンは包囲網を敷いてる艦隊の後方から

一隻の船が近づいているのが見えた

「何だ！ あれは……！」

その船はアン女王の復讐号だつた！

ジョーンズは叫んだ！

「作戦通りだ！遂にこの時がきたア！」

ジョーンズがそう叫ぶとあげていた片手を振り下ろした

そうすると！船首からノリントンの軍艦に向かって火が発射された！

瞬く間にノリントンの軍艦は火達磨になっていった・・・。

海の死神VS海の悪霊4

（ベケットside）

「長官……報告申し上げます！ジョーンズが現れました！」

ベケットのいる船室に慌てて入ってきた海兵は

息絶えだえになりながら、ベケットに報告した

すると、立って窓から外の様子を見ていたベケットは

窓の方を向きながら言った

「そんなことを報告しなくてもわかってるよ……。損害は？」

「はっ！みつ……。未確定の情報ではありますが……！どうやら三隻の軍艦が大破及びに炎上しているとのこと！」

そして！その他の軍艦も現在交戦中とのことでもあります！」

ベケットは報告を聞くとゆっくり振り向いた

「ふむ……。我々を孤立させて最後にやる気の様だな……。ジョーンズは」

「もう一つ……。報告しなければならぬことがあります……。」

「何かね？」

「ノリントン少将の乗る軍艦が、ジョーンズの海賊船により攻撃を受けて炎上しております…。」

ノリントン少将の安否不明であります…。」

「ふむ…そうかね。」

では、ノリントン君が持っていた艦隊指揮権を

只今よりサラザール大将に任せるとしよう」

ベケットはそう言うと言とうと椅子に座り

そして、言った

「電伝虫でそう…サラザール大将に伝えたまえ…。」

ああ…。それとあの少年の檻に警備を増やしておいてくれ」

「はっ…。」

海兵は扉を開けて、

走るようにしてベケットの船室から出ていった

ベケットは一人になった船室でニヤツと笑いながら言った

「やはり来たか…。ジョーンズ…！だが、あの道具は奪わせんぞ。」

くジョーンズsideく

「撃つて！撃つて！撃ちまくれえ！」

ジョーンズの怒号と共に

アン女王の復讐号の砲門はひっきりなしに火を噴いた

1隻…また1隻と海軍の軍艦は破壊されていった

すると、包囲網を敷いていた一隻の軍艦が

アン女王に向かって突進してきたが

ジョーンズがカトラスをその船に向けて叫んだ

「ちよこざい真似を…。邪魔を…。するなあア！」

その瞬間！アン女王の復讐号の船首から火炎が発射され

瞬く間に海軍の軍艦は炎をに包まれた！

そして、火薬庫が誘爆して軍艦はバラバラに吹き飛んだ！

アン女王は軍艦の瓦礫が浮く海をかき分けながら

更に包囲網の真ん中にまで近づいていった

「よおし！第一作戦は成功だア！」

ジョーンズはそんなことを言っている

船の近くに砲弾が着弾して

船が大きく揺れた

「ぐおっ！なんだ！」

ジョーンズが周りを見渡すと

アン女王の復讐号に向かってくる一隻の軍艦があつた

それはサイレント・メアリー号だった！

「船長！あの軍艦はサイレント・メアリー号です！」

マッカスはそう言いながら、ジョーンズに近づいてきた

「サイレント・メアリー号だとお！」

「ええ……船長！サラザールという海軍大将の軍艦です」

「ほお……海軍本部の大將殿のかあ……俺の船に挑もうつてのかア？」

面白い！マッカス！急いで大砲を再装填しろ！」

「了解……船長お！」

マッカス達は船室に慌てて降りていった

また、サイレント・メアリー号から砲弾が発射されて

アン女王の復讐号が大きく揺れた

すると、先程まで包囲網敷いていた軍艦が

サイレント・メアリー号に随伴し始めた

「ふん！雑魚どもが！大将が出てきたから、一緒に戦うつもりか！」

「よし！先にあの雑魚軍艦を沈めてやる！よし！撃てええ！」

アン女王から発射された砲弾が、軍艦に向けられ発射された瞬間！

空中で爆発した！

「何だ!?何が起こった!」

ジョーンズはコートの中から望遠鏡を取り出すと

サイレント・メアリー号の方を見た

すると、船首の舳先に何かが着地した

それはレイピアを抜いたサラザールだった

「クソ！まさか……！斬撃を飛ばして砲弾を破壊しやがったのか！」

すると、ジョーンズはポケットから電伝虫を取り出すと

受話器をとりいった

「マックス！メテオ弾を装填しろ！」

目標は……！メアリー号の近くに随伴する軍艦だア！」

（了解！船長お！）

ジョーンズがそう、マックスに指示を出していると……！

海軍の軍艦が砲撃してきた！

飛翔音と共に砲弾がアン女王に襲いかかってきた

「チイツー！」

ジョーンズは少し舌打ちをすると

カトラスを振り注ごうとしてくる砲弾に向けて横にないだ！

すると！アン女王の復讐号の船体にあるロープが

まるで生きもののように動き出し

砲弾を全て弾き飛ばした！

アン女王の復讐号の空中で爆発が起こったが

アン女王の復讐号は傷一つもついていなかった

「よおしー今だア！撃てえー！」

アン女王の大砲から発射された砲弾は弧を描きながら

サイレント・メアリー号の近くにいた随伴艦に落ちていくと

ジョーンズは右手を握ると叫んだ！

『解除オー！』

ジョーンズがそう叫んだ瞬間……！

先程まで一つだった砲弾が、何十発の砲弾に変わり……！

メアリー号に随伴していた軍艦に雨霰のように降り注いだ！
見る見る間に軍艦は火に包まれ……。瞬く間に沈んでいった

「どおだア！俺の能力で作った特殊砲弾の味はア！」

ジョーンズがそう笑いながら言っている

先程の軍艦の燃えた煙の中から

サイレント・メアリー号が突っ切るように出てきた！

その瞬間……！ジョーンズの目の前にサラザールが現れたかと思うと

レイピアを構えた状態でジョーンズに向かって言った……！

「h o l l a . . . ! ジョーンズ！」

「お前は……！」

海の死神VS海の悪霊5

「お前はあ……」

ジョーンズは急に目の前に現れた

サラザールの姿に声を上げた！

サラザールは不敵な笑みを浮かべながら

レイピアでジョーンズを貫こうとした！

「然らばだ……！ジョーンズ！」

レイピアが深くジョーンズの胸を貫いたかに見えた！

しかし……！

「む……？」

サラザールのレイピアにより貫かれたジョーンズは

まるで人形のように動かなくなった……

さらに……！

レイピアがどンドン……

ジョーンズの体の中に沈みこんでいった……！

「……なんだこれは……！」

サラザールはレイピアを大きく振り上げ
ジョーンズのようなものを切り裂いた！

すると、中から本当の姿のジョーンズが現れた！

「ふう……。やはり用心しっていてよかったなあ……？」

お前みたいいな剣豪用の技を開発しっていて良かった」

ジョーンズはサラザールの方を見ると

目をカッと見開き叫んだ！

『クレイ・パベツト
粘土人形！』

すると、その粘土人形が

サラザールに襲いかかった！

しかし……！

「ふんっ！」

サラザールはレイピアで

目にも留まらぬ速さで切ると一瞬で

その粘土人形は賽の目に切れた！

サラザールはジョーンズの姿をまじまじと見ると

「やはり…能力者か…！」

先程の姿は変装だったとはなあ…！

それで？終わりか？ジョーンズ？」

サラザールは口に笑みを浮かべながら

また、レイピアを構えた

「いいや？まだだ…！大将殿オ！」

ジョーンズはカトラスを振り下ろした！

サラザールは素早くカトラスを受け止めると

ジョーンズのカトラスを受け流すと

サラザールは瞬時にレイピアを構え

乱れづきを繰り出した！

「ぐうううう！」

ジョーンズはサラザールの乱れ突きを

受け流そうとしたが…。

受け流せずにまともに喰らってしまった

「ふうむ…？本部の連中が言っているほど…

強くないな……？」

サラザールは怪訝そうにそう言った

そして、ジョーンズは肩や腕から血を流し

息を切らしながら言った

「グッ……やはり武装色を使えるか……！」

流石は本部の大将殿だ！だが……！」

俯いていた顔をサラザールの方に向けると

ニイッと笑いながら言った

「まだまだ……詰めが甘いよう……ですなあ！」

「なんだと？」

ジョーンズの言葉にサラザールは

ハツとして後ろを見ると

先程バラバラになったジョーンズの粘土人形が元通りになり！

落ちていた斧を掴み、襲いかかってきた！

「むーぬうん！」

サラザールは斧を受け止めると

また粘土人形を切り裂こうとした！

しかし……！サラザールのレイピアは途中で止まってしまった！

「ん？先程より固くなっているのか？」

「その通りだ！大将殿オ！」

俺の能力で粘土に俺の血を混ぜこみ！

血を混ぜ込んだことで粘土は！

俺の体の組織と同じになった！

さらに！俺の体から離れた粘土人形は！

俺の意のままに動かせる！つまり！もう一人の俺だ！

さらに、こいつはバラバラになると！

そこら辺のもので自分の足りない部分を代用しようとする！」

すると、サラザールのレイピアが

また沈み込み始めた！

「またか！」

サラザールはレイピアを引き抜こうとしたが、抜けなかった。

ジョーンズはその様子を見ながら笑うと言った

「粘土人形は今回吸収したものはどうやら

黒色火薬のようだな……！」

ジョーンズは粘土人形の近くで

壊れていた火薬樽を見るとニイッと笑うと言った

そして、カトラスを触りサラザールを

粘土人形ごとロープで縛り上げると言った

「さよならだ！海の死神イ！お前は海の悪霊には勝てないのさ！」

ジョーンズはそう言う

コートからピストルを取り出し

縛り上げているサラザールを撃った！

その瞬間！

アン女王の復讐号の上空で大爆発が起きた！

ジョーンズは爆炎を見ながら

笑うと言った

「口ほどにもないな……海軍大将は！」

そう、ジョーンズが言った瞬間！

爆煙の中から声が聞こえてきた

「考えを改めなければいけない…。それなりに強い」

「…！まさか！」

ジョーンズが驚愕の表情を浮かべた瞬間！

爆煙の中から少し服がボロボロになったサラザールが現れると！

両手にレイピアを持って構えながら

目の前に迫ってきた！

サラザールはジョーンズを見据えると言った

「少しは本気を出してやるぞ…。海賊う…！」

サラザールがそう言った瞬間！

サラザールの体の周りに気のようなものが集まり始めた！

（まさか！ゾロみたいな感じか！）

早く何か能力で体に混ぜこまねえと！ヤバイ！）

そう、ジョーンズが考えた時には既に遅く

サラザールは目の前に来ていた

「クソっ！」

『タイプロンツ！』

サラザールがそう叫んだ瞬間

サラザールの気がサメのように口を開けて襲いかかって来た！

「ぐっぐうううう！グおおおおお！」

ジョーンズはまともに技を受けてしまい

最初は受け流そうとしたが

耐えきれずそのまま船室へと突っ込んだ！

「ガハツ！！」

壁に叩きつけられ、ジョーンズは吐血した

「グツ……！クソツタレがあああ！」

ジョーンズは立ち上がってやり返そうとしたが

レイピアが飛んできて肩に深く突き刺さった

「ぐあッ！」

「形勢逆転だな……。だが、もう終わりだ……！海賊！

後悔して死ぬがいい！」

「クソっ！」

肩のレイピア抜こうともがいたが抜けず

ジョーンズにサラザールのレイピアが

心臓に突き刺さろう迫ってきた瞬間！

サラザールは何かを察知し、急に飛び退いた！

飛び退いた瞬間！そこにナイフが突き刺さった！

サラザールはナイフが飛んできた方向を見ると

そこには！宙に浮かぶ一人の男の姿があつた！

「お前は……！」

「ジハハハハハハ！なかなかのピンチ見てえだな！

ジョーンズ！」

「金獅子のシキイ……！」

海の死神VS海の悪霊6

サラザールはシキを睨むと

不敵な笑みを浮かべると言った

「おやおや……これまた新しい海のクズが現れたな。

報告にあつた……金獅子”のシキだな？

停泊してるはずの貴様の船が見当たらないから

さつさと逃げ出したかと思えば……。

わざわざ探し出して殺す手間が省けたな……。

フツ！まさか……自ら殺されに来るとは！」

サラザールは笑いながらそう言うとシキの方を向いた

「ジハハハハ！言うじゃねえか！」

流石は”海の死神” 大将殿と言ったところかあ？ジハハハハ！」

シキはそう言うのと懐から大量のナイフを取り出した

「あんまりよオ……。

この俺様を舐めるんじゃねえよ！海軍野郎！」

その瞬間！

シキは空中に放り投げるとナイフがフワフワと浮き出した

「獅子舞！舞雪！」

シキがそう叫んだ瞬間！

ふわふわと漂っていたナイフが急にサラザール向かっていった！

しかし、サラザールは剃を使い後ろに下がると

向かってくるナイフに対して斬撃を飛ばした！

「クエルボ・エスカトウーレー！」

すると斬撃はまるで鴉のような形となり

ナイフをまるで削り取るように破壊した！

その様子にシキは目をぱちくりさせて言った

「パ…：パパっ!？」

シキのいつものボケが決まったが…誰もツッコまなかった

その様子にシキは面白くなそうに葉巻を深く吸い吐いた

「ジハハハハ！流石は…：そのレイピア一本で海賊の大艦隊を沈めたことのある大将殿

だ！恐れ入ったぜ！だが…！」

シキが指をくいツと動かした瞬間！

サラザールの足にナイフがグサツと刺さった

「ジハハハハ！油断したな！この俺様を侮るからそうなるんだ！ジハハハハ！」

サラザールは自分の左足に刺さったナイフをじつと見つめると

柄を掴み引っこ抜いた

「アン？とうとうイカレちまったのか？ジハハ！」

「ふむ……この程度ならやつとお前と同等だろう……！」

「あ？何を言ってるやが……!？」

次の瞬間！

サラザールが消えたと思うと

シキの後ろに回り込んでいた！

「てめえっ！」

「この私を見下ろすんじゃない！」

堕ちろ！海賊風情がア！」

サラザールは体を回転させると

勢いよくシキに回し蹴りをくらわせた！

「ガッ！」

シキは勢いよく甲板に叩きつけられボートを破壊した!

サラザールは着地すると落ちていったシキの方を向かい始めた

「本当に最近の海のクス共は…悪魔の実の能力に頼りすぎて、殺しごたえが無いな…。
弱すぎる…」

この前取りに逃がした”白ひげ”とか言う海賊も弱かったな…」

サラザールがそう言いながらシキに向かってしていると…!

突然! マストからジョーンズが現れて

斬りかかってきた!

「ぬう! えええあああ!」

「つ! おやおや? あれだけ痛めつけたのにまだ動くのか! ジョーンズ!」

「ふん! この俺を誰だと思ってる? 俺はデイヴィー・ジョーンズ! 海の悪霊だア!」

ギインつと…レイピアとカトラスが交叉しながら

刃を受け止めあつた!

ジョーンズはサラザールを睨むと

手を変化させて言った

「喰らいやがれ! 死神野郎が!」

左手を蟹の爪に変化させてサラザールに襲いかかったが…

新たなレイピアに阻まれた

「フツッ！やはり面白い能力だな…貴様の能力は！」

「クソッ！やはり一筋縄ではダメか！」

サラザールはジョーンズを突き放すと

レイピアに更に武装色を纏わせるとジョーンズに向かっていった！

しかし！サラザールの横から大砲の砲弾が飛んできた！

サラザールは見聞色の覇気で砲弾を避けると

砲弾の飛んできた方を見た

そこには砲弾がフワフワと浮かせながら

こちらを見て笑う金獅子のシキの姿だった

「おいおい…何をしているんだ？大将さんよお…」

まだまだ…俺様との勝負はまだついてねえぞお？ジハハハハ！」

「おい！金獅子イ！こいつの今の相手は俺だ！引つ込んでろ！」

その様子にサラザールはレイピアをカタカタさせながら叫んだ

「フツッ…この私も舐められたものだ…まさか私に勝てるんでも？

舐めるなよ…！海のクズ共オ！

この私の役目は、お前らのような海のクズ共を殺す処刑人…。いや、お前らの死神だ

…！」

サラザールはレイピアを構えた瞬間！

懐にある電伝虫が鳴った！

プルプルプル…！プルプルプル…！ガチャツ！

「何だ？」

（報告致します！エンデヴァー号の近くに

もう1隻海賊船が現れました！）

「何だと？もう1隻？金獅子の船か？」

（い、いえ！真つ黒な船で…あの船は…！あつ！あれは！）

「どうした？何があった！」

（ジョーンズ海賊団です！ジョーンズ海賊団の船です！）

「何だと？ジョーンズの船がもう1隻？」

（それに…！あれは！もう1隻の船にターゲットがいます！）

「何だと？ベケットが言っていた女が船に乗っているだと？」

サラザールが部下とそう話していると

ジョーンズは懐から懐中時計を出すと時間を確認し

ニヤリと笑いながらサラザールを見た

「ハハッ！上手くいった！まんまと俺の作戦と陽動に付き合ってくれて御苦労だったなあ？大将殿オ？

海兵たちをあの島に上陸させようとしたのも

この湾を封鎖させたのも

クラークを差し向けたのも

この俺がお前らに襲いかかるのも

全て計算のうちだあ！

本命はあの船が孤立させる事だったのさ！」

ジョーンズはチラツとシキを見ると言った

「まあ…多少のイレギュラーがあつたりはしたが…

だが！それを差し引いても大成功だ！

あの小僧はこの俺がいただく！ナハハハハハハ！」

ジョーンズは笑うとサラザールに向かつていった！

海の死神VS海の悪霊7

ーアンジェリカsideー

エンデヴァーに砲撃を行いながら

すごい速度で近づくと1隻の船があった。

その船は黒い真珠のように船体も帆も真っ黒な船だった。

その船の名は『ブラック・パール号』

その船の艦尾楼甲板にアンジェリカは

望遠鏡を覗き込みながらエンデヴァーを睨んでいた。

「急いで！相手にこの船に攻撃をさせる暇を与えないで！」

『ヴォオオ！』

アンジェリカの言葉に異形な姿の船員達は雄叫び声をあげた！

アンジェリカはその様子を見ながら

ジョーンズに言われた作戦を思い出していた…。

戦いが始まる二時間前

「いいか？まず、お前の弟を救い出す前に

処理すべき問題が2つある。」

ジョーンズはワインの瓶を掴みながら

アンジェリカを指さしそう言った

「まずは、海兵共の数を減らす事。いくら俺が能力者といえど…軍艦10隻分の海兵共と戦うのは、無理がある。だから、連中の数を減らす必要がある。」

二つ目は、連中を身動き取れなくする必要がある。俺の船でともに海戦なんかすれば勝ち目はないだろうよ。相手の船の数、更には砲門の数で負ける。どれだけ俺の船が強くて、も数には勝てない。」

だから、一箇所に固めてそこを叩く必要がある。」

この二つの問題をどうにか出来れば、あとは孤立したCP9の軍艦を襲って弟を助けられる。」

ジョーンズの言葉にアンジェリカは驚愕の表情を浮かべた。

「ちよっ…ちよっと待って！あんなに啖呵をきっておいで！

まさか弟を助けられるか分らないの!？」

アンジェリカの言葉にジョーンズはパイプを吸いながら

鬱陶しそうにアンジェリカを見た

「あのな?この二つの問題が残っていても暴れりやあ…。連中に損害を与えて、お前の弟を助けられるかもしれん…。しかし、お前の弟が無傷で助かるとは保証出来んぞ?別にそれでも構わんのなら、何も心配せずに暴れまくるが?」

ジョーンズの言葉にアンジェリカは

恥ずかしそうに俯きながら言った

「あっ…あああ…。そういう事なのね!」

ジョーンズはアンジェリカを

見ながらため息をつくとかトラスをいじった。

すると、ジョーンズとアンジェリカの目の前に

ロープが海図を運び置いた

「はあ…。今から作戦を説明する。

まずは、トルトウーガの海上を封鎖しようとする海軍共をうまく使う。あの島は、三

日月の様な形の島だ。湾封鎖にはもってこいだらう。

それで、連中が湾封鎖をしている間に……」

ジョーンズが言い終わる前に扉がノックされ

ルチアーノが入ってきた。

「ジョーンズ！ やっぱり思った通りだったよ！ 空気が湿ってきてる！ 海霧が起きる前触れだ！ あと2時間もすれば、あの湾にも霧が出てくるよ！」

ルチアーノの言葉にジョーンズはニヤリと笑うと言った

「ふん！ やはりそうか！」

「え？ 何なの？ どういう事？」

アンジェリカはルチアーノの言葉に

困った顔を浮かべながらルチアーノを見た。

ルチアーノはアンジェリカに喋り始めた。

「ここらはね？ 海の水温が気温よりも低いんだよ。それにここらの気温は湿っぽくて暑い。だから、海霧が発生しやすいんだよ。」

「へ、へえ〜！ そうなの！ 教えてくれてありがとう」

「いいよ。気にしないで」

その様子を見たジョーンズは

アンジェリカを嘲りながら言った

「やっつと、楽しい講義の時間は終わったか？」

それじゃ、さっさと話の続きを始めるぞ？」

「連中は湾封鎖をして、必ずお前を見つげるために

トルトゥーガに上陸するだろう。この時をクラークンに襲わせる。

少しでも多くの海兵共を減らせば、軍艦をともに守れんだろう！」

「連中がクラークンにやられてる間に、俺の3隻の船で役割を分ける。

1隻目は、敵を陽動する。その前にマックス達を軍艦内部に送り込み。この…三倍の

火薬を混ぜ込んだ特性手投げ弾で船を混乱に陥れる。」

ジョーンズは懐から小さな手投げ弾を出すと

テーブルの上に転がした。

「この陽動用にはこの船を使う」

ジョーンズは机をコンコンと叩いてそう言った

「そして、俺が海兵共を引きつけている間に、お前はもう一つの船で

孤立している連中の船に乗り込む…。」

ジョーンズがそう言うと、アンジェリカは不思議そうな顔して言った

「もう一つの船？2隻しか無いでしょ？」

何処にあるのよ？そんな物？」

アンジェリカの言葉にジョーンズは少し嫌な顔をすると言った

「ハア…。お前は何でも質問しなくちゃいけないのか？アン？」

「何よ！知りたくて当然でしょう！私の弟を救う為なのよ！」

「わかつたわかつた…。そう大きな声を出すな…ほれっ。」

ジョーンズは机の下から瓶を取り出した

その瓶の中には一隻の船が風に揺られながら動いていた

「何なのよ…これ？」

「…。ジョーンズ！ボトルシップにしては中の物が動いてるね！船はまるで実物みたいだ！これはあの時の船と同じのかい？」

アンジェリカは出された瓶を恐る恐る見ていたが

ルチアーノはその瓶を見ると虫眼鏡を取り出し瓶を持ち上げて

ジョーンズを質問攻めにしだした。

ジョーンズは鬱陶しそうに顔を顰めながら

瓶を奪い返すと椅子から立ち上がり、船室の外へと歩き出した。

「どういう事が教えてやるから…着いてこい」

ジョーンズはそう言うと言った

そして、ジョーンズ達は外に出ると左舷の手すりの方に向かった。

ジョーンズは手摺のところで歩みを止めると

瓶をアンジェリカに手渡した。

「え……？何？何をやるのよ？」

「いいか？絶対に手を離すなよ？何があってもだ……」

ジョーンズはそう言うと言ったとカトラスを抜いて構えた

「えっ？ちよ……ちよ……と待って！」

「フン！」

アンジェリカの静止の声を聞かずに

ジョーンズはカトラスをアンジェリカの持つ瓶へと突き立てた！

その瞬間！突き刺さった瓶に急速にヒビが入り中から玩具のような黒い船が出てきた。

アンジェリカはその船を持ち上げるとワタワタしながら言った。

「何よ！どうすればいいのよ！」

「良いから、さっさとその船を海に放り込め！」

ジョーンズはそう言うと言った

アンジェリカから船を奪い取り船を海に投げた！
すると、その小さな模型のような船は瞬く間に沈んでいった。

「え……あれだけなの？あれが私の弟を救う船なの？」

沈んじやつたじゃないのよ！」

「黙って見てろ……」

「見ろなんて！見ても何も……無いじゃ……」

アンジェリカは喚きながら後ろを向くと

海面にマストが見えているではないか！

次の瞬間……！水飛沫と共に真っ黒な船が現れた！

ジョーンズはその光景を見て

アンジェリカの方に向き、ニイッと笑うと言った。

「では、お嬢さん？紹介しよう……。我が海賊団が誇る海賊船の一つ。この世で最速の船

！『ブラック・パール号』だ！」

まるで夜の闇のような美しい船体にアンジェリカは見惚れしていた。

ルチアーノは面白そうにパール号を見ていると、ジョーンズに手招きされているのに

気づいた。

「……なんだい？ジョーンズ？」

ルチアーノは静かにジョーンズに近づくとそう言った

ジョーンズはルチアーノに小声でこういった。

「お前…確か考古学者だったな？」

「うん。そうだけど？」

「なら、お前に一つ頼みたい事がある。」

「なんだい？」

「お前には、CP9の船を襲う時に船の中にある。

価値のありそうな本やら武器、宝なんかを盗んで来い」

「宝を？」

「ああ…。それらを運ぶのはマツカス達に任せとけ。お前はそれを選び好みすればいいだけだ。CP9長官が乗ってる船だ。悪魔の実かそれなりの物があるかもしれない。」

「価値のありそうなものを…選ぶ」

「もしかすると…お前の知りたがってる空白の百年とやらを書いてる書物があったりしてな？」

ジョーンズはそうルチアーノにニヤッと笑いながら言った。

ジョーンズの言葉にルチアーノは驚愕の表情を浮かべた。

「なっ…！なんて…！それを知ってるんだ！」

「おいおい……。口調が崩れてるぞ？ ルチアーノ？ 落ち着け……。この事はよろしく頼むぞお？」

ジョーンズはそう言うのとルチアーノの肩を、ポンポンつと叩くとアンジェリカの方へと歩き出した。

「おい！ アン！ お前とルチアーノはパール号に乗って弟の救出だ！」

「わ……。わかったわ！」

アンジェリカの言葉にジョーンズは、カトラスを抜き放つと上に掲げて叫んだ！

「よろしい！ では、始めるぞお！ 作戦開始だあ！」

アンジェリカはその事を思い出しながら望遠鏡を覗き込み、ルチアーノにそう言った。

ルチアーノはブーツとしてたようだが、アンジェリカの言葉にハツとしてエンデヴァーを見るとこう返した。

「連中はひどく慌ててるみたい！」

「そう…みたいだね！今がチャンスだよ！」

ルチアーノの言葉にアンジェリカは

船員達に指示を出した！

「さあ！皆！乗り込むわよ！」

『ヴォオオオオ！』

アンジェリカの言葉に異形な姿をした船員達が、武器を掲げて雄叫び声を挙げた

「ルチアーノ！舵取りをお願い！」

「わかったよ！」

ルチアーノはそう言うのと舵を左に切り

エンデヴァー号に横付けをした！

「さあ！皆！乗り込んで！」

エンデヴァーに接舷した瞬間！

鉤爪ロープがかかけられ船員達が雪崩をうって、エンデヴァー号に乗り込もうと向かっていった。

エンデヴァー号の甲板上にいたCPの職員たちは、マスケット銃に火薬を慌てて詰めながら、その様子を見ていた

「き！来やがった！」

「は……！早く撃て！」

「ば……！馬鹿！まだ弾込めが済んでねえんだ！」

「なんでもいいから！早く撃て！」

「これでも喰らいやがれ！」

乗り込もうとしてくる異形な船員達に向かってピストルを発砲したが……。あまり意味を成さずとうとう船に乗り込まれてしまった！

「ひやは♪」

顔が蟹のような殻に覆われた男が、その職員たちに向けてラツパ銃を放った！

『うわあああー！！』

職員達はラツパ銃の銃撃を受けて倒れた……。

「くっ！クソっ！刺しても死なねえ！」

「た……！助けてくれ！グアッ！」

「命！命だけはあ！ぐふおっ！」

色々な所でC Pの職員達の断末魔の叫び声が響き……エンデヴァー号の上は阿鼻叫喚の絵図となっていた！

C Pの職員たちが劣勢になり始めたその時！メアリー号がエンデヴァーに急接近し、

メアリー号の海兵達がマスクット銃を異形な船員達に向かって発砲し始めた！

「行くぞ！私に続け！あの化け物共を駆逐するのだ！」

眼帯をつけたレサロ中佐がサーベルをエンデヴァーに向けて乗り込んできた！エンデヴァー号の甲板上の戦いの激しさがさらに増した！

その時！アンジェリカはパール号からロープに掴まり、エンデヴァー号に乗り込もうとしていた！両足をピンつとすると、エンデヴァーの船長室の窓を突き破り、ガラスを粉々しながらアンジェリカは転がりながら着地すると立ち上がりピストルを抜いた！

「さあ！私の大事な弟を返してもらいましょうか！ベケットツ！」

ベケットは後ろを向いていたが、アンジェリカの方を向くと言った

「おやおや……。わざわざ君の方から出向いて来るとは思わなかったよ。

アンジェリカ君……。君を見つけて捕まえる手間が省けた……。」

ベケットはそう言うのとニヤッと笑った。

最悪の再会

「ベケットツツ！早くルークを返しなさい！」

アンジェリカはそう叫ぶと

椅子に座るベケットに向けてピストルのハンマーをあげた

「ふむ……。ジョーンズ君達とは一緒ではないのかね？」

ベケットがそう言うのとアンジェリカはベケットを睨みつけると言った

「ええ！でも、彼らは一緒に戦ってくれているわ！」

「フツ……。少し言い間違えたな……。私の船室に来るのにたった一人で来るとは……。あまりにも愚かすぎるとは思わんのかね？アンジェリカ君？」

ベケットはまたアンジェリカの方を見て嘲る様に笑うと目配せをした。

すると、アンジェリカの後ろに音もなくマーサーが現れ、アンジェリカを押さえつけた！

「しまっ……ぐっ！」

アンジェリカは床に押さえ付けられた

ベケットはゆっくりアンジェリカに近づき、アンジェリカの持っていたピストルを

奪った。

「ふうむ……。愚かな女が持つピストルにしてはいい銃だねえ？」

「やつと……君達姉弟を聖地に連れて行ける」

ベケットは意地悪そうに笑うとマーサーによつて縛られようとするアンジェリカを見た。アンジェリカは縛られながら叫んだ。

「ベケットオオオ！」

ベケットは鬱陶しそうに顔しかめると

腰にかけてあつた鞭を取り出すとアンジェリカに向けた。

「ふう……。聖地に行く前に少し無駄吠えを治す必要がありそうだ……！」

ベケットはそう言うのと鞭を振り下ろそうとしたその時！

ガツシャーンつとまた船室の窓が割れて誰かが入つて来た。

ベケットはその音がした方を見るとそこには……

茶色のカウボーイハットを被り、顔には黒い髑髏のお面をつけ、黒い革のジャケットを着た男が立っていた。

「ふうむ？君は何者かね？」

ベケットはそう言うのとマーサーはナイフを構えながら

その人物に攻撃を仕掛けた！しかし……！

「……くっ！」

その男は近づいてきたマーサーに向けてすごい速さでピストルを抜くと発砲した。すると、男は言った。

「私は、ブラック・スカル……。ジョーンズ船長の命により、例の子供を奪取しに来た……。スカルはそう言うのと縛られているアンジェリカに向かって走った！」

「……!!長官!お離れ下さい!」

マーサーの言葉にベケットはアンジェリカから離れると、スカルはアンジェリカの縛ってある縄を銃身で切った!

アンジェリカはその様子を信じられないような顔をしながら立ち上がると言った

「えっ?何で……!銃身で縄が……!」

「それはジョーンズのお陰だよ?」

「えっ?まさか!貴方!」

「シィーッ!静かに!僕は世界政府に顔を知られると不味いからね……」

「そ、そうなの?」

「もう少し早く来たかったけど、色々としてて応援に来るのが遅れてね?それよりも……君の弟を助けるのが先だ……!」

「うっ、うん!」

スカルとアンジェリカはベケットの方に向くと身構えた。

ベケットはスカルを見ながら言った。

「ふうむ……まさか君に助けが来るとはねえ？ アンジェリカ君？ しかし……これでは君達を倒すのに骨が折れそうだし……。なので……！」

ベケットはそう言うのと近くのクローゼットを開けた。

すると、クローゼットの中から何かが出て来た！

「……ルーク！」

クローゼットから出てきたのはルークだった！

しかし、ルークは白いコートをはおり、頭にカモメのような装飾のついた帽子を被っていた。ルークは光が宿っていない目でアンジェリカを見ると言った。

「ルーク？ ルークって誰？ 僕の名前は、海の戦士ソラ！ また性懲りも無く出てきたな！

ジェルマめ！ 僕が倒してやる！」

ルークはスカルを指差すと言った

「な……何を言ってるのよ！ ルーク！ 目を覚ましなさい！」

「おやおや？ 姉弟の感動的再会とはいかないかねえ？ アンジェリカ君？

彼はルークではなく海の戦士ソラなのだよ？」

「ベケットッ！ 私の弟に何をしたの！」

「少し暗示を掛けさせてもらったのだよ…。ソラ君…早くジェルマを懲らしめてやりなさい。」

「はい！長官！正義の名のもとにお前を倒す！」

ルークはそう叫ぶとスカルに向かって突進を始めた。

「ツツ！」

スカルは身構えたが！そのまま押し切られるように船室の扉を破壊しながら甲板へと吹き飛ばされた。

「…スカル！」

「フフフ…。これでまた君だけになったねえ？アンジェリカ君？マーサー！適度に痛めつけてやりなさい。」

「かしこまりました…長官」

「くっ！」

アンジェリカはベケットを睨んだが、武器が無いことを思い出し後ろに下がりながら外に向かってダッシュした！

（銃を奪われたのを忘れてたわ！ルーク！早く目を覚まして！）

アンジェリカはベケットの船室から甲板に出た。

甲板上では海軍と船員達が熾烈な戦いを繰り広げていた。

アンジェリカはあたりを回していると、船首の方にルークとスカルが戦っているのが見えた！

「ルーク！何をしているの！目を覚まして！」

アンジェリカはそう叫びながら、戦っている連中の間をすり抜けるように船首に向かっていったが……！

「キャット！」

アンジェリカは誰かにぶつかり、真つ暗な船倉に落ちていった。

「いったあい！何でここの扉が開いたまんまなのよ！」

アンジェリカはそう言うのと立ち上がった。砲門が開いたままになっているが所々に穴が空いていた。パール号から発射された砲弾で損傷した部分だった。その穴の近くには死体が横割っていた。

「うっ……！」

アンジェリカはその光景を目にして顔を顰めながら、

船倉から出る階段の手摺に手をかけた。

その時！甲板からマーサーが冷酷な目をしながら船倉に降りてきた。

「……貴方は！」

「長官の命令だ。大人しくしてもらおうか」

マーサーはそう言うのとピストルを抜き放ちアンジェリカに向けた。

「結構よ！あんな奴の元にいくのなら死んだ方がマシよ！」

アンジェリカはそう言うのと船倉の奥に向かつてまたダツシユした。

（何か……何か武器になるものを探さなきゃ！）

アンジェリカはそう言うのと船倉の奥へ奥へと入っていった。

「ふう……。長官を待たせてはいけない……さっさと済まさなければ」

マーサーは冷酷な顔をしながらアンジェリカを追った

—————

ースカル saidー

「ハア……ハア……」

スカルは息切れを起こしながら、前に立つルークを見た。

「追い詰めたぞ！ジェルマ66め！覚悟しろ！」

ルークはそういうと足に力を入れた。

すると、靴に付けられた機械のようなものから煙が出始め

ルークはすごいスピードでスカルに突っ込んできた。

「チィッ！」

スカルは左に避けたが、目の前にはルークが迫っていた！

「何！グハツ！」

スカルはルークに体当たりされ、スカルは吹き飛ばされた。

「避けても無駄だぞ！ ジェルマめ！ 僕には全てが見えるんだ！ お前がどう避けようとも！ ！どんな攻撃しようともわかるんだ！」

「クソっ！ あの子の能力のせいで、動きが全て予知される！ 傷つけずに無力化するのは大変だ……。 どうにかして暗示とやらを解かないと……」

スカルがピストルを構えると、ルークに向かっていった。

—————

ーアンジェリカ side ー

アンジェリカは暗くて狭い船倉を走っていた

「はあ……はあ……」

アンジェリカは後ろから発砲音が聞こえたのに気づくと、慌ててしゃがんだ！
「そろそろ逃げるのを諦めたまえ」

マーサーはそう言うのとアンジェリカを睨んだ。

アンジェリカはマーサーを睨みつけながら、立ち上がるとまた走った！

「嫌よ！ 絶対！ 弟を助けるのよ！」

アンジェリカは走り出すとさらに下に降りる階段を見つけ、降りていった。その様子を見ていたマーサーは舌打ちしながら追いかけた。

階段を降りるとそこには牢屋が並んでいた。

アンジェリカがある牢屋の前を通り過ぎようとする、牢屋から声が聞こえて来た。アンジェリカはその牢屋の前で立ち止まった

「おい！上はどうなってやがる！砲撃でもあったのか？さつきから水漏れが止まらねえぞー！」

「えっ？貴方は誰？」

「俺か？俺は海賊だ！」

「海賊なの？」

「ああ！俺は“溶解”のジョンだ！何があったんだ？」

「ジョン！私は追われてるの！」

「なんだと？誰にだ？」

「マーサーっていう奴よ！」

「ああ…。あのいけ好かない奴か！よっしや！おい！嬢ちゃん！」

「何よ！」

「俺をここから出せ！そいつを倒してやる！」

「助けて欲しいのは山々なんだけど……鍵が無いのよ！」

「クソっ！鍵がねえのか……！」

ジョンは悪態をついた瞬間！

また発砲音が響いた！

「キャッ！」

アンジェリカは慌ててしゃがんだが、頬が切れた。

「牢屋の方に来るとは好都合だ。お前もここに入れてしまおうか？」

マーサーはそう言うのとピストルを向けながら、鍵を取り出して見せつけた。

「そんなのお断りよ！」

アンジェリカはマーサーに向かってタツクルをかました！

マーサーは倒されるもがきながら抵抗した。

「……離せ……このクソ女！」

マーサーはそう言うのとピストルのケツで、アンジェリカの頭を殴った。

「グッ……あ……諦めないわ！弟を……いや、ルークを助ける為に！」

アンジェリカはマーサーから鍵を奪い取ると叫んだ。

「ジョンッ！牢屋の鍵よ！」

そして、鍵を牢屋に投げ込んだ！

「貴様！要らぬことを！死ねえ！」

マーサーはアンジェリカに馬乗りになるとアンジェリカの眉間に向けて銃を構えた！その瞬間！牢屋のドアがゆつくりと開く音が聞こえた！マーサーはその音に気づき、慌てて後ろを見ると黒い髪を無造作に伸ばし、無精髭を蓄えボロボロの海賊衣装に身を包んだ男が立っていた。

「よオ……世界政府野郎！また溶かしてやろうか？」

ジョンはそう言うとマーサーが慌てて向けたピストルをドロドロに溶かした。

海底へ……

「貴様ツ！」

マーサーは溶かされた銃を捨てるとナイフを取り出し構えた。

「おいおい……そんなナイフで俺を殺せると思ってるかい？俺は何でも溶かせれるんだぜ？」

エドワードはそう言うと言を広げながら構えた。そして、後ろにいるアンジェリカに向かつて言った。

「お嬢さん？お前……ルークの姉だろ？」

「えっ！ええ！そうよ！」

「やっぱりな！俺がこいつをどうにかしてやる！だから、お前さんはさっさと弟を助けに行つてやりな！」

ロウはそう言うと言で天井を殴ると……瞬く間に溶けて上に上がれる抜け穴が出来た！

「……ありがとう！ロウ！」

「へへっ！いいつてことよ！さっさと行きな！」

マーサーは上にながろうとするアンジェリカを睨みつけながらナイフを構えたがロウがそれを制した。

「おおつと！それはダメだぜ？いい話で終わりそうなのに水を差すとは無粋だぜ？ええサイファーボール」
? C P 野郎！

ジョンはそう叫ぶとマーサーに向かつていった！

アンジェリカは穴をよじ登って上の船倉に出ると、階段を上って甲板上に出た。

「はあ……はあ……ルーク！今助けるからね！」

アンジェリカはフラフラと頭から血を流しながらそう言った。

アンジェリカが船首に向かつて歩きだそうとしたその時！

アン女王の復讐号がエンデヴァー号の右舷に突っ込んできた！

エンデヴァーはその衝撃で大きく揺れ、アンジェリカはその衝撃で転倒した。

「キャツ！」

アンジェリカは倒れたが、なんとか立ち上がると……アン女王の方を見ると、甲板でジョーンズ達が戦っていたが、次の瞬間！サラザールに斬撃で吹き飛ばされたジョーンズはエンデヴァー号の甲板に叩きつけられた！エンデヴァー号の積荷壊しながら、ジョーンズはアンジェリカの近くまで吹き飛ばされてきた。

「ぐ……ううう！畜生！まだまだ大将クラスは早かったか！」

ジョーンズはカトラスを杖替わりに立ち上がると近くに あった鎖を掴み、手に混ぜ込んだ。そして、アンジェリカに気づくと息切れを起こしながら言った。

「ゼエ……ゼエ……！アン！何を止まってやがる！早くお前の弟を助けやがれ！ング！ハア！」

「分かつてるわ……よ！でも、弟が変なのよ！」

「あ？何が変なんだ？」

「操られてるみたいなの！」

「あ？操られてる？」

「そう……な！」

「海賊！覚悟おとおお！」

アンジェリカは話を続けようとしたその時！

レサロ中佐はそう叫びながらジョーンズに向かってきた。

ジョーンズは鬱陶しそうにレサロを睨みながら手を変化させて薙ぎ払った！

「今！喋ってんだ！邪魔を……すんじゃあ……ねえよ！」

「ぐわ！」

レサロはジョーンズの攻撃をガードしながら吹き飛ばされ船尾の方に突っ込んだ。

「んで？ハア…ハア！操られてんのか？」

「ええ！」

「何か能力じゃなけりや、なにか機械見てえなので操ってんのかもなあ！」

ジョーンズはそう叫ぶとアン女王の復讐号に向けてカトラスを構えた。その瞬間！船が揺れ始めた！

アン女王の甲板で戦っていたサラザールとシキは慌ててエンデヴァー号の甲板に飛び乗った。

シキ達がエンデヴァーに乗った瞬間！

アン女王に雷が落ちてその雷の中から一本の瓶がジョーンズに向かって飛んできた！

その瓶の中には、小さくなったアン女王の復讐号があった。ジョーンズはその瓶を拾い上げるとコートの中に入れた。

「さあて…お前の弟を助けたらさつさと引き上げるぞ！俺もこれ以上は戦えん！大将が居たのは誤算だった！いいか？早くしろ！」

ジョーンズはそう言うサラザールとシキのいる所に走って行った。

アンジェリカはジョーンズの言葉を聞くとルークのいる船首に向かつて走り出した。

「スカル side」

「ゲホッ！ハア！ハア……！」

スカルは少し吐血しながら、ルークを睨んだ。

ルークは未だに目に光を宿さずにこちら見ていた。

「ジェルマめ！観念しろ！」

「それは……困るね……！君のお姉さんの頼みだから！」

スカルはそう言うのとピストルに弾を入れて構えた。

（ジョーンズから貰った……この銃とこの特殊銃弾があれば……！）

「喰らえ！トリモチ弾ッ！」

スカルはそう言いながら、ルークの足元に向けて引き金を引いた！

ピストルの弾は着弾するとベチャツと靴にトリモチがついた。

「往生際が悪いぞ！ジェルマめ！」

また、ルークは足に力を入れたすると靴から煙が出たが、ルークの身体が前に行くことはなかった。

「あつ！ロケットシューズが！」

ルークがそう言いながら、もがいてる隙にアンジェリカが現れルークを羽交い締めにした。

「スカル！今よ！この子のどこかに操る機械の様なものがあるかもしれないわ！調べて！」

「は…はな！せ！ジェルマめ！卑怯だぞ！」

ルークはアンジェリカを殴ったりしてもがいた。

「ハア…ハア…！分かったよ！」

スカルはそう言うのとルークの体を調べた…。すると、スカルはあるものを見つけた。それは頭に乗っかっているカモメのオブジェだった。

そのカモメから頭の帽子にかけて何かの管のようものが伸びていた。

「…アンジェリカ！これだ！このカモメが原因だ！」

「だったら！早く壊して！」

「ああ！」

スカルはそう言うのとルークの頭に乗ったカモメを打ち壊した。すると、ルークは瞬間に糸の切れた人形のように気絶した。

「ルーク！しつかりなさい！ルーク！」

「安心していいよ！ルークは無事だ！気絶しただけだよ！」

「…！よつがったあ…！ルークが助けて！」

「でも、安心するのはまだ早いよ…！さあ！脱出だ！」

「う……うん！」

「スカルはルークを担ぎながらそういうと、アンジェリカは涙を流しながら立ち上がるってそう言った。

スカルは船首から大きな声で甲板にまで聞こえる声で叫んだ。

「ジョーンズッ！アンジェリカの弟を奪い取ったよオ！」

スカルがそう叫んだ声を聞くと、ジョーンズはニヤツと笑いながらサラザールに向かって言った。

「……フツッ！約束通りあの子供は頂いていくぞ！死神野郎！」

「この俺から逃げれるとでも？ジョーンズウ？」

ジョーンズはサラザールから攻撃を防いでいた。その様子を見て、シキは笑いながら言った。

「ジハハハハ！お前んところは上手くやったようだな！そんじゃあ！俺もそろそろ帰るぜ！ジハハハハ！」

シキはふわふわと浮き上がるとエンデヴァーから脱出していこうとしたその時……ある声が甲板に響き渡った。

「ふむ……。中々ひどい損害だ……。」

その声の主は、船室から出てきたベケットだった。

「私の忠実なる部下の諸君……。何だね？この有様は……。まるで雑魚のようじゃあないか……。ふむ……。まあ君達に信頼をしていた訳ではないがもう少し粘り給えよ」

ベケットが少し前に進むと船倉へと続く入口からマーサーとエドワードが出てきた！

「……長官！」

「マーサー……君もだ……。そんな雑魚にいつまで時間を食っているのかね？」

「ハッ！申し訳ありません！」

ベケットがそう言っているとアンジェリカは言った。

「ベケット！もう貴方の野望は潰えたわ！私の弟は返してもらおう！」

もうこれ以上、私の家族に手出しさせないわ！」

アンジェリカの言葉にベケットは不敵な笑みを浮かべた。

「ほう……。もう君は勝ったつもりでいるのかね……。？優秀な者たるもの策は色々ところじておくものだよ？アンジェリカ君？」

「な……。何を言ってる！」

海面が揺れ始め！海の中から水飛沫と共にフライング・ダッチマン号が現れた！その様子にジョーンズはまた笑うと言った。

「この勝負……。俺の勝ちだ！世界政府共！ナハハハハ！野郎共！引き上げるぞお」

！」

『ヴオオ！』

エンデヴァー号の甲板にいた船員達は雄叫びを上げるとエンデヴァーの甲板からどんどん消えていった！ジョーンズはサラザールを弾き飛ばすと、アン女王号にしたようにパールも瓶に戻した。その瓶を拾うと、ジョーンズはサラザールの目前に手投げ弾を見せると言った。

「あばよ……大将殿オ……」

「俺から逃げられると思うなあ！海賊がアア！」

ジョーンズが手投げ弾を起爆させようとしたその時！空からシキが降ってきた！

「……シキ……」

「グツ……ゲホツゲホツ！クソツタレがア……！何で……ここにいやがる……」

シキはそう言うと、立ち上がりマストの方を見ながら構えた。ジョーンズもマストの方を見るとそこには……赤い毛の猿のような人間がこちらを見下ろしていた！

CPの職員達はそれに気づくと歓喜の声を上げた！

「あ……貴方は……」

ジョンはマストの上を見ながら驚愕の声を上げた。

「おいおい……嘘だろ……。何で……ここにいるんだよ……」

サラザールもマストの方見ると忌々しげに言った。

「何で貴様までもここにいるんだ？」

その男はニカツと笑うと周りの声と一緒になった！

『海軍大将・ヒデオシ！』

その声には笑いながら言った。

「キツキツキツキツ！嬉しいだぎゃ！こんなに儂を知ってくれとるとはのう！苦戦してるみたいじゃのう！サラザール！儂も手伝いに来たから安心せえや！」

新たな大将の出現にジョーンズは顔を曇らせながら叫んだ！

「アンジェリカ！さっさとお前らはダッチマン号に乗れ！引き上げるぞ！」

「うーうん！」

アンジェリカ達は慌ててよこづけされたダッチマン号に向かって走り出した。

「おい！シキイ！この手投げ弾を能力で浮かせてぶつけろ！」

「ジハハハハ！おう！分かったぜ！」

ジョーンズから投げられた手投げ弾をキャッチすると能力で浮かしヒデオシにぶつけようとした。

「おーやる気満々じゃの！だが…無駄じゃ！『猿武・猩掌！』」

手投げ弾を掌底で破壊しようとしたが…。破壊した瞬間！煙が甲板いっぱい立ち

込めた。

「ゴホツ…！ゴホツ…！しまったぎや！これじゃあ…前が見えん！」

ジョーンズはその隙にダッチマン号に向かって走り出した！

シキもその隙に飛び上がり逃げた。ジョーンズが走り出したその時！サラザールが追いかけてきた！

「逃がさんぞ…！ジョーンズ！」

「クソっ！」

「任せな！」

ジョーンズは後ろを向くとジョンが甲板を溶かしてサラザールを足止めしていた。

「助かった…！」

「いいってことよ！それよりも俺をあんたの船に乗せてくれ！頼む！」

「いいだろう！乗せてやる！」

ジョーンズ達がそう言いながら船に向かっていてと後から声が聞こえてきた！

「待たんかあ！お前らは逃がさんだぎやあ！」

煙の中からヒデオシが出てきたと思うとジョーンズを殴り飛ばした！

「グアッ！」

「大丈夫か！」

吹き飛ばされたジョーンズを、ジョンはかつぎ上げまた走り出した。

なんとか船の手すり側に着くと、そこにはスカルがいた！

「ジョーンズ！無事かい？」

「グツ…ああ！何とかな！」

「早く船に乗らないと！」

ジョーンズ達はロープに掴まり、ダッチマン号に飛び乗ろうとしたその時！煙の中から、レイピアを構えたサラザールが飛び出してきた！

サラザールはジョーンズに狙いを定めていたが…。瞬時にルークを担いでいるスカルに狙いを定め直した！それを見たジョーンズは、身を挺してサラザールからスカルを守った！

次の瞬間…！ジョーンズの左腕が切り落とされ、ジョーンズがスカルをかばった衝撃でルークは海に落ちていった！

「ぐああああッ！」

「ジョーンズ！」

スカルはそう言いながらダッチマン号にへ飛び乗っていったのをジョーンズは激痛に耐えながら見ると自分のカトラスを抜き、スカルに投げた！

「それを使って…！お前らは逃げろおおおおお！」

ジョーンズはそう叫ぶと海に落ちていった…。

スカルはジョーンズのカトラスを受け取ると慌てて船を海に潜らせた…。

少年の憧れ

トルトウーガでの激闘から2日後…。

トルトウーガより100キロ離れた島

フォース島くウオーキー共和国く

ウオーキー共和国は昔は地下資源で潤った島で島の至る所に海底まで続く洞窟が山ほど空いてるのだった。

そんな島の一角である少年達が走っていた！

「待つてよオー！」

「うるせえ！この割れ頭！」

「着いてくんなあ！」

「泣き虫のお前と遊んでたら、俺らにも泣き虫がうつるしな！」

「そうだよな！ギャハハハ！」

「割れ…頭…。うわあーん！この頭は生まれつきなんだあ！」

子供達にそんな事を言われるとその男の子は座り込んで泣き始めた！

「ほら！また泣きやがった！」

「じゃあな！泣き虫のフォクシー！」

「帰ってママにでも泣きついてな！」

フォクシーを見ると少年達はまた笑い走って行った

「えぐ…ひつく…。」

フォクシーは泣きながら立ち上がるとまた少年達を追いかけた。

—————

一方…。港にはCPの職員達が上陸していた。

「本当にこの島にいるのか？」

「わからん…。長官はこの島に必ずいると言っておられたが…。」

「しかし、あの子は能力者なのだろう？海に落ちたとすると死んでるんじゃないや…。」

「その時は死体でも持って帰るしかないさ…。」

職員達の後から声が響いた。

「それに奴もいるかもな！そうだろ？お前ら？」

「まあ…それも能力者だろ？死んでるじゃないか？」

背が低い男とのつぼの口髭のある男はそう言いながら職員達に近づいてきた。

二人はまるで西部劇の保安官のような格好していた

「ええ！あの悪霊がいた場合はよろしくお願いします！」

1人のCPの男はペコペコしていたが、複数人の男は怪訝そうな顔をしながらコソツと喋り出した。

「なあ…。あの二人一緒に来たがよ…。何者なんだ？」

「え？お前知らねえのか？あの二人は有名な保安官だぜ？」

「マジかよ？名前は何だよ？」

「あの背の低い方が”首吊り処刑人”アーサー・エリス。

あの人に追いかけられたら絶対に首吊り縄をかけられるって言われてる。そして、あの背の高い方が保安官のビターズ・テイルマン…。」

あの”海の暴れん坊”クレイ・アリソンを地の果てまで、追いかけて捕まえたんだと」

「おいおい…。アーサー・エリスって言うバリソン王国の王様を吊るしあげたついでう…。」

「ああ…。あの王族吊るしの処刑人さ…。それに後は…」

「ルーサー・ハミルトンとかを20人ほど吊るしあげたぜ？」

二人はギョツとして後ろを見るとアーサーがこつちを見て笑っていた。

「心配すんな！ジョーンズは必ず！この俺様が吊るしてやるよ！」

「おいおい…。生かして捕まえてこいとも言われてんだから…。その為のお前じゃんか

よ……」

ビターズは溜息をつきながら、帽子を傾けながらため息をついた。

「キヒヒ！ そうだったけ？ まあいいじゃんか！」

「おいおい……。本当にしつかりしろよ？ またお前が暴走すると怒られるのは俺なんだからよー！」

そうビターズはいうとアーサー達は笑いながら共和国へと入っていった……

—————

「皆ー！ 待ってくれえ！」

フオクシーは子供たちに追いつくとそう言った

「チツ！ しつこいなあ！」

「お！ そうだ！ おい！ フオクシー！」

「な……なんだ？」

「俺達と遊びてえのか？」

「……ああ！ 遊びてえ！」

「ならー！ この洞窟に奥にあるっていう海賊の財宝を取ってこい！ そうしたら、そのお前の勇気に免じて俺達のグループに入れてやるよ！」

一人の少年の言葉にフオクシーは顔を輝かせた！

「ほ…本当か！本当なんだよな！本当に財宝を手に入れたら！グループに入れてくれるんだな！」

「ああ！本当だぜ？」

「わかった！すぐに取ってくるぜ！」

フオクシーは子供達の後ろにある洞窟へと入っていった。

「おい…いいのかよ。そんなこと言って！」

「あ？嘘に決まってるじゃん！あの泣き虫がこの洞窟の奥に行ける訳無いし！」

「そうだけだよオ…」

「ほら！フオクシーが入ってる間に帰ろうぜ！」

子供達はそう言う洞窟に入ったフオクシーを置いて帰っていった。

—————

洞窟の中は暗くジメジメしており…

天井からはポタリ…ポタリ…と水滴が落ちていた

「うう…。暗いなあ…。ジメジメするしよオ…」

フオクシーはそう言いながら洞窟の奥へと…恐る恐る入っていった。

「何か明かりになるものは…。」

フオクシーは辺りを見渡すと、近くに蠟燭が落ちていた。

「お！蠟燭だ！採掘してた時奴かな？」

フオクシーは蠟燭を拾うとポツケからマッチを取り出し火をつけた。

蠟燭の火がつくとぼんやりと洞窟の中の様子が映し出された。

「おお！これで見やすく?!」

フオクシーが前に進むもうとすると足を滑らせ、そのまま奥へと落ちていった！

「うわあああ!!ふぎや！」

フオクシーは叫び声をあげながら落ちていくと上手く着地できずにそのまま砂浜に突っ込んだ！

「いてて…！ちくしやう！落ちちまった！うわああん！」

フオクシーは起き上がると泣き喚いたが…蠟燭の光で何かが見えるとすぐに泣き止んだ！

「…！なんだありや？」

泣き腫らした目を擦りながら、落としていた蠟燭を拾い上げ、辺りを照らした。

蠟燭の光で辺りを照らすとそこには…色んな船の残骸が落ちていた！

「これは船の残骸か！とういう事は！財宝があるかも！」

フオクシーは鼻をすすりながら、目を輝かせてそう言った。

フオクシーがある船の残骸に近づくと、白い服を着た少年が倒れていた！

「……おい！大丈夫か！」

フオクシーはその少年の近くに行くのと体を揺すった！

「うう……ゴボゴボ……！」

少年はうめき声をあげると、口から水を吐き出した！

「溺れてたのか！待ってろ！今！水を吐かせてやる！」

フオクシーはそう言うと少年の胸に心臓マッサージを行った！

すると！少年は勢いよく水を吐き出した！

「ウエ……！ゴボボ！ゲホッ！」

少年は水を吐き出すと目を少し開けて言った

「うう……ここは……？」

「ここか？ここはフォース島だ！」

「姉さん！姉さんはどこ？」

フオクシーの言葉に少年は勢いよく起き上がり、辺りを見渡した。

「姉ちゃん？お前のか？ここは海底洞窟に繋がってるところとこだぜ？見てねえが……？」

フオクシーの言葉に少年はひどく落ち込んだ様子だった。

「それよりもお前……名前はなんて言うんだ？」

「僕？僕の名前はルーク……。」

「ルークか……。俺の名前はフオクシー！宜しくな！ルーク！」

フオクシーはルークと手を握手したその時！

周りの船の残骸が何かに吹き飛ばされた！

「なんだア？何が起きたんだ！」

「……フオクシー！あれ！」

フオクシー達は慌ててしやがむと周りを見渡した。

すると、ルークはあるものを見ると驚愕の声を上げた！

そこには大きな海王類がいた！

「うわあああ！海王類だア！」

「は……早く！逃げないと……！」

ルーク達が海王類から慌てて逃げようとする……

「やっと思つけたぞ……」

「え？誰の声？」

「俺じゃねえぞ？」

「こつちだ……！ガキ共……。」

ルーク達は恐る恐る声のする方を見るとあの海王類がいた

「え？まさか海王類が……？」

「んな……！訳ないだろう？海王類が喋れるなんて……」

「ごちゃごちゃやるせえなあ……。助けてやったのによオ……。」

『シヤアベツタアアアアアアアアア!!』

ルーク達は叫び声をあげながら驚きの表情で海王類を見た！

「しかし……。この暗い洞窟じゃ動きにくいな……。外に出るぞー！お前ら？」

海王類はそう言う口を開けた

「え？まさか……！」

「おいおい……！嘘だろ？」

ルーク達はそう言ったが海王類は勢いよくルーク達を口に入れると動き出した！

「うわああああ！食われたア！」

「出してよオ！」

海王類はそのまま洞窟の入口へと向かい始めた

海王類は大きな体を揺らしながら狭い洞窟の中を動き回ると外へと出た！外に出る

と口に含んでいたルーク達を吐き出した

「グエっ！」

「うわっ！」

ベシヤツと音を立ててルーク達は着地した。

「さて…。この姿はもういらんな…。」

海王類はそう言うと言体がまるで吸い込まれていくかのように渦を巻きながら徐々に無くなっていった！

「なんだア！」

「え？何が…。」

海王類が無くなりかけるとそこには一人の男がたっていた。

オレンジ色の髪を結び、切れ長の赤い目をした男がルーク達を見下ろしていた。左腕は痛々しくも切り取られていた。

「ふう…。さて…。ルーク？」

「ひっ！なんで僕の名前を…！」

「何でかって？アンジェリカのやつにお前を救ってくれて言われたからな？」

「姉さんが？」

男の言葉にルークは驚きの表情を浮かべた！

「そうだ…。それに操られてたお前をあのベケットから助けてやった！」
「ベケット…：そうだ…：僕はあいつに…！」

ルークは何かを思い出しながらそう言った

「思い出したか？ 全く…：お前ら姉弟は忘れっぽくて困る…。」

男は髪を撫でながらそう言った

「助けてくれたって事は…：もしかして！ あなたって！」

ルークの言葉に男はニヤツと笑うと言った！

「ああ…：そうだよ！ ルーク！ 俺の名を言ってみろ！」

”海の悪霊！ デイヴィー・ジョーンズ！”

ルークの言葉にフォクシーは驚愕の表情を浮かべた

ジョーンズはニヤツと笑うと言った

「ご名答…：正解だ！ ルーク君！」

ジョーンズは笑いながら言った

「形態変化！」

ジョーンズはみるみるうちに体を変化させ、いつもの姿になった。

そして、ジョーンズはフォクシーを見ると言った

「お前は誰だ？ 小僧？」

「ヒイイ！お…俺の名はフオ…クシー！」

「フオクシー？ほう…お前がか…。」

ジョーンズはフオクシーの言葉にフオクシーの顔をマジマジつと見ると顎に手を当てながらそう言った。

「ふむ…。これは何かの縁だ！フオクシー！」

ジョーンズはそう言うのとフオクシーの前に手を出した

「ルークを助けてくれてありがとう。勇敢なそんなお前に対してこれをやろう！」

ジョーンズはフオクシーに短い刀を手渡した

その小刀の鞘にはタコの絵が彫られていた！

「…これは？」

フオクシーは恐る恐るジョーンズに言った。

「うん？ただの小刀だが？何の変哲もないな？だが？もしかするとお前が大きくなったら必要とすることがあるかもしれんぞ？」

ジョーンズがそう言い終わろうとした瞬間！

ジョーンズの体にロープが巻きついた！

「…！なんだア？」

洞窟の前の森の中からCPの職員達と共にアーサーとビターズが現れた

「まさか…本当にいるとはなあ！捕まえたぜ！」

「ああ…長官もすごいな…。ジョーンズ！貴様に逮捕状だ！それにルーク君の保護もだ！」

ルークはビターズの言葉に顔を青ざめると言った！

「嫌だ！あんな所に戻るもんか！」

「何を言ってるんだ？君は攫われたのでないのか？」

「細かい事は今はいいじゃねえか！ビターズ？それよりもこいつだぜ？」

「ぐう…切れんなこの縄…。」

「当たり前だ！この俺はナワナワの実を食べた縄人間！体変幻自在に縄に変化できるんだ！決して切れない縄にな！お前が暴れる度に俺の縄がお前を締め上げるぜ！」

アーサーはそう言いながらジョーンズを締め上げ始めた！

「そうかい…。そいつア…厄介だが…！」

ジョーンズはアーサーを見ながら笑った！

「何をする気だ？もう無駄だぞ？」

「俺はあいつとの戦いで色々と学んだ…。その授業料として片腕は持つてかれたが…しかし気づかせてくれた！俺の能力に対する事をな！」

ジョーンズはニヤツと笑いながらまた言った

「つまり悪魔の実つてのは……考えようなのさ！これだけしか出来ないんじゃない！これ
発展させる事も色々出来るんだ！」

「何を言ってる！」

アーサーは後に下がりをしなからそう言った！

「形態変化！モード（腐無虫）！」

ジョーンズがそう叫んだ瞬間！ビターズは慌てて銃を抜いて

ジョーンズを頭を吹き飛ばした！

「ビターズ！」

「アーサー……何か嫌の予感がしやがる……。」

ビターズは縛られているジョーンズ見ながらそう言った！

しかし、頭の吹き飛ばされたジョーンズは急に顔をアーサー達に向けた！

「おいおい……。何だよ……そりゃあ……」

アーサーは驚愕の声を上げた！

何故ならジョーンズの顔はおびただしい数のフナムシになっていた

瞬間！ジョーンズの体が崩れ落ちると中からおびただしい数のフナムシが現れ、CP
の職員達を襲った！

「体中にいいいい！」

「うわあああ！殺しても殺してもオオ！」

「やめろ！口に入るなあアア！」

「落ち着け！お前ら！」

「しかし、この数では……！」

「うげえ！口に入っ……」

CPの職員の1人が口からフナムシが入るとそのまま倒れ死んだ。

「ヒイイ！こんなところにいれるかあ！」

一人は逃げ出そうとすると、フナムシの大群の中から剣が飛び出し胸を貫いた！

「何だよ！何なんだ！お前はア！」

アーサーはそう叫びながらフナムシを踏み潰していた！

すると、フナムシの大群が人の形になるとジョーンズになって言った

「俺の異名通りだろう？海の悪霊 さ！フハハハ！」

ジョーンズの笑う姿に恐怖しながら、片手をロープに変化させてジョーンズを縛りあげようとしたが……体がフナムシで出来てるジョーンズには無駄だった……！

「それじゃあ……アーサー君？死ぬのは怖いだろう？」

「うっ……うわあああ！」

アーサーはそのままフナムシの大群に飲まれた……。

――――

ルーク達は目の前の様子に目を疑った

目の前に居たはずのCPの職員は全ていなくなっていた

アーサー達は異形な姿になり、ジョーンズ言う事よく聞いていた。

ジョーンズ達は森を歩いていった。

「ルーク！近くの入江に行くぞ！」

近づいてきたジョーンズに少し怯えた表情を見せた

「おいおい……そんなに怯えるなよ？身を守る為だ！多少の死人は仕方ない！」

ジョーンズの言葉にルークはうなづいた！

森を抜けると入江があり……その近くにフライング・ダッチマン号が浮上してきた！

「おい！船長！」

ルチアーノの声が響いた

「それでは、さらばだ！フォクシー！」

ジョーンズはそう言うのとルークを抱えながら船へと跳躍した！

アーサー達は近くの木に体を押し当てると消えた！

そして、ジョーンズ達が船に乗るとダッチマン号はゆっくり潜行して行った！

未来の大海賊達

フライング・ダッチマン号は海流に乗ってゆつくりと海底を進んでいた。ダッチマンの船長室では、ジョーンズはオルガンの前に座りながらパイプを啜っていた。

（腕を切られたつてのに……痛みはあまり感じなかつたなあ……）

傷口はすぐに塞がったし、流石はワンピースの世界だな……）

切られた左腕の断面を触れながら、ぼんやり考えつつパイプを吸った。息を吐くと煙が上に向かつて登っていった。

すると、船長室のドアがノックされた。

「誰だ？」

「私よ……アンジェリカ……。入って……いいかしら？」

「ああ……構わんぞ？」

ジョーンズがそういうとアンジェリカが船室に入ってきた。

アンジェリカはうつむき加減にジョーンズを見ると言った。

「ルーク……弟を助けてくれてありがとう……。」

頭を下げながらアンジェリカはそう言った。ジョーンズはパイプを深くを吸い込む

と言った。

「勘違いをするなよ？アン？お前との血の契約は必ず守らなければならん。あの小僧がもしも溺死でもすれば、それで契約は不成立になる。

だから、小僧を助けたに過ぎん……。それに小僧の能力はうまく使えば、俺に降りかかる厄介事を防げるかもしれないからなあ？」

ジョーンズは椅子に深く腰掛けながら、パイプを啜えてニヤリと笑いながらアンジェリカを見た。アンジェリカはそう言ったジョーンズを睨みつつもこう言った。

「……！それでも……アナタは……腕を無くしてまで……ルークを助けてくれたわ！」

アンジェリカの言葉にジョーンズは少し不機嫌そうに言った。

「ふん！腕無くしてまでお前の弟を救ったのでは無い……。死神野郎との戦いには学ぶべきものがあると思ったからだ！その授業料として、左腕を持ってかれたにすぎん！」

ジョーンズはそう言いながら、腕の無い左袖を触った。

アンジェリカは悲痛な表情を浮かべながら、ジョーンズを見た。

それに気づいたジョーンズはこう言った。

「なんだ？俺がこの左腕を無くした事を申し訳ないでも思ってるのか？バカにするなよ？アン！俺はマゼマゼの実の能力者だ！

その気になれば、代わりの腕ぐらい腕に混ぜ込む事ぐらい出来る！」

今はただしいだけだ！」

ジョーンズは怒った表情を浮かべながらそう言うと、アンジェリカは頭を下げてこう言った。

「ごめんなさい…。もう私は…船室に戻るわ…。」

アンジェリカは力無くドアの方を向き、歩き出した。ジョーンズはその様子を見ながら、アンジェリカにこう言った。

「おい…。」

「…。何？」

「小僧は元氣か？」

「…。ええ…今はぐっすりと寝てるわ…。」

「そうか…。」

アンジェリカが扉のドアノブを捻ろうとした瞬間、ジョーンズはこう言った。

「もう…手を離すんじやあねえぞ…。」

「…!!。わ…わっがっでるわ!!それじゃ！」

ジョーンズの言葉を聞くと、アンジェリカは少し言葉に詰まりつつも慌てて船長室を出ると大声で泣いた。ジョーンズは外から聞こえてくるアンジェリカの泣き声に耳を傾けながら、パイプを深く吸い込んだ。

フライング・ダッチマン号が海底を進んでる中…。

一方海上では、一隻の海賊船が満月に照らされながら航行していた。

その海賊船の掲げる海賊旗は骸骨に立派なカールしたヒゲが描かれていた。

この海賊団の名は…ロジャー海賊団！

後に、偉大なる航路の最終地点「ラフトル」に辿り着く事となる海賊団である。

その海賊船の甲板に並べてあるボートの中で、一人の少年が悪巧みをしていた。

（やったア〜！派手にうまくいったあ！昼間に俺が食ったのは、俺が作った偽物の悪魔の実だったのさ！こうもすんなりと行くとはなあ！

フフ♪後は、バレねえうちに船を降りちまおう！この悪魔の実を売った金とこの地図の財宝があれば！スグにだって海賊団を結成できる！

ぐふふふ！）

「おい！バギー！何ニヤニヤしてやがんだ？」

バギーは慌てて宝の地図を隠し、口に悪魔の実を突っ込むと後ろを見た。そこには、麦わら帽子を被った赤髪のシャンクスがこちらを覗き込んでいた。

「な…なんだあ…。てめえか…驚かすなよ…。」

「なんて顔してんだい……。盗み食いは程々にしとけよオ！コックさんに怒られるぜ！」
シャンクスはそう言うのと、バギーから遠ざかっていった。バギーはフウ……とため息をつくと思った。

(あ……危ねえ……危ねえ……)

バギーが冷や汗を拭おうとした瞬間！

「あつ……！そう言えば！」

急に後ろにシャンクスが現れた！

「ばつきよオ……船長が……！」

(!!!)

!!!
ゴックン……

バギーは急に声を掛けられた事で口にあつた悪魔の実を飲み込んでしまった！

「が……あ……あ……！」

バギーはすぐに後ろを向くとシャンクスを胸ぐらをつかむと捲し立てた！

「シャ……！シャンクス！テメエ！俺……俺の……俺はアアア!?」

バギーが立ち上がったことにより、隠してた宝の地図が風でフワリと浮き上がった。

シャンクスはそれに気づくと言った。

「なんだ？あの紙切れ？」

「シャンクスの言葉にバギーはハツとするとシャンクスの目線の先にある物見て叫んだ。」

「あああああ！俺の！俺の地図ううう！」

バギーはそう叫ぶと、海へと落ちていこうとする地図を追って海へと飛び込んだ！

「おい！バギー！」

シャンクスは海へと飛び込んだバギーに向かってそう言った。

海へと飛び込んだバギーは体の異変に気づいた！

（何だ？体が…動かねえ！まさか！カナヅチになるってのは本当だったか！はあ…！マジイ！）

ゴボゴボとバギーは海の底へと沈んでいった。

船の上では、シャンクスが様子を見ながら言った。

「おい！バギー？何やってんだ？泳ぎは得意だろ？」

シャンクスがそう言ったもののバギーは一向に上がってこない。

シャンクスはやつと異常事態に気づくと叫んだ！

「…!!。バギー！」

海の中ではバギーが沈みながら助けを乞うた。

（た…助けてくれえ…！）

シャンクスはバギーを追って船から、海へ飛び込みながらこう言った。
「待つてろ！今助ける！バギー！」

シャンクスは海へと飛び込むと必死に海中を探した。

（何処だ！何処にいるんだ！バギー！）

シャンクスは必死に潜りながら、どんどんバギーを追って海の底へと潜っていった。
…。

（もつと…深い所にいるのか？バギー！待つてろ！必ず助けてやる！）

シャンクスはさらに水を掻き分けて潜っていった。シャンクスは目を凝らしながらバギーを探したが…一向に見つからない。

（ぐっ…。息が…もう…ちくしょう…バギー…。）

シャンクスは口から空気を吐きながら、もがき苦しみ始めた！

すると、シャンクスがもがき苦しみながらも海の底を見ると、海の底が自分に迫って来るように見えた！

（な…なん…だ？）

シャンクスはそのまま迫って来た何かに体を横たえるとその何かは勢いよく海面へと浮上した！

シャンクスは薄れゆく意識の中…先程まで海底だと思っていた物が船の甲板だと

知った。その甲板を義足で歩く音が自分に近づいてくるのが聞こえた。ぼんやりとした視野には異形な姿の水夫達がこちらを見ていたのが見えた。

シャンクスは薄れゆく意識の中で一言だけいうと意識を手放した。

「バギー……」

道化と赤髪の幽霊船探検

「ん……ううう……」

シャンクスの顔にぼとりと水滴が落ちた。シャンクスは呻き声をあげながら目をゆつくりと開けた。そして、目をカツと開いて叫んだ！

「ハッ！バギー！」

ガバツとシャンクスは起き上がって辺りを見渡した……そこは牢屋で鉄格子には、海の生物達がたくさん張り付き蠢いていた。

「……。ここは……何処だ？俺は確か……バギーを助けに……」

シャンクスはゆつくりと立ち上がると鉄格子の扉を触った……。すると、扉はギイイつと気味の悪い音を立てながら開いた。

「船の牢屋か？何で……船何かに……？」

シャンクスは牢屋から出ると暗い船倉を見渡した。そこは色々な壁や床に、珊瑚やフジツボが張り付き気味の悪い所だった。

「……そうだ！思い出した！俺は、バギーを追って海の底に……！そしたら、海底が迫ってきて……それで！」

シャンクスはハツとしながらそう言うと、近くの牢屋をふと見た。その牢屋の床にバギーが寝ていた。

「……!!。バギー!」

シャンクスは隣の牢屋で寝ているバギーを見て、慌てて隣の牢屋の扉を開けた。

「おい!バギー!しつかりしろ!」

牢屋の中に入ると、床で寝ているバギーの体を揺すった。

シャンクスに揺すられてバギーは眉間にシワを寄せながら呻いた。

「うう……俺の……地凶……俺の……ハツ!」

バギーは目をカッと開くと急に起き上がってシャンクスを見た。

「無事だったか!バギー!心配したんだぞ?」

シャンクスの言葉にバギーは眉間に青筋を立てると叫んだ!

「シャンクスウウウ!テメエエエ!お前の!お前のせいでええ!」

バギーはシャンクスに掴みかかるとシャンクスの顔に唾が飛ぶくらいにまくしたてた。シャンクスはバギーの反応にキョトンとしていたが……暗闇の中から何か大きなものが歩く音が聞こえ、その何かが歩く度に船倉の床板がギシツと軋む音も聞こえた。

「バギー!隠れろ!」

「ぐむ!もが!もが!」

シャンクスはわめくバギーの口を抑えながら、牢屋の中にある樽の影に身を潜めた……。

足音は段々：牢屋の前に近づいてきた。シャンクスは身を隠しながら、牢屋の入口の所を見た……。

そこには、暗い闇の中にカンテラの光がユラユラと揺れていた。光が揺れる度にカンテラの取っ手がギイツ：ギイツ：と音を立てた。

カンテラを持った何かは牢屋の前に差し掛かると、カンテラの光がその何かの正体をあらわにした。シャンクスはカンテラを持った何かを見て驚きの余り目を見開いた。

そこには、人間とサンゴが合体した化物がいた。その化物はカンテラで照らしながら牢屋の中を見渡すと、片手に持った錨を引き摺りながら……ゆっくり奥の方へと歩いていった。

「何だ……あれ？」

シャンクスが驚きの余り呆然としていると、バギーの口を抑えていた手が緩んだ。バギーはすかさず口を塞いでいた手を剥ぎ取るとシャンクスを見て言った！

「何をしやがるうう！ シャンクス！ テメエエ！ コラア！ あわゆく窒息する所だったじゃねえか！」

バギーはシャンクスに怒気を孕んだ声でそう言った。シャンクスはゆつくりとバ

ギーの方を見ると言った。

「おい……バギー。さっきのやつ見たか？あの……化物。」

シャンクスはそう言ったがバギーはまるで気にしないような口振りで言った。

「ああ？化け物？何言つてやがんだ？そんなやつ……？」

バギーは立ち上がると周りを見た。そこはいつもの船の甲板でも、海の底でもない、気味の悪い船の牢屋だった。

「なな……なんだ……おおお！」

バギーはそう叫ぶとシャンクスを見るとまた胸ぐらを掴んだ！

「おい！シャンクス！テメエ！俺の宝の地図を海の藻屑にして、更には！俺に悪魔の実を食わして！海に落として！これくらい俺に酷い事をしたのに！それだけでは飽き足らず！こんな訳の分からんところに閉じ込めるたア！どう言う了見だアアア!? コラアア！」

バギーはそう言ったがシャンクスはゆっくりと立ち上がると、牢屋の扉を音を立てないように開けるとバギーを見て言った。

「バギー……ここは危険だ！この船倉から甲板に出るぞ！」

シャンクスは腰に差していたナイフを抜くと、構えながらそう言った。バギーはシャンクスのその反応に少しギョツとしながら、渋々シャンクスのあとをついて行った……。

シャンクス達が出ていった暗い牢屋の暗闇の中から、シャンクス達を見ている者がいた事を彼らはまだ知らない…。

シャンクス達は、薄暗い船倉の中で上の甲板へと続く階段を探していた…。

「ちくしよお…なんだよオ…。ここはよオ…なんで船の中なのに海藻があるんだよ…。」

バギーはそうボヤきながら、暗い闇の中をゆつくりと進んでいた。シャンクスは周りに並んでいる樽の焼印を見て言った。

「ワインに…ビール…それにラム。どれも製造されたのは最近のやつだな。」

シャンクスがそう言うと、バギーは反論する様に言った。

「ああ？こんな沈没船みてえな船なのに、一丁前に積荷があるつてのかよ！」

「ああ…バギー。この船は出向してまだ日があまりたつてないらしい。」

シャンクスはそう言うと、上に吊るされている籠からレモンを、取りバギーに見せた。

「見ろよ…！もしも…この船が幽霊船ならこんな新鮮なレモンがある筈がないさ…！」

「うお！本当だ！」

バギーはシャンクスに見せられたレモンをマジマジと見ると思いついた様に言った。

「だが…新鮮なレモンがあるという事はよお？壊血病にならねえ様に予防しなくちゃならねえ奴が居るつてことだ！」

「その通りだ……バギー！普通の人間がいる筈だ！」

シャンクス達は奥へと進むと、甲板へと出る階段があったのでシャンクス達はそれを登っていった……。上の船倉につくと、そこには沢山の砲が並んでいた。

「それにしても……気味の悪い船だぜ……。こんな船の中は、ポロポロなのに……砲弾なんかはピカピカに磨かれてやがらア……！」

バギーは大砲の横に積まれていた砲弾を掴むとそれを見ながらそう言った。シャンクスはバギーを尻目に周りを警戒しながら、前へと進んでいた。

すると、シャンクス達の耳に何かか聞こえてきた。

「……!!。バギー……！」

「うお！なつ……！なんだよ！驚かせんじやあねえよ！」

「聴こえねえか？この音？」

「音オ？音つて……何言つて……」

バギーはシャンクスに言われて、耳をすますと何かを調理する音が聞こえた。

「なんだあ？何かを切る音が聞こえるぜ？」

「何処からだ……？こつちから聞こえるぞ！」

シャンクスは音のする方に歩くと、そこにはポロポロの木のドアがあった。ドアの所々に空いた穴からいい匂いが漏れていた。

「おーなんだあ？いい匂いがするじゃねえか！」

「止せ！バギー！」

バギーはドアの穴から中を覗き込んだ。部屋の中は蒸気で全貌が見えなかったが、火にかけられた鍋がグラグラと煮えていた。

「おい！ここは調理場みてえだ！シャンクス！少しなにか食おうぜ！」

バギーは隙間に目を当てながら、シャンクスにそう言った。シャンクスは呆れた様子で言った。

「おいおい…バギー！こんな所に来て変な食い意地張るなよ…。何かあるかもしれ…」

シャンクスがバギーにそう言おうとしたその時！シャンクス達の後ろの通路から、何か走ってくる音が聞こえた。

「…！バギー！逃げるぞ！」

「お…おい！」

シャンクスはバギーの腕を掴むと引つ張って走り出した。シャンクス達が走り出すと暗闇の中から、異形の姿をした水夫が手と一体化した剣を、振り回しながら走ってきた！

「ウゴガアアアア！」

水夫は叫び声をあげながらシャンクス達を追い始めた。バギーは後ろを振り返ると

涙目になりながらシャンクスを睨んで言った。

「シャンクス！なんだよ！あれは！」

「だから！言ったろ！ここには化物がいるつてよオ！」

シャンクス達はそのまま走っていたが、異形な水夫はシャンクス達に追いつくと、手の剣をバギーに振り下ろした！

「うわあああ！」

「バギー！」

しかし…振り下ろされた剣はバギーを傷付けることは無かった。バギーの体が縦に真つ二つに割れたからである。

「ぎやああああ…？…あれ？」

バギーは叫び声をあげたが…2つに割れた状態になりながらも、体は足を止めなかった。シャンクスはバギーを見るとギョツとしながら言った。

「おい！バギー！大丈夫なのか！」

「ああ…何ともねえみてえだ。もしかして…！」

シャンクスの言葉に自分の体の変化に、驚きの声をあげていたが…バギーはあることを思い出した。

（ま…まさか！この力つて…！）

バギーは顔を青ざめさせると、シャンクスを見ながら叫んだ。

「これが俺の悪魔の实の能力ウウウ？」

バギーはワナワナしながら、自分の手見てそう叫んだ。異形な水夫は、床に刺さっていた剣を抜くとまたシャンクス達を追いかけ始めた。

「やべえ！バギー！驚くのは後だ！さっさと逃げるぞ！」

シャンクスは、固まっているバギーの手を掴むと引つ張りながら走り出した！シャンクス達が狭い船内を走っていくと、甲板へと出る階段があった。

「あつたぞ！バギー！ここから甲板に出られる！」

「お！おう！」

シャンクス達は急いで階段を駆け上がった！バギーも二つに分かれた体で苦戦しながらも階段を登った。

「やったぞ！甲板に出れた！バギー！入口を閉じるんだ！」

「わかつてらア！」

シャンクス達は甲板へと出ると、化物が追って来れないように船倉への入口を閉めた。

「ふう〜。一時はどうなるかと思つたぜ……！」

バギーとシャンクスが額ににじんだ汗を拭つた。その瞬間！船にパイプオルガンの

音が響いた！

「うおつ！何だアアア!?」

「……一体どこから!?!」

バギー達はオルガンの音にびっくりして、辺りを見渡した。辺りは船倉の光景と同じでボロボロな感じだった。シャンクスはふとマストの一番上を見た。

そこには、タコの頭にドクロが描かれた海賊旗ジョリー・ロジャーが風もないのにはためいていた！

シャンクスはその海賊旗を見ると、みるみるうちに顔を青ざめさせると言った。

「いつ……ま……まさか……この船って……!」

シャンクスがそう言おうとした瞬間！オルガンの音が止むと、義足で歩く音が鳴り響き船長室の扉が開け放たれた！

「へっ?」

「クソっ!」

シャンクスは船長室から出てきた男を見るとナイフを構えた。バギーはと言うと素つ頓狂な表情になりながら船長室の方を見た。ジョーンズは、シャンクス達を見るとニヤつと笑いながら言った。

「おやおやあ?誰かと思えば、勝手に俺の船に乗ってきたガキ共じゃないか……。やつと目が覚めたようだな?ガキ共お……?」

男はそういうと、更にシャンクス達に近づいた。シャンクスはナイフを構えながらこう言った。

「何もあんたの船に乗りたかつたんじゃない！俺はこいつを助ける為に海の中を潜っただけだ！」

「ほう？お前は美しき友情の為に、俺の船に乗ってきたのか？」

ジョーンズは嘲笑いながら、さらに近づいた！月の光に照らされジョーンズの顔があらわになった。

「ああつつつ！あんたは！」

バギーはジョーンズの顔を見ると目を飛び出させながら尻餅をつくと言った！

「あの”海の死神”とやり合ったああああ！”海の悪霊” デイヴィー・ジョーンズ！」

バギーがそう言うのとジョーンズは満面の笑みを浮かべながら言った。

「ほう！俺の事を知っているのか？嬉しいぞお？赤っ鼻」

「赤っ…鼻…？誰にいうとんじゃ！こらアアア！」

バギーはジョーンズの言葉に怒り狂ったが…ジョーンズの雰囲気気圧された。シャンクスが近づいてくるジョーンズに対してナイフを突き刺そうとした瞬間！シャンクスの後から手が伸びてきてナイフを掴むと、ドロドロに溶かした。

「ガキがそんな危ねえもん振り回すもんじゃねえ…。うちの船長を殺したけりや…俺を

倒してからにするんだな？」

シャンクスは後から聞こえた声に反応して振り向くと、長い髪を無造作にくくり、ポニーテールにした男がいた。ジョーンズは男を見ると言った。

「おいおい……あまり怖がらせてやるな……？小便でもチビられちゃ～面倒だ……。そうだろう？ジョーン？」

「そうだな……船長！あまり怖がらせすぎるのもいけねえか……。」

ジョーンズ達はニヤニヤとシャンクスを見てそう言った。シャンクスはジョーンズ達を睨みつけていた。

ジョーンズはそれに気づくとシャンクスに笑いかけながらこう言った。

「何はともあれ……？我が悪名高き船への乗船を歓迎しよう！」

ジョーンズは両手をわざとらしく広げながらこう言った！

「我がフライング・ダッチマン号へようこそ！バギー君とシャンクスくん？」

ジョーンズはそう言い終えるとニヤリと笑った。

ライアーズ・ダイス

「ロープを引けー！」

『ヴオオオオオ！』

マツカスの号令と共にダッチマンの水夫達は雄叫びをあげながらロープを引き始めた。

「ヤードを回せー！何をちんたらしてる！ガキ！急げ！」

「ヒイイイ！」

マツカスの叱責にバギーは悲鳴をあげながらヤードを回し始めた。

（シヤンクスう！早く戻ってきてくれえ！そして、俺をここから解放してくれえええ！）

バギーは上を見ながら、声にもならない叫び声を上げたのだった。

—————

——時間前——

「乗船なんかしたくねえよ！こんな幽霊船にいられるか！早くおろしてくれえ！」

バギーはジョーンズの言葉に頭を抱えながらそう言った。

「うるせえなあ…。少しはその口を閉じていられねえのか？小僧？」

喚くバギーを面倒くさそうに見ながらジョーンズはそう言うときシャンクスの前に立った。

「ツツ…!!」

ジョーンズはシャンクスの顔をマジマジと見ながらこう言った。

「ふむ…ふむ…。いい顔つきだな…：シャンクス君？恐れを感じれない…：覚悟を決めてる顔つきだ…。将来は大物になるぞ？」

ジョーンズはシャンクスを見ながら、ニヤツと笑うとパイプに火をつけた。

「さあて？お前らがこの船に乗って来た理由は分かったが…。これからお前らはどうする？」

「何だ？俺らをこの船から降ろしてくれるのか？」

ジョーンズの言葉にバギーは嬉しそうにそう言った。しかし、ジョーンズはバギーを見下すようにこう言った。

「降ろす？はて…？誰も俺の船から降ろすとは言っていないぞ？んん？俺の船に乗ったのだ！お前らには向こう100年間俺の船で働いてもらおう…！」

「何だつてえええ！そんなの嫌だアアア！」

ジョーンズは悪そうに笑いながらそう言うとき、バギーは涙を流しながら頭を抱えてそう言った。しかし、シャンクスはジョーンズを睨みつけながらこう言った。

「…。分かったなら…：交渉バーレイといこう。どうしたら…：俺らを無事にこの船から降ろしてくれる?」

ジョーンズはシャンクス言葉に、ピタリと動きを止めるとシャンクスを睨んでこう言った。

「一体何処でその言葉を知った?小僧オ?」

「うちの副船長に教えられたのさ!」

シャンクスは麦わら帽子を深く被りながらそう言った。ジョーンズはそれを聞くと、不機嫌そうに顔のタコの足をウネウネと動かしながらこう言った。

「そうだなあ…：タダでとは言わんがあ…。そうだ!」

ジョーンズは顔を輝かせるとシャンクスを見てこう言った。

「お前も海賊の端くれなら知ってると思うが…：海賊は飲む 打つ 買うが大好きだ!俺もその中でも打つ事が好きでなあ?それでだ…：お前らがこの船に残るかをこのゲームで決めようじゃないか…：!」

ジョーンズは片手でサイコロを転がすとそう言った。シャンクスはそれを見るとこう言った。

「いいだろう…。もしも…：俺が勝てば俺達を無事に、この船から降ろしてくれ…：!」

「よかろう!しかあし!お前が賭けに負ければ、お前達は半永久的に太陽は拝めんぞ?」

いいなあ？」

「いいだろう…！のった！」

「まっつてくでええ！やだアアア！助けてくれええ！」

シャンクスはジョーンズの言葉に頷くとジョーンズはニヤリと笑った。バギーはジョーンズ達の会話を聞いて顔を青ざめさせながら泣き喚いていた。

「では、シャンクス君！我が船室に来たまえ！そこでやろうじやないか！」

ジョーンズはシャンクスの後に手を回すと船室へと促した。バギーはまだ喚いていたが…ジョーンズはそれに顔しかめるところ言った。

「おい！マツカス！」

「アイ…！船長オ？」

「あのうるさいのを少し揉んでやれ！」

「了解しました…。ギヒヒ！」

「ギャアアアアア…！！嫌だアアア！シャンクスウウウ！助けてくれええ！」

「おい！バギーを離してくれ！まだ働かなくてもいいだろう！」

マツカスに連れていかれようとするバギーを見て、シャンクスはジョーンズにそう叫んだ！しかし、ジョーンズは意地悪そうな顔を浮かべながらこう言った。

「確かにい？お前はあ…？パーレイで”賭けに勝てば俺の船から降ろしてくれ”とは頼

んだ……。しかあーし！いつ、何処で、とは指定しなかった！それに！働かせるのは賭けの終わった後とは、誰も言っていないぞお？小僧う？それにい……。パーレイはタダの心構えに過ぎん！連れていけ！」

シャンクスはジョーンズの言葉にギリツと歯ぎしりをしながらジョーンズを睨みつけこう言った。

「嵌めやがったな……！」

「いいや……。よく考えずにパーレイをしたお前が悪いんだ……。シャンクスくん？よく考えて次から使うんだなあ？」

「クソっ！」

シャンクスは悪態をつきながらジョーンズを睨んだが……。ジョーンズはさらに嫌な笑みを浮かべながらこう言った。

「さあ……。俺の船室に行くとしようか？シャンクスくん？」

ジョーンズとシャンクスは船室へと消えていった……。

—————

ーロジャー side ー

その頃……。ロジャー達は……

「おい！見つかったか？」

「いやあ？いねえぞ！」

「どこに行きやがったんだ？あいつら！」

海賊達は行方知れずになったシャンクス達を血眼になって探していたその騒ぎを聞きつけてか…船室からレイリーが出てきた。

「うるさいぞ…。何事だ？」

「あ！レイリーさん！」

「それがあ…」

「シャンクス達がいねえんだよ！」

「船倉やら色々と探して回ったが見つからねえんだ！」

「何だと？それは本当か？」

レイリーの前で説明していた海賊はさらにこう言った。

「レイリーさん！実は…！バギーの喚く声が聞こえた後に、海へ飛び込むような音が聞こえたんだ！もしかしたら、シャンクス達は海に落ちちまったのかもしれないねえ！」

「何？海に落ちただと？」

「ええ！水飛沫の音を聞いたのは俺だけではねえんでさ！」

手下の海賊はそうレイリー説明していたが…一人があることを言い出した。

「悪霊に連れてかれたかもしれないねえ…。」

「悪霊だと?」

「ええ…。実はオイラは水飛沫のあとに甲板に出て周りを見渡したんでさあ…。その時に…。」

「何だ?何かを見たのか?」

「見たんではねえんですが…。まるで海の底から響くような不気味なオルガンの音が聞こえたんでさ…。」

「オルガンの音色だと?」

「ええ…。あいつらはもしかすると悪霊に魅入られたのかもしれない…。」

「ぬう…。」

レイリーがそう唸るとまた船室のドアが勢いよく開けられると、その中から酒瓶を片手に持ったロジャーが現れた。

「うるせえぞ!なんの騒ぎだ!」

「ロジャー船長!じ…。実は!」

「何だと?ガキ共が?」

「そうでさあ!もしかすると海の底に…。!」

「へっ!心配する事たアねえ!あいつらは生きてる!そんな気がするんだ!」

「またお得意のカンか?ロジャー?」

レイリーはそう言うのとロジャーを見ながらニヤツと笑った。

ロジャーは酒瓶を煽るところ言った。

「声が聞こえんだよ！野郎共！急いでシャンクス達を探すぞお！」

『おおおお！』

ロジャーの言葉に海賊達は歓声を上げるのだった。

—————

く シャンクス side く

俺はあの悪霊に促されるまま…あいつの船室へと足を踏み入れた。

奴の船長室の中は船尾の側に大きなパイプオルガンがあつてその前には椅子とテ-

ブルが用意されていた。

「さあ…遠慮なく座るといい。すぐには始めん！ゆっくりしている」

ジョーンズはそう言うのと部屋の奥に何かを取りに行った。

俺はなにか武器になるようなものがないか辺りを見渡した。

すると、部屋の隅に大量の木箱が積まれているのが見えた。

（あれはなんだ？なにかの焼印が押されてるな…。あれは！）

世界政府のマーク！何でそんなものがこの船に…！）

俺は木箱を見ているとヤツがニヤニヤと笑いながら戻ってきた。

「うんん……あの木箱が気になるのか？ シャンクス君？」

「ああ……」

やつは俺を見ながら木箱を指さすとそう言った。すると、奴は得意そうに喋り始めた。

「あの木箱は俺がサラザールとやり合っていた時に頂いたものだ。

CPの軍艦……あのエンデヴァー号に大切に積まれていた物さ！

あの木箱の中にはな？ シャンクス君？ 世界政府の連中が知られたくないものが詰まっているのだよ……。この世界の根幹から揺るがすかもしれないものがなあ？」

俺の目を見ながら奴はそう興奮したように言った。奴はどこからとも無く……賽子を一〇個取り出すと俺の前に投げてこう言った。

「そんな事よりイ……？ さっさと勝負をしようかあ！ ブラフ……いや？ ライアーズ・ダイスを知っているかア？」

「ああ……知っている」

「それは結構！ 俺はこのゲームが大好きでなあ？ 人を騙すゲームというのは人間関係と同じで、実にい……？ 興味深いものだア……」

アイツはククク……と笑うとカップを2つ取り出して机に置いた。

「さあ……始めるぞお……！ 俺に勝てば……お前らをこの船から降ろしてやる。しかーし！

負ければこの船の水夫として向こう100年働いてもらおうぞお? いいなあ?」

俺は奴の目を見ながら頷くと奴は嬉しそうに目を細めた。奴はカップに賽子を投げ入れ机に叩きつけるとカップの中を確認してニヤツと笑った。俺も同じくカップに賽子を入れて机に叩きつけると中の目を見た。

(二五三二六か…。難しい目だな…。)

俺はそう思ったものの少し様子見をする為にこう言った。

「2の目が5つ以上だ」

「ほう…2の目が5つかあ…?」

奴は顔の触手を使ってパイプに火をつけると、パイプをふかし始めた。

「なら、俺はア…? 4の目が2つだあ…」

(4の目が2つ? えらく正確だな?)

俺はあまりの怪しさに顔を顰めながらこう言った。

「3の目が4つ以下だ」

「ほう! 3の目が4つかあ…」

奴はカップの中を確認しながらそう言った。

「5の目があ3つだア…」

(5の目が3つ? つまり…4の目が2つということと合わせると…残り奴の不明なサイ

ココの目は2つか1つだ)

「6の目が2つ……」

「嘘つきめエ……」

やつが俺を見てそういつた事に俺はギョツとした。

あいつは俺を見ながらニヤリと笑うとカップの中を俺に見せた。

そこにあるサイコロの目は四四六六三だった。

俺はサイコロの目を見ると奴を睨みながらこう言った。

「デメエ……イカサマしたな……!!」

俺はやつを睨みながらそう言った。やつはパイプをくわえながら俺を嘲笑うところ

言った。

「イカサマだと?はて?お前が何を言っているのかわからんなあ?」

やつはニヒルな笑みを浮かべるとパイプの煙を俺に向かって吹きかけてきた。俺は歯ぎしりしながらコップの中のサイコロを少し見てまたやつを見た。やつは、椅子から俺の方へと身を乗り出すと俺のコップを掴んでこう言った。

「さあーて?お前のサイコロの目は何かなあ?」

奴は俺を見ながらコップを持ち上げようとしたが……!

その瞬間!風を切る音が聞こえたと思うと船が大きく揺れた!

「……何事だ！」

「うわっ！」

俺は揺れたせいで床に倒れたが……やつはキョロキョロと倒れずに辺りを見渡した。すると、船室のドアが開けられた！

「船長オ……敵が現れましたあ……！」

シユモクザメの顔をした水夫がやつに向かってそう言った。

「何だと？海軍か？」

「いえ、海賊です！」

やつは水夫と共に外へと出ていった。俺もそれについて行き外に出ようと、するとバギーが俺に向かって走ってきた！

「シヤングズウウウ！俺達アアア！どうなちつまうんだアアア！」

バギーは涙をボロボロと流しながら鼻声のままそう言った。

俺はバギーにこう言った。

「バギー！それどころじゃねえ！逃げるチャンスがまわってきたぞ！」

俺は、うずくまりながら涙を流しながら拳で床を叩くバギーを立たせるとそう言った。バギーはその言葉に泣くのをやめると袖で目をこすりながらこう言った。

「そっ……そりゃあ！ほっ……本当か？」

「ああ……どうやらこの船を襲おうとしている海賊がいるみたいだ！ 戦闘になったらその間にずらかるぞ！」

俺はバギーと共に甲板に出た

そして、俺達はダッチマンの水夫が叫ぶ海賊の名を聞いて、歓声を挙げた！

『ロジャー海賊団だアア！』

—————

〜ロジャー side〜

「野郎共！ もつと撃ちまくれ！」

「相手に反撃の隙を与えるな！ 畳み掛けるんだ！」

『ウオオオオ！』

ロジャーとレイリーの号令と共に大砲は一斉に火を吹くと

その度にダッチマンの周りには次々と水飛沫が上がっていた！

「ロジャー！ 必ずあの船にシャンクス達がいるのか！」

「ああ……レイリー！ あの船から聞こえんだよ！」

バギーのやつの泣く声が！

ロジャーは剣を抜くとダッチマンに向けて叫んだ！

「野郎共！ 総員乗り込む準備をしろー！ いいな！」

『ウオオオオ！』

雄叫びをあげる海賊達はせかせかと動き回っていた。しかし、レイリーは望遠鏡を覗き込むと叫んだ！

「ロジャー！あの船が船首をこちらに向けてきたぞ！」

「何イ？」

ロジャーはダッチマンを睨みつけるのだった。

—————

くジョーンズ side く

「船首カノン砲——！」

「船首カノン砲準備イ——！」

ジョーンズの号令をマツカスは船倉に向かって叫んだ。すると、船首の砲門が開き3連装のカノン砲が姿を現した。

ジョーンズは操舵輪を操作しながらロジャー海賊団へと向けると言った。

「撃てエエエエ！」

「発射アアア……！」

ジョーンズの号令と共に船首のカノン砲は轟音と共に火を吹いた！

カノン砲は一発を発射すると、キリキリと音を立てながら回転して、すぐにもう一発を発射した。

ロジャーの船は上手くカノン砲の砲弾を避けていたが……一発が船の真ん中にある船室に命中した！

「野郎共！このフライング・ダッチマンに齒向かった事を後悔させてやれ！」

『ヴォオオオオ！』

ジョーンズはそう号令すると腰にあるカトラスを引き抜くと、ロジャーの船へと向けた！

すると！ダッチマンのマストが風をいっぱい受け始めた！だんだんダッチマンの速度が上がるとロジャーの船に接近し始めた！

「野郎共オオ！乗り込むぞお！」

ジョーンズはカトラスをロジャーの船へと

向けながらそういうのだった。

海賊王VS海の悪霊

海軍本部……マリン・フォード……

そこは……世界の治安を守る海軍の本拠地である。

しかし、そのマリン・フォードにけたたましく緊急事態を知らせるサイレンが鳴り響いていた。

『W7沖合にて……ロジャーとジョーンズが小競り合いを起こしている模様！至急！海兵は出撃せよ！』

アナウンスの声はサイレンと共にマリン・フォードに響いていた。

「ジョーンズは何のために？」

「わからん！しかし、良くない事が起きるのは確かだ！それにあそこは司法の島！エニエスロビーにも近い！急がなければ！」

慌てて軍艦に移動するセンゴクは忌々しそうに顔を顰めて更にこういった。

「この非常事態に限って……サラザール大將は例の一件で聖地へ！ゼファーはあのワールドの追撃でいいとは！」

センゴクは辺りを見渡し大声で言った。

「ガープ！ガープは何処だ！」

「ガープ准将でしたら…ヒデオシ大将と共に裏街に行くと…」

「く！あの拳骨馬鹿め！必要な時におらんとは！」

「電伝虫を使い一応連絡を取ろうとされていますが…。中々連絡が取れず…」

「あの馬鹿の事だ！電伝虫を忘れておるのだろう！」

「いえ、ガープ准将だけではなく…ヒデオシ大将とも…」

「くツツ！ヒデオシ大将までも…！あの自由人コンビめ！」

眉間に皺を寄せながらセンゴクはそう嘆いた。

慌てて軍艦を出撃させようと海兵たちは慌てふためいていた。

「早くヤツらを止めんと！海のクズ共が騒ぎ始める！急げ！」

「ハッ！」

センゴクの叱責を受けた海兵は慌てて走り出したのだった。

—————

く ジョーンズ side く

「この俺に刃を向ける連中を吊るしあげろおお！」

ジョーンズはそう叫ぶとカトラスをロジャー達に向けた。

「うおっ！なんだ？」

「船が勝手に……」

「揺れてやがる！」

「おい！見ろ！」

「ロ……ロープが！」

「なんだ？蛇みてえに！」

「動いてやがる！うわっ！」

「ヒイ！足に絡みついてきやがった！」

ロジャー海賊団の船員達は、ジョーンズが操るロープによって襲われ始めた！

「お前ら落ち着け！ロープに足を絡められたのならナイフでもいい！切るんだ！」

レイリーは吊るされてる手下達を見るとそう叱責した

「レイリーさんの言う通りだ！たかがロープだ！切れば大丈夫だぜ！」

手下の一人は笑いながらそう言うのと迫ってくるロープを切り刻み始めた。しかし……

！

「おいおい？俺達がいることも忘れるなよ？」

ロウはニヤリと笑いながら片手で刀剣を溶かすとマツカス達を引き連れ船へと乗り

込んできた！

「お前は…確か”溶解”の…！」

「おつ！俺の事を知ってんのか？嬉しいねえ！」

ロウは笑いながらレイリーに襲いかかった。

ジョーンズは義足の音を響かせながらロジャアの船へと向かっていったが…しかし

！

「おらあああああ！」

「!?」

突然！雄叫びをあげてシャンクスが剣を振り下ろしてきた。

ジョーンズはさつと避けるとシャンクスを見ながらこう言った。

「おやおやア？これはこれは…！賭けに負けたシャンクスじゃないか？この俺に剣を振

り下ろすとは？どういう事だ？」

「お前を倒して…この船から降りるためだ！」

シャンクスは床に刺さった剣を抜くと構え直し、ジョーンズに襲いかかった。しかし

…！ジョーンズは不敵な笑みを浮かべながら、攻撃をヒラリとかわすと、義足でシャン

クスを蹴り上げた！

「ぐぼほお！」

シャンクスは口から嘔吐しつつ、フラフラになりながらも剣を杖がわり立つとジョーンズを憎々しげに睨みつけた。ジョーンズはシャンクスの目を見ると嬉しそうな顔を歪ませながらこう言った。

「憎しみの籠ったその目……いい目をするなあ？ シャンクスくん？ 俺が憎いか……？ 弱い自分が情けないか？ 今のお前では何も守る事は出来んぞお？ たとえ！ 仲間であつてもだ！」

ジョーンズはそう言うとかトラスを抜き放ち、シャンクスに向けて言った。

「本当に強い海賊というのはなあ？ シャンクスくん？ こういふ事を言うんだ！」

ジョーンズはカトラスをまるで、指揮者のタクトのように動かすと船のロープが集まり始め、まるで大きな腕のようになった！

「ぬおりやああああ！」

『うわあああ！』

ロジャーの船にロープの腕が振り下ろされ、マストがへし折れた。

「クソっ！ マストが！」

「おいおい……よそ見してる暇はねえだろ？」

レイリーは折れたマストを見ながらそう叫んだが、ロウはそれを遮るかのようにレイリーの剣を受けながらそう言った。ジョーンズはシャンクスを見下ろしながらこう

言った。

「どうだ？お前達のせいでお前らの海賊団が滅びていく様は？俺に齒向かえばこうなるんだぞ？」

「うおおお！」

ジョーンズはいやらしく目を細めながらそう言うと、シャンクスは剣を構えなおすと突進し始めた。

「ふん！遅いわア！」

ジョーンズが蹴り飛ばそうとした瞬間！

「オラアアアア！」

「ツツ!!…グガア！」

ジョーンズは殴り飛ばされ、樽が積まれているところに突っ込んだ！

ジョーンズを殴り飛ばした張本人は、シャンクスの前に立ち腕を組むと豪快にこう言った。

「ガツハツハツ！俺様の仲間を虐めんな！ぶち殺すぞ！タコ野郎！」

それは後の海賊王…ゴールド・ロジャーだった！

「船長！」

「ゴラア！シャンクス！どこほつつき歩いてやがった！」

「ブフオ！」

ロジャーはそう言うのとシャンクスの頭に拳骨を食らわせた。シャンクスは目から涙を流しながらもこういった。

「すみません！ロジャー船長！バギーを助ける為に俺……！」

「ガツハツハツ！構わねえさ！仲間を見捨てる奴は俺の海賊団にはいらねえ！わかったら、下がってろ！シャンクス！あいつの相手はこの俺だ！」

ロジャーは拳をバキバキと音を立てさせながらジョーンズの方を見た。

「いいパンチだ……ロジャー！」

ジョーンズはふらつきながらも立ち上がるとカトラスを構えた！

「ガツハツハツ！俺も有名になったなあ！化物にまで顔を覚えられるとはよオ！」

「ああ……。ようく……。知っていると……！ゴール・D・ロジャー！」

ロジャーは武装色で硬化した腕でロジャーはジョーンズのカトラスを受け止めた！

「たった一度でもいい……！お前と戦ってみたかったんだ！」

ジョーンズはそう叫びながら、ロジャーに向かってカトラスを振り下ろし続けた！口

ジャーは斬撃を受け止めながらにっとな笑いながらこう言った。

「そうかよ！嬉しい事を言ってくれるが……！化物にそこまで思われても何も嬉しくねえ

……ぜー！」

ロジャーは弾き返すと腰の剣を抜き、ジョーンズの斬撃を受け止めた！

「防ぐだけかあ？もつと楽しませてくれると思っていたが？」

「はっ…！冗談はその顔だけにしたらどうだ？タコ野郎？」

「そうか…！ならア…？」

ジョーンズはニヤアつと、いやらしく笑みを浮かべると叫んだ！

「擬態解除！」

その瞬間！顔がぐにやりと変形し始めた！シャンクスは驚きのあまり声を出せなかった…！ジョーンズは顔を素顔に戻すと笑いながらこういった。

「どうだ？これで冗談ではなくなっただろう？」

「お…お前！あれが本当の姿じゃねえのか？」

シャンクスは目を丸くしながら、ジョーンズを指さしてそう叫んだ！

「シャンクスくうん？ひとつ教えてやろう…。タコには擬態という習性があるという事を忘れるなよ？」

ジョーンズは笑いながらそう言うのとロジャーに向かってこう言った。

「さあ…！ロジャー！これが俺の本当の姿だ！さあ！思う存分殺しあおうかあ！」

「全く…面白え奴だ！気に入ったぜ！化物だと思つてやつがまさか人間だったとはな！

これは傑作だな！」

ジョーンズとロジャーは剣を受け止め合うと……両者の間に火花が散った!

「二つ名の通り!不気味な野郎だ!」

「ああ……!そうとも!俺こそ……!海の悪霊だあ!」

ジョーンズはそう叫ぶとロジャーを弾き返した!しかし……片腕が無いジョーンズはすぐにやり返されてしまう。ロジャーはそれを見てこういった。

「おい……!どうした?タコ野郎?片腕が無いせいか……!次の一手がおろそかだぞ?」

「ぬかせえ!『鎖チェインアームの腕!』」

ジョーンズは近くにあった鎖を掴むと自分の腕に混ぜ込んだ!すると、鎖でできた腕が現れた!

ジョーンズはその腕をだらりと垂らすと振りかぶりながらこう言った!

「これで腕が出来ただろう?喰らえ!『鎖チェイン・ウィップの鞭!』」

腕はロジャーに向かつて投げられると、ロジャーの右腕を掴んだ!

「うおっ!」

ジョーンズはロジャーの腕を掴んだのを確認すると力任せに引つ張りこう言った。

「さあ!楽しく踊ろうじゃないか……!死の輪舞をな!」

「ガツハツハ!そりゃあ!楽しくなりそうだ!」

2人は笑いながら刃を交差するのだった。

「バギー side」

(冗談じゃねえ！こんな所にいられるかあ！)

バギーは泣きじやくりながら、ダッチマンからロジャーの船へと乗り移ろうとしていた。

(ロープ！ロープは何処なんだ？)

バギーは混戦状態の船上でロープを探し回っていた。すると！誰かが転がってきた！

「うぎやあああ！」

「クソツタレ！倒しても倒しても！立ち上がりやがる！こいつあ……面倒だぜ！」

その転がってきた男は立ち上がると、バギーはその男の顔を見て泣きながらこう言った！

「ギャバンさん！」

「あ……？おつ！バギーじゃねえか！やつぱりロジャーの言う通りここに居たんだな！」

ギャバンはバギーの方をバンバンと叩くと笑った。

「ギャバンさん！助けに来てくれたのかア〜！」

「おいおい！泣くんじゃねえよ！みつともねえぞ！」

「早く……！俺を保護してくれよオ！ここにいちや死んじまううー！」

「そうしてやりてえが……今無理だな！」

ギャバンは睨みつけるその先にはゴライアスが向かってきていた！

「うぎやあああ！化物おおお！」

「おら！デカブツ！俺が相手だ！」

ギャバンは斧を取り出すとゴライアスに向かつていった！

「もう勘弁してくれえよオ！早く下ろしてくれえ！」

バギーが頭を抱えながら船上を走り回っていると……！暗い船倉の中から漆黒の服に身を包んだスカルが飛び出してきた！

「またかよおお！もう嫌アアア！」

「全く……！折角……暗号解読がうまくいきそうなのに……！騒がしすぎて出来ないじゃないか！」

スカルは不機嫌そうにブツブツとつぶやくと、腰のホルスターからピストルを抜き放つと目の前にいたロジャーの船員を撃ち抜いた！

「誰か助けてくれえ！」

バギーが走っていると見覚えのある姿があった。

「クロツカスさん！助けてえ！」

「ん？バギーか？何でこんなところにいる？」

クロツカスはモリでダッチマンの水夫を突き刺しながらバギーを見た。

「わかんねえよオ！海に落ちたと思っただらこの船に乗ってんだ！」

「そうか…そりやよかつたな？」

クロツカスはモリを構えると歩みを進め始めた。

「おいおい…！どこに行くんだよ！クロツカスさん！」

「決まってるだろう？化物退治だ」

クロツカスはニカツと笑いながら襲いかかってくる水夫達へと向かっていった。

「ここに居るのは…！戦闘バカばかりかあああ？」

バギーが悲痛な叫びをあげていると両者の船が大きく揺れた！

—————

く シャンクス side く

「なっなんだ？」

近くに大きな水しぶきが上がったのを見たシャンクスは驚きの声をあげた。慌てて手すりから海の方を見ると水平線に1隻の船が見えた。

「ありや何だ？」

シヤンクスは近くに倒れていた水夫から望遠鏡を手に入れると、それで水平線に現れた船を見た。すると、シヤンクスは驚きの声をあげた。

「あ、あのマークは！」

シヤンクスは慌ててまだ戦っているロジャーを見ると叫んだ！

「ロジャー船長！大変だ！」

「なあんだ！シヤンクス！俺は今忙しいんだ！」

ジョーンズの斬撃を避けながら一撃をくらわしたが……右腕を引つ張られて戦いづらそうだった。

「世界政府の船だ！俺達に砲撃してきてる！」

「なんだと？」

ロジャーと戦っていたジョーンズは、カトラスを振り下ろす手を止めるとシヤンクスの方を見た。ロジャーはこの時とばかりにジョーンズを蹴り飛ばした！

「グオッ！」

またもやジョーンズは積荷がある所に突っ込むと土埃をあげた。ロジャーはシヤンクスから望遠鏡を受け取ると覗き込みこう言った。

「ケッ……いい所なのによオ！政府の連中は漁夫の利を手に入れたいつて訳か……！」

「船長…漁夫の利って？」

「連中は俺とジョーンズが殺しあつてる間にそれに乗じて俺とジョーンズを捕まえるつもりなんだよ…！」

「忌々しそうにロジャーは顔を顰めた。ジョーンズは瓦礫の中から立ち上がると叫んだ！」

「野郎共！もう戦いは終わりだ！ダッチマンに戻れ！」

「何だつて？」

「うん？」

ロウはレイリーの刀を溶かしながらジョーンズの言葉に耳を傾けた。

「チツ…しようがねえ…。船長命令だ…！おい！スカル！引き上げるぞ！」

「うん！了解！」

「逃がさんぞ！」

レイリーは追いかけてようと向かってきたが、スカルはすかさず発砲した！

「白弾装填！モクモク弾！」

「うおっ！」

レイリー近くに着弾すると濃い煙が発生し、目の前が見えなくなった。

「取り逃したか…！」

レイリーは刃半ばで溶けた刀を見ながらそう呟くのだった。

ジョーンズの近くにロウやスカル達が集まってくるとジョーンズは言った。

「野郎共！潜航準備だ！海底に向かうぞ！」

「了解！」

「ああ！了解だ」

ジョーンズはロジャーを見ると言った。

「誠に残念だが……ロジャー……。興ざめてしまった」

「へっ！逃げんのか？」

「逃げるのじゃない……。次はもっと存分に殺れる所でやろうじゃないか！」

ジョーンズがそう言うのと甲板がドドドド……と地響きの様な音を立て海の中へと潜り始めた！すると、ジョーンズは思い出したようにこう言った。

「そうだ！シャンクス君！」

「……！」

「今回だけは特別に船を降りる事を許可してやろう！だが、忘れるなよ？お前は俺に貸しをつくったんだからな？何処へ逃げても探し出すぞ！貸しはいつか返してもらうからな？」

ジョーンズは不気味にそう言うときびすを返して船の中へと入っていった

!

シャンクス達は腰の高さまで海水に浸かり始めた!

「ロジャー船長!」

「ああ! わかつてる! レイリー!」

「これに掴まれ!」

レイリーはロジャー達に向けてロープを投げると、ロジャーはそれに掴まった。そして、シャンクスに手を伸ばすところいった。

「おら! 帰んぞ! シャンクス! 俺らの船にな!」

「うん!」

シャンクスはロジャーの腕を掴み、船へと引き上げられた。

シャンクスが立ち上がろうとするとバギーが向かってきた!

「シャンクスウウウ! テメエエエ!」

「おー! 無事だったか! バギー!」

「何が無事だアアア!?!」

バギーとシャンクスが追いかけてこを始める頃…。レイリーはロジャーと話し合っていた。

「おい…ロジャー」

「なんだ？レイリー？」

「今回の戦闘でだいぶ船が傷ついたし、これからも色々あるだろう…。だからな？ロジャー？」

「ん？」

「どうだ？ここらで船を新しくするってのは？」

「おー！そりゃあ！いいじゃねえか！」

「ここの近くにあるW7に腕のいい船大工がいるらしい」

「へー！そいつの名は？」

「トムって奴だ」

「よし！野郎共！W7に向かうぞ！」

『オオオオ！』

ロジャー達はW7へと向かうのだった。

ダッチマンの船長室では、ロジャーがロウ達と話し合っていた。

「今回の戦闘で学んだ事はやっぱり人数が足りんな。マッカス達だけでは…」

「そうだな？俺達だけじゃやっぱり足りねえな」

「それに今回の戦闘で砲弾や弾薬が無くなったよ…。海軍大将と戦ったのが響いてる

ね」

ルチアーノは羊皮紙に書かれた表を見ると肩をすくめながらそう言った。

「俺らは世界政府から指名手配されてるからなあ？それにアンジェリカとルークもいる…。下手に加盟国に港で補給はできん…」

ジョーンズは思案顔になりながらそう言った

「あれ？そう言えば…アンジェリカ達は？」

ルチアーノがそう言うのとジョーンズはクロゼットを指さした。ルチアーノがクロゼットを開けるとアンジェリカとルークが寝ていた。

「隠れさせたんだ…」

「ああ…。下手に甲板に出られても困るしな？」

ジョーンズは海図に視線を落とすとこう言った。

「非加盟国で補給するか…」

「なら！ここに行こうぜ！」

「ほう…。北の海か…」

「ここは俺の生まれ故郷だ！ここには造船所もあるからよ！修理もできるぜ！」

「ふむ、ならそこに向かうか」

ダッチマンは海底をゆつくりと進むのだった。

墮ちた天竜人

ゴゴゴゴゴゴという地響きの様な音とともにフライング・ダッチマン号は浮上した。

「ふい〜！まさかこんな簡単に北の海に来れるなんてな！さすがは幽霊船だ！」

ロウは背伸びしながらそう言った。ジョーンズは腕の無い袖をぶらぶらと揺らしながらこう言った。

「あの島では補給と人員を募集をしようと思う。世界政府非加盟国だ：世界政府に恨みのある奴もいるだろう」

「ああ！あの国は世界政府に恨みを持つ奴しかいねえぜ？船長？あつこの連中なら裏切る心配もねえさ！」

「そうか…」

ジョーンズは遠い目をしながらマツカスにこう命令した。

「マツカス！島の裏側に船を停泊させろ！」

「了解しました：船長」

マツカスは舵を操作しダッチマンを島へと向かわせるのだった。

「ハア……ハア……」

暗い路地裏で2人の少年は身を寄せ合い隠れていた。

「こ……怖いよ……。兄上……」

「我慢するんだえ……！ロシイ！ 母上にこのパンを絶対に、持つて帰るんだえ！」

グラサンをつけた少年はゴミの影に隠れながらこう思った。

（全て……全てあの男が悪いんだえ！あの男が聖地から降りたりしなければ……！こんな事にはならなかったんだえ！）

何者かが走ってくる足音とともに兄弟はゴミの山へさつと身を隠した。

「何処に行ったー！」

「探せー！近くに隠れてるぞおー！」

怒声ともに騒がしくなる本通りを見ながら兄弟はまた息を潜めるのだった。

世界政府非加盟国くキール王国く

くグダニスク造船所く

偉大なる航路に近いこの国は北の海ノースシーなのにも関わらず、比較的温暖な気候の島だっ

た。

造船所の中だというのに不気味に静まり返っており、たまに風で揺れるクレーンの鎖

の音だけが造船所の中で響いていた。

その造船所のある建物の一室でジョーンズ達は話し合っていた。

「無茶な事言ってるつもりは無いんだがなあ……？ヨハン君？」

蠟燭の光がチロチロと揺れると不気味にジョーンズの顔を浮かび上がらせた。ジョーンズの目の前にはヨハンと呼ばれた目の下にクマのある髭面の男は眉間に皺を寄せるとジョーンズを見た。

「だあーれもお？俺が持つてる3隻の船を完璧に直せとは言っていない。直せる分だけ直してくれと言っているだけだ。それにちゃんとそれに見合った報酬は渡すしなあ？悪い話ではないと思うぞ？」

「その通りだぜ！ヨハン？俺とお前の仲だろう？船の修理ぐらいしてくれてもいいよなあ？」

ロウも目の前に座るヨハンに顔を近づけるとそう言った。ヨハンは値踏みをするようにジョーンズ達を見ながらこう言った。

「確かにロウ……あんたが世界政府捕まったと聞いてたのに、こうして会いに来たのは心底ビックリしてるだなあ……だがな？」

ヨハンは葉巻をふかしながらニヤリと笑いこう言った。

「今は材料も足りんし、人員も足りん。非加盟国にはいい資材は手に入らんでよお……」

「少しだけなら直せるだろ？ヨハン？お前…俺が海賊になる時船を作ってくれたじゃねえかよオ？」

「あれは難破した船を修復しただけ…スクラップになった船の1部も使つてだなも？あの時はまだ資材に人材があつたやつだなも…。今はそれもないんだなも…」

ヨハンはわざと表情を暗くするとそう言った。ジョーンズは黙つて見つめると椅子から立ち上がりこう言った。

(欲かきめ…このタヌキが)

「ふむ…いいだろう。行くぞ、ロウ」

渋々…ロウは立ち上がると造船所を後にした。船へと戻る最中…ロウはジョーンズを見てこう言った。

「どうするんだ？船長？このままじゃあ修理もできねえぞ？」

「材料や人材が足りんだけだろう？」

「そう言つてたな…」

ジョーンズは立ち止まると振り返り、ニヤリと笑いながらこう言った。

「簡単な事だ…。俺達は海賊…。無いのなら…奪えばいいのさー！」

「ククク…。アンタのそういうところ嫌いじゃねえぜ？」

ジョーンズがそう言うのとロウもニイッと笑いながら後に続くのだった。

それから…2日後

キール王国周辺では消息を絶つ、奴隷船や商船が後を絶たなくなっていた。ある奴隷船も襲撃を受けていた。

『うぎゃあああああ！』

甲板上では吊るされた船員達が叫び声をあげていた。

「なんでだ！あの野郎はいつもなら偉大なる航路にいるはずだ！なんでだ？なんで！こんな北の海の辺境なんかにいやがるんだ！」

奴隷商人は恐れ戦きながらそう言った。旗を見るとほかの船員達も口々に叫んだ。

「ヒイイイ！噂と同じだア！」

「タコ海賊旗！悪霊だああ！」

そんな悲鳴の中…ロウは奴隷船に乗り込んでくると言った。

「俺らの船長はこの船をこそ所望だ！奴隷も船も！俺らが頂く！」

ロウがそう言うのと奴隷商人はこう言った。

「わ…わかった！船は大人しく明け渡す！だから、命だけは！命だけは助けてくれ！」

「おお！物分りが良くて助かるね！だがア…残念ながら、生き残れるのはお前らのうち

「……たった一人だけだ」

「そ、そんな！ア、ア、ア、ア、ア！」

ロウは奴隷商人に顔を鷲掴むと顔をどろどろに溶かした！もがき苦しむ奴隷商人を見ながら、ロウは歯をむき出しにして笑うとこう言った。

「さあ、誰を生かそうか？」

一方、アン女王の船長室ではジョーンズがルチアーノと話し合っていた。

「今回で何隻目だ？ルチアーノ？」

「6隻目だね……資材に人員は十分だよ」

「奴隷船は世界政府から公式の許可を貰ってないからな？お陰様で襲いやすいことこの上ない！」

「そうだね！船長！」

「それよりも……ルチアーノ？エンデヴァーから手に入れた暗号書類は解けたのか？」

ジョーンズの言葉にルチアーノは顔を顰めるとこう言った。

「半分は解読出来ただけだね……。古代文字で書かれてるのに、あんな暗号文にするほどの重要な書類だって事は分かってきたってとこだね」

ルチアーノは黒い髪をガシガシとかきながらそう言うのとジョーンズを見た。

「そりゃあ……世界政府の秘密書類だ……。簡単には解けんさ」

ジョーンズがワインをラップ飲みしているとロウが入ってきた。

「こつちは終わったぜえ？ 船長？」

「ご苦労…ロウ」

ジョーンズはロウにそう言うのと立ち上がりこう言った。

「よし、もう島に戻るぞ！」

「了解！」

ロウは笑うと船室から出ていくのだった……。

—————

ヨハンは高台に登り、そこから港を見下ろすと目を疑った。

「な…なんだなも…あれは！」

今…まさに港に入港しようとするアン女王を先頭に6隻の船が曳航されているだった。

「あれだけあれば…足りるだろう？ ヨハン君？」

ジョーンズは後ろから現れると不気味な声色でそう言った。ヨハンはビクツと体を震わせると、恐る恐る振り返った。

「6隻もあれば…材料も有り余るだろう？ 人材は奴隷を貸してやろう」

「ヒッ！」

ヨハンは悲鳴を上げるとヘタリと座り込んだ。

「もう断れんぞ？ヨハンくん？お前の言う通り必要な物は揃えてやった！できないと言うのは不可能だからなあ？」

ジョーンズは詰め寄るとさらにこう言った。

「失敗する事も許さん。ここままでしてやったのだ……！失敗しましたなどと言う戯言は許さんぞ？お前はこの俺と約束したのだからなあ？お前言った！材料と人材がないとな……！約束通りにしたんだ。やって貰おうか？」

「わ……わかりましたなあも！絶対にやりどげるだもおお！」

ヨハンは慌てて立ち上がると叫び声を上げながら走り出した。

ジョーンズは念を押すようにさらにこう言った。

「何処へ逃げても無駄だぞ？約束は必ず守ってもらうからなあ！」

ヨハンは造船所へと慌てて逃げ帰るのだった。

「さて、次は乗組員を探すか……」

ジョーンズは歩きながらパイプをふかすとそう言った。

「おっと！この姿はまずいな……『擬態変化』！」

すると、姿がいつものタコ船長からそこらにいるモブのような顔つきへと変わった。

「これでいいだろう……」

ジョーンズはそう言うのと路地裏へと入っていった……。暫く進むと何者かが後を追ってきたが、無視してジョーンズはブラブラと歩き出す。

暫く歩くと……後ろからジョーンズにめがけて鉄パイプが振り下ろされた！サツと避けるとそこにはサンングラスをかけた金色の髪の子供がいた。

「何の用だ？小僧お？」

「金目の物か食べ物をよくせだえ！」

「ほう？食べ物か？食べ物が欲しいのか？」

値踏みする様な視線を目の前にいる子供に向けるとジョーンズはせせら笑った。しかし、子供はその視線に物怖じもせずこう言った。

「そうだえ！」

「そうか……。食べ物か……今の俺は何も持っていないぞ？」

ポケットの中地を出しながらそう言った。しかし、子供は食い下がろうとせずこう言った。

「嘘だえ！お前の身なりからして外の人間だろ！なんか持つてるに違いないえ！」

その子供は鉄パイプを構えながら、恐る恐るジョーンズに近づくと物色し始めた。

「何も持っていないぞ？物は全部船の中だ」

ジョーンズはおどけたようにそう言う。子供は言った。

「なら、俺をその船に案内するんだえ！お前は人質にするえ！」

グラサンをつけた子供がそう叫ぶと物陰から慌ててもう一人の子供が現れた。

「兄上！よそうだえ！」

「何言ってるんだえ！こいつを人質にすれば必ず何か手に入れられるはずだえ！」

2人はいい争いをし始めたがジョーンズはニヤリと笑いながらわざとらしく両手を上げるとこう言った。

「別に構わんど？人質にするんならすればいい……」

「おかしな奴だえ！早く船へ連れていくんだえ！」

鉄パイプを向けながら子供はそう言った。ジョーンズは肩を竦めるところこう言った。

「喧嘩なんぞするなよ……俺の船へ行きたいんだろ？なら、連れてつてやる」

ジョーンズはニヤニヤと嫌らしく笑いながら歩き始めた。

「ま……待つんだえ！」

サングラスの子供はジョーンズの後を追いかけるのだった……

寂れた港の中を歩くジョーンズ……。鉄パイプで背中を押されながら歩みを進めてい

た。

「まだ着かないのかえ！」

「もうすぐだ…そこを左に曲がればそこに停泊している」

ジョーンズはニヤツと笑うとそう言った。

「兄上…やっぱり止めようよ…。何かおかしいよ」

気弱そうにビクビクしながらもう一人の子はそう言った。

「大丈夫だえ！こつちには人質がいるんだえ！下手に手を出したりはしないえ！」

ジョーンズを鉄パイプでつつくとそう言った。

「なんで…港町なのに誰もいないの？さっきから誰ともすれ違っていないえ…！」

その言葉にサングラスの子供は辺りを見渡した。

確かにおかしい…。いつもならゴミ山を漁る連中がいるのに今は誰もおらずガラ
ンンとしてゐる。

キョロキョロと不安げに見ていると目の前にいたはずのジョーンズが居なくなつて
いるのに気づいた！

「あつ！いなくなつたえ！追いかけるえ！ロシイ！」

「ま…待つてよ！兄上！」

慌てて子供達は走り出して曲がり角を曲がると…そこには！

血のように赤い船が停泊していた！

子供の一人が船へと近づくとある事に気づいた！

「あ…兄上！あ…！あれ！」

「どうしたんだえ！ロシイ！」

「船の手すりが…！」

サングラスの子供が船をよく見ると、船の装飾に使われているのが人間の骨だという事に！

2人は恐怖のあまり後退りを始めると後ろから誰かに肩を掴まれた！

「ひっ！」

気弱そうな子が小さく悲鳴を漏らすと、恐る恐る後ろを見た。そこには先程まで人質にしていた男が立っていた。男は何も喋らずまるで人形のように2人の顔を見ると言った。

「何処に行くんだ？俺の船へ用があるんだろ？」

恐怖のあまり2人は声を出せずにいると男はこう言った。

「ドフラミンゴ君にロシナンテ君？食べ物欲しいんだろ？」

2人は名前を呼ばれた事にびっくりしていると、男は嘲笑うかのようにこう言った。

「何だ？そんな鳩が豆鉄砲喰らったような顔をして？」

「なんで……！お前！我らの名前を知ってるんだえ！」

ドフラミンゴが恐れずにそういうとジョーンズは高笑いをしながらこう言った。

「又ハッ！ハハハ！なんで知ってるのかだと……？」

ジョーンズは2人の肩をギュツとつかみながらこう言った。

「俺はこの海で起きることは何でも知ってる！何故かって？それはなあ……？」

そう言うとジョーンズの顔が普通の顔からどんどんいつものタコの顔へと変貌していった。あまりのことに2人はあんぐりと口を開けながら呆然としてみると、ジョーンズはドフラミンゴの顔にタコの触手を纏わりつかせるとこう言った。

「俺が『海の悪霊』だからだ！」

ジョーンズは嬉しそうに顔の触手をばたつかせるとドフラミンゴの顔を見てこう言った。

「さあ、歓迎するぞお？ドンキホーテ兄弟よ……！悪名高き我が船……！アン女王の復讐号へ！」

ビッグニュース!

燭台にある蝋燭がチロチロと揺れる…。

アン女王の復讐号の船長室へと連れてこられたドンキホーテ兄弟は椅子に座らされた。彼らの目の前には机があり、真ん中にジョーンズが椅子に、その横にはロウとブラックスカルが立っていた。

「どうだ?この船はいい船だろう?」

ジョーンズはニヤつくと、わざとらしく手を広げてドフラミンゴにそう言った。ドフラミンゴは黙ったままジョーンズの顔を睨みつけていた。

「船長…こいつらは一体何なんだ?この島のやつにしてはエラくお高くとまってる」

ロウはドフラミンゴとロシナンテの顔を値踏みする様に見るとそう言った。ジョーンズはニヤつきながらこう言った。

「こいつらな?ロウ?下界に降りてきた連中だ…。普段はあの聖地にしかないはずのな!」

ジョーンズがそう言うと、スカルは仮面の奥の目を大きく開きながらこう言った。

「まさか……天竜人？」

「ああ……。その通りだ」

ジョーンズは椅子にもたれかかると愉快そうに目を細めてそう言った。ドフラミンゴは怒りに身を震わせながら俯いていた。さらにジョーンズはこう続けた。

「こいつらの父親は天竜人の地位や権限を全て捨てて……普通の人間になろうとしたんだよ……。だが……悲しいがなあ……世の中はそう甘くはない！天竜人や世界政府がこの世にどれだけの事をしているのか……それによって……どれだけの人間や島が消えていったのか……わかっちゃア……いないんだア……」

ジョーンズはそう言う ترام酒を煽り、乱暴に瓶を机に叩きつけるとびびったコラソンは小さく悲鳴をあげた。ジョーンズの話聞いていたドフラミンゴはついに我慢出来なくなつたのかこう漏らした。

「うるさいえ……」

「ん？何か言ったか？小僧？」

俯いて震えているドフラミンゴに対し、ジョーンズは馬鹿したように身を乗り出しながらそう言った。すると、ドフラミンゴは顔を上げるとジョーンズを睨みつけ叫んだ！「うるさいと言つたんだえ！我らは選ばれた者だえ！お前ら人間とは違うのだえ！我らこそ神と同じなのだえ！お前ら人間とは違うのだえ！」

「ふふふ……くっ！ハハハハ！」

ドフラミンゴの啖呵にジョーンズは腹を抱えて笑い出した。

「自分……達が！選ばれた者だど!? お前らが神と同じ? 人間ではない? ナハハハハハ! 最高に笑える冗談だ！」

不気味に大声を出しながらジョーンズは笑っていたが……。急に笑うのをやめると、左腕のカニ爪でドフラミンゴの首に掴みかかった!

「ぐ……え……！」

ドフラミンゴは呻き声をあげながら、カニ爪をはずそうともがいたが……。悲しい事にカニ爪が外れる事はなく……ジョーンズは嗜虐的に笑いながら苦しむ様子を眺めていた。

「ぐう……え……かつ……はっ……ん……！」

口元に白い泡が出始め……。徐々に動きが弱くなっていくドフラミンゴを眺めながら、ジョーンズはまるで音楽でも聴いているかの様に目を閉じて顔を指揮棒のように揺らしながらこう言った。

「ん……。いい呻き声だ……。流石は選ばれた者だなあ? 呻き声がまるでオペラを聞いているようだ……。いい心地だ」

少しジョーンズはカニ爪の力を緩めた。

「カハッ! ケボッ! ゴホッ!」

やっと息を吸えたドフラミンゴは咳き込みながらもジョーンズを睨みつけた。

「どうだ？小僧？首を絞められた後の新鮮な空気を吸う気分は？生き返る様な気分だろう？どうだ？それでもお前は俺ら…人間とは違うのかな？」

ジョーンズはドフラミンゴを見つめながらそう言う。

「お…お前ら…人間とは…ち…がうえ…！」

「何が違うと言いきれる？お前ら…天竜人と俺らとで？その皮の中には血と臓物と糞が詰まってるんだろう？俺らと変わらんじやないか…。ただ…唯一俺らと天竜人の違う点の一つだけ…それは何をせずを得た権力だ！

権力があれば…お前らの様に見下す事も好き勝手に武力を使う事も出来るんだろう…！だがなあ？」

ドフラミンゴの顔をグイッと近づけるとジョーンズはこう言った。

「その身勝手で…奪われた者たちの怨念を見るがいい…」

ジョーンズは立ち上がると、ドフラミンゴの襟をしっかりと掴んだまま歩き出した。

「離せ！どこへ行く気だえ！」

「あ…兄上…！」

ロシナンテは怯えながらもドフラミンゴを目で追いながらそう言った。

「ロウ！その小僧も連れてこい！」

「了解だ」

ロウはそう言うのとロシナンテの襟を掴み、持ち上げた

「ひ…ヒイ…」

「大人しくしてろよ？根暗坊主？じゃねえとお前を溶かしちまうぞ？」

歯を剥き出しにしながら笑うとジョーンズの後を追うのだった。

—————

く 聖地・マリージョアく

パンゲア城にあるCP長官室…。ベケットは窓から景色を眺めながら、後ろのソファーに不機嫌そうに座るサラザールに向かってこう言った。

「何を不服そうにされておるのですかな？サラザール大将閣下…？」

ベケットはゆっくりと後ろを向くと自分のデスクに腰掛けた。サラザールはきつと睨みつけるところ言った。

「この私を聖地にまで呼びつけて話したい事とは何だ？ベケット長官？私は一刻でも早く海のゴミ共を掃除しに行きたいんだがなあ？」

サラザールは立ち上がるのとベケットに歩み寄った。しかし、ベケットは顔色一つ変えずに、引き出しから裝飾された小箱を取り出すと、蓋を開けてサラザールに向けた。

「この前の…海賊討伐任務ご苦労でした。これはそれに対する我ら政府からの褒章にな

ります」

スつと出された勲章を見つめながら、サラザールは冷たい笑みを浮かべながらこう言った。

「この前の討伐任務だと？ 護衛任務が失敗した私に対する嫌味のつもりか？ ベケット？」

「はて？ 何の事でしょう？ 私が頼んだのはトルトゥーガに集まる海賊共の討伐任務だけです？」

目が笑っていない笑みを浮かべるとベケットはそう言った。サラザールは笑みを浮かべたままこう返した。

「元から護衛任務はなかった様にするつもりの様だな？ ベケット？」

余程…あの小僧を悪霊に奪われたのが癪か？ まあ…いい。

それならば…こんな褒章など要らん…。ただ海のゴミを掃除しただけ…褒められるものではない」

サラザールは勲章をベケットに突き返すと部屋を出るために後ろを向いて歩き出した。しかし、後ろからベケットの声が響いた。

「この前の任務の際に…。我が船も多大な被害を受けたが…。奴はあの子を奪うのだけが目的ではなかったようだ…」

その言葉にサラザールはピタリと歩みを止めた。

「この私がエンデヴァー号に積み込み保管していた…。資料や宝…。更には盗聴電伝虫などに至るまで盗まれてしまった…」

ベケットは話しながら机を指でなぞるとこう続けた。

「奴の手にはどれも余る物…。アレらは我々…。世界政府が管理し、運用せねばならない…」

言い終えると背を向けているサラザールに向かつてこう言った。

「サラザール大將…。貴方は」古代兵器」という物を知っておいでですか?」

その言葉にサラザールは振り返るとベケットを睨みながらこう言った。

「古代兵器…。ウラヌス…。ポセイドン…。そして、”プルトン”…。ただ一つだけでもあれば…。世界の覇権を取れると言われるものだろうか?」

サラザールの言葉に、ベケットは指先を合わせながら上を見上げこういった。

「その通り…。古代兵器」という物は決して…。個人が持つてはいけない力…。それをどうやらやつは狙っているようです…」

「何だと?」

サラザールはベケットの言葉に1歩前に進むと顔を顰めながらこう言った。

「あのゴミが狙っているというのか!あの”古代兵器”を!」

「確証は得ていませんが……確かに狙っているのは確かでしょう……。事実……奴の船には「古代文字」を解読出来る者が居るようだ……」

奪われた物の中には、あの”歴史の本文”写しの一部があった……」

ベケットは椅子から立ち上がるとサラザールを見てこういった。

「サラザール大将……。貴方にはあの男……デイヴィー・ジョーンズを始末して頂きたい……。奴がもしも”古代兵器”を手にしたら、世界は破滅へと向かうでしょう……」

ベケットはそう言いながら、ある羊皮紙を取り出すとサラザールに向かつて歩き出した。

「サラザール大将にはその見返りとして……コレの情報をお譲りしましょう」

ベケットはいやらしい笑みを浮かべながら、その羊皮紙をサラザールに手渡した。

「これは何だ？」

サラザールは羊皮紙を見つめるとベケットはこう続けた。

「閣下の言っておられた”古代兵器”。それらを守る為に作られたとされる物の一つ……。最強の槍……その名は”ポセイドンの槍”……。この槍は海を自在に操り、支配する事が出来るという……。どうですか？ 閣下？ これがあれば……貴方の夢を叶えることが、出来ると思いませんか？」

サラザールはただ静かに羊皮紙を見つめるとボソツと呟いた。

「奴はどこに現れるかわからんぞ…それはどうする?」

「その心配には及びませんよ…。大将閣下…。マーサー君…あれを」

「はっ!こちらに…」

ベケットが合図をすると、マーサーが何処からとも無く現れサラザール達に布に包まれたあるものを取りだした。

「これは?」

「貴方が切り落とした奴の腕だ…。これを使ってビブルカードを作れば奴を追うことが出来るだろう…」

ベケットの言葉にサラザールはジョーンズの腕をガシッと掴むと笑いだした!

「フッフッフッフ…お前に死が迫っているぞ…!ジョーンズ!

次会った時がお前の首が飛ぶ時だ!フハハハ!

サラザールの笑い声がパンゲア城に響き渡るのだった。

—————

↳ ジョーンズ side ↳

ジョーンズ達が甲板に出ると港が何やら騒がしくなっていた。

「うん……？何の騒ぎだあ？マツカス！」

ジョーンズはドフラミンゴを掴みながら船縁に向かうとマツカスを呼んだ。

「アイ、船長オ……」

マツカスは返事をしながら人混みより現れると、ジョーンズを見上げた。

「何の騒ぎだ？甲板長？」

「何やら……船長に会わせろと騒ぐ野郎を捕まえたんでさあ……」

「何だと？そいつは海兵か？それともCPか？」

「いやあ……新聞屋と名乗ってます」

「新聞屋ア……？」

怪訝そうな表情を浮かべながらジョーンズは人だかりを見つめた……。そこには乗組員達に囲まれた一人の男が叫んでいた！

「私は決して怪しいものではない！世界経済新聞社のモルガンズという者だ！君達の船長と少し話をさせて欲しいだけだ！何も悪い事はしない！」

そう騒ぐモルガンズは肩にカモメを乗せながら写真を撮りつつそう言った。モルガンズを見た口ウはジョーンズにこう呟いた。

「あいつは世界経済新聞社社長のモルガンズだな……？聞いた事があるぜ！スクープの為に命をかける変わった野郎だ」

「ほお……記者つてことか? ロウ?」

「おお、その通りだ」

ジョーンズはにいつと笑うところ言った。

「いい事を思いついたぞ……おい! 野郎共! そいつを通してやれ!」

ジョーンズの言葉に乗組員達はゆつくりと道を明け始めた。モルガンズは目を輝かせながら言った。

「……おおお! 話題の”海の悪霊”に会えるとは! わざわざノース・ポル北の海の辺境まで来たか
いがあつた!」

興奮気味にタラップを慌てて駆け上がるとジョーンズ達の前に立った。そして、深々とお辞儀するところ言った。

「取材を受けて頂き誠にありがとうございます。Mr. ジョーンズ! 君は話題の星なのに誰もインタビュー出来なかった! 会ってくれて感謝する!」

モルガンズはそう言うところとジョーンズの前に手を差し出した。ジョーンズは少し固まった後……ゆつくりと握手をした。

「まずは聞きたい事が山ほどあるんだ! Mr. ジョーンズ! 大将灰蛇もとい……サラザール大将との戦いについてどうだったのかが知りたい! そして……!」

モルガンズはメモ帳を取り出しながら興奮気味にそう言ったが……ジョーンズはゆつ

くりとこう返した。

「そう慌てる事は無いだろう？モルガンズくうん？俺は何もインタビューを受けるとは一言も言っていないぞ？俺の所までは来ていいとだけしか言っていない…。よく喋る口だな？まるでキツツベツキだ」

「な…何を？」

詰め寄るジョーンズにモルガンズは冷や汗を流した。

すると、ジョーンズは何気も無しにモルガンズの肩にいたカモメを掴むとモルガンズに押し当てた！

「少し…お前の特徴通りの姿にしてやろうと思つてな？」
『Integration 一体化』

カモメは金切り声を上げながらモルガンズの体へと混ぜこまれ始めた！モルガンズはその様子を興奮しながらこう言った！

「これが”海の悪霊”の力！こ…これは！ビッグニュースだ！ハハハハハ！」
後にモルガンズはこう語る

『自分自身で体験した事こそがビッグニュースなのだ！』つと…。

瞬く間にモルガンズの体からは白い羽毛が生え始め、口には黄色の嘴が生えた。
「どうだ？少しはそのお喋りの特徴とおなじ様になれただろうか？」

ドフラミンゴ達は目の前に立っているモルガンズのあまりの変わりように目を見開

いた。先程までのモルガンズは、ただのシルクハットを被り、肩にカモメを乗せた不思議な男だった。しかし、今のモルガンズは人間大の大きさの鳥に変化していた!

モルガンズは息を切らしながらも興奮気味にこう言った。

「噂には聞いていた……悪霊の力! 私自身に使ってくれるとは! まさにビッグ・ニュース! こんな貴重な体験は他にはない! 鳥になれるとは思わなかった! Mr. ジョーンズ! 有難う! こんな素敵な事は他には無い!」

モルガンズはまたジョーンズに握手を求め、ジョーンズもそれに応じた。

「それをされて絶望しない奴は初めてだ……」

「とんでもない! 絶望どころか希望に満ち溢れているよ!」

握手した手をブンブンと振りながらモルガンズはそう言った。ジョーンズは少し笑いながらこう言った。

「先程のインタビューの件だが……受けないと言ったのは水に流そう……。その代わりに条件がある」

「ほ……本当か! 条件は何でも飲もう! 君のインタビューが出来るのなら!」

ジョーンズはモルガンズについてくるようにと、言うどドフラミンゴ達を引き摺りながら船倉へと降りていった。

薄暗い船倉の中には消毒液やら血の匂い……。ある所では叫び声が響き、中では元奴

隷達が忙しく怪我をした元奴隷をみていた。

「彼らは奴隷かい？ ジョーンズ？」

「ああ…その通りだ。モルガンズ…コイツらは俺が奴隷船を襲わなければ一生奴隷だったヤツらだ…」

ジョーンズ達はゆっくりと奥へ歩みを進め始めた。

「知ってるか？ モルガンズ？」

世界政府の連中が言う世界つてのは…。一部の連中の理想と汚え欲望で塗り固めた世界だ。そんな理想の中に入れねえ奴は物みてえに売買されるか…滅ぼされるしかねえ！」

ジョーンズの言葉に元奴隷達は黙ってジョーンズを見つめた。

「弱い連中は世界政府という大きな壁をどうすることも出来ねえ！」

ジョーンズは抱えていたドフラミンゴを暗い闇の中に投げた！

「うわー！」

ドフラミンゴはハンモックに受け止められると、そのまま床に落ちた。

「いつつ……」

おでこを摩りながら辺りを見渡すと、こちらを見る何者かの視線を感じた。

「だ…誰だえー！」

「あの化物に名前があるのかえ？他にも両手両足の無い男もいたえ！あ……」

興奮気味に喋っていたドフラミンゴは急に喋るのを止めた。何故なら、何やら体に巻きついてきているからだ。ドフラミンゴは勇気を振り絞ってそれを触ってみた。

それはひんやりとしていて……鱗が沢山並んでいた！

ドフラミンゴは慌てて立ち上がろうとするが立ち上がれない！

「どうしたの？坊や……もう少しお話ししましょ」

ゆっくりとドフラミンゴの体を絞める蛇の尻尾がドフラミンゴの横顔をつつとなぞる。

「美しいでしょ？私の……足は？前の足は……動かなかったから……ジョーンズ様くれたのよ」

ドフラミンゴはブルブルと震えていると、ジョーンズの声が響き渡って来た。

「目が欲しいか？新しい足が欲しいか？新しい腕が欲しいか？

こんな体にした連中が憎いか？この世に復讐がしたいか？

ならば、俺ともにこい……！復讐する力をくれてやる……！

その恨みを必ず晴らしてやる……！俺は一緒に来るものは一切拒まない！この不条理な世界に対して共に復讐しようじゃないか？」

ジョーンズの言葉に至る所から声が上がる！

ドフラミンゴはそんな中で意識を手放した…。

「なあんだ？失神しちゃったのか？」

ロウは横にコラソンを抱えながら現れた。ドフラミンゴの顔を覗き込むとにいつと笑う。

「兄上！兄上え！」

コラソンは涙や鼻水を止めどなく出しながら失神してるドフラミンゴを見て叫ぶ。そんなコラソンにロウはこう言う。

「うるせえぞ！何も死んじやいねえよ！気を失ってるだけだ！」

ロウはドフラミンゴに近づくと、巻きついていている女を見るとこう言った。

「ラミア！面倒をかけて済まなかったな！」

「いいわよ…。丁度…退屈してた所だったから…」

ラミアはドフラミンゴから離れるとロウを見て笑った。ロウはドフラミンゴを担ぎ上げるとこう言った。

「もし、他に足がねえ奴や腕のねえ奴が居るんなら…後で船長室に来るように言つてくれ…。今は客が来てるから後でな？」

ロウがそう言うとならミアは笑いながら頷き、暗い船内の奥へと去っていった。

「うっし、甲板に出るか」

ロウはドンキホーテ兄弟を抱えながら甲板上へと出ていくのだった。

「実にいい取材をさせてもらった！有難う！Mr. ジョーンズ！」

港で固い握手をジョーンズはモルガンズと交わした。

「取材の条件はちゃんと果たしてくれよ？」

「分かってるとも！これを同封すればいいんだらう？」

モルガンズは白い紙を取り出すとジョーンズに見せた。

「ああ…。それを入れてくれればいい」

「まさかこの白紙に…この様に水をかければ！」

モルガンズは白紙に小瓶からの水をかけると…みるみるうちに文字が浮き上がり始めた。

そこには船員募集と書かれており、この島の場所と日時が書かれていた。

「こんな文字が出るとは！今回の新聞はよく売れそうだよ！実にビッグニュース！」

「水が身近にある仕事と言えば、船乗りだからな？これをすれば、船員が集まりそうだな」

「確かに！これはビッグニュースになるぞ！」

モルガンズはにこりと笑うと会釈をしながらこういった。

「それでは、また取材をさせてくれ! Mr. ジョーンズ!」

「無論だ」

そうして、モルガンズは去っていった。

ロウはそれを待つてたかのようにジョーンズに近づいて言った

「なあ? 船長? こいつらどうする?」

「お灸を据えすぎたか? まあいい…。食料の詰まった鞆でも持たして家に帰らせろ。親が心配してるだろうしな? あとこの紙を同封してな」

ロウに何やら書かれた紙を渡すとジョーンズは船へと戻って行った。

—————

次の日

世界経済新聞に大きな見出しが載せられた!

『海の悪霊の真実! 市民の敵か? 味方か?』

『本誌独占スクープ! 悪霊に突撃インタビュー!』

『海の悪霊は弱きを助ける者?』

その新聞ともに手配書が3枚入っていた。

”海の悪霊” デイヴィー・ジョーンズ

8億8000万ペリ

”溶解” ジョン・ロウ

3億2000万ペリ

”黒面” ブラックスカル

5000万ペリ

そして、あの白紙…。

それは、各地にいる化物たちの目に止まったのだった。

—————

く???

ある街

ある男が一輪車に乗りながらあの紙を見つめる。

「キリキリ…。悪霊が船員募集してるようですねえ…」

男は白紙を見つめながらそう言った。

「とても楽しそうですねえ…私もこのパレードに入れてもらいましょうカ！」

男は楽しそうにジャグリングしながらそう言った。

またある島

ある男が暗い路地であの紙を見ていた。

「悪霊が…船員募集う〜? キーツ! シツシツシツシツシツ!」

男の周りにはコウモリのようなものが沢山羽ばたいていた。

「面白そうじゃねえか! キーツ! シツシツシツシツシツ!」

またある国

「ひよっほー! イイ波やー!」

男は波に乗りながらそう言った。そして、海水で濡れた紙を見つめるとこう言った。

「あの話題の男が船員募集しとるんかいな! こりや、おもしろそうやんけー!」

またある所では

雪が降り積る中…敵に囲まれながら男はこう言った。

「ブルツ! 寒い…。やはり冬島になんか来るんではなかったか…」

「何言つてやがんだ! てめえ!」

「早くやつちまおう!」

「死ねやあ!」

敵は男に斬りかかったが…! 男はゆっくりと剣を抜くと一閃した!

敵の血飛沫で男はずぶ濡れになるとあの紙を見つめる

「ほう…船員募集か…」

ある研究所

「まずい！試作品が盗まれたぞ！」

「誰かやつを止めろ！」

慌てる男達を他所に男女は笑った。

「俺の速さに着いてこれる訳ねえだろ！ビリリリリ！」

「そつちは違うって！そつち外じゃないって！」

男におぶられた女は方向指さしながらそう言う。

「んで、次何やるよ？もう盗みは飽きたぜ！」

「んなら、こんな面白そうなのがあったって！」

女は男の目の前にあの紙を見せる。

「へえ？海賊かあ？面白そうだな！いっちょやってみつか！」

「そうだねだつて！」

2人は笑いながら走り抜けるのだった。

ある森…。

「ふわあ…眠いの〜」

欠伸をしながら女の子はあの紙を見つめる。

「へえ〜面白そうなの〜？」

女の子はテディベアを持ちながらフラフラと立ち上がる。

ある建物

「もつと捻つていい?捻つていいよねえ?」

薄暗い一室で男は興奮しながら沢山の人間の首を捻り始めた。

「そうそう!もつと!もつともつと!捻じろうねえ!」

耐えきれなくなつた人間の首が捻じ切れた!

血飛沫を浴びながら男は悦に浸っていると、あの紙に文字が浮き上がる。男はそれを見たと嫌らしく笑うのだった。

ある屋敷

「とおりやんせくとおりやんせとここは何処の細道じゃあ。天神様の細道じゃあ」

花魁は歌いながら紙を見つめ、目の前の池に放つた。

池の水に触れ、また文字が浮きでる…。

花魁はそれを見て妖艶に笑う。

ある劇場

「これを見てくれ!ピエロ君!」

「なんだい?ライオン君?」

一人の男が操り人形を弄んでいた。

「悪霊が船員を募集してるんだってさ!」

「それは本当かい？ライオン君？」

『だったら、会いにいかなくちや！』

男はニヤリと笑う。

ある工場

「それで兄弟？」

「なんや兄弟？」

男二人は喋りながら、タンクの底にいる男達を見つめる

「今日の新聞読んだけ？」

「おう、見たぞ」

「この紙もか？」

「ん？なんやそれ」

男の一人は手からドロドロの液体をタンクの底にいる男達にかけ始めた。

「船員募集やとよ」

「ほうけ？次はこれやって見るべ」

「せやな」

男達は立ち去ろうと歩き出した。男の一人が煙草に火をつけると紙にも燃え移らせてタンクへと投げた。その瞬間！タンクから大きな炎が上がった！

少年は黙ってうなづいた。ジョーンズは椅子に戻るとゆっくりと座り、少年に目の前に座るように指図した。ジョーンズはパイプに火を灯すと、紫煙をたぐらせながらこう言った。

「それで？お前の名前はなんて言うんだ？小僧」

ジョーンズの言葉に少年は沈黙しつつもこう答えた

「ドラゴン…。モンキー・D・ドラゴン」

合成人間（ユニオン）

海軍本部くマリオン・フオードく

コングの居る部屋にはたくさんの海兵が出入りしていた。

「報告申し上げます！ ジョーンズによるインタビュー記事は本当かとの問い合わせが！」

「海軍が先に手を出した事が全ての発端になったと書かれております！」

世界経済新聞の記事を見せながら海軍将校は眉間にスジを立てる。

「おのれえ… ジョーンズ！ まさか新聞を使ってまで我々を攻撃するとは！」

センゴクは忌々しそうに世界経済新聞を投げ捨てる。

「最近では、奴隷解放の英雄だと言う声も上がってきております」

別の将校はセンゴクにそう言うのと、センゴクはさらに顔を顰める。コングは新聞を見ながら少し黙るところ言った。

「やつも考えたものだ…。新聞を使い、自らの影響力を強めるとは…。更には非加盟国に潜伏…通りで我々の警戒網に引っかからんわけだ」

「しかし、コングさん！ 奴はこんなものまで新聞と共にばら蒔いているんですよ！」

センゴクの手にはあの募集の紙が握られていた。

「ご丁寧に分分の居場所まで記すとは！これは我々に対する挑戦です！」

センゴクがそう言うとき、コングは瞑目しつともこう言う。

「それはわかっている」

「でしたら、今すぐにも討伐隊を！」

「それは出来ん」

「何故ですか！」

机に拳を叩きつけながらセンゴクは叫ぶ。それに対してコングはこう返す。

「やつの居るキール王国には……聖地から降りたドンキホーテ一家が住んでいる。元とは

いえ……天竜人がいる国だ……。下手には手を出せん」

「あの国に天竜人が……」

「やつはそれを知ってか知らずか……。ヤツは偶然にもドンキホーテ一家を人質に取っている状態なのだ」

少しセンゴクは俯いていたが、顔を上げるとこう言った。

「でしたら、コングさん。こういう作戦はどうでしょう？ドンキホーテ一家及びに民間人の保護作戦です」

センゴクの言葉にコングは少し沈黙するところ言った。

「元奴隷達は船長に感謝してもしきれねえだろな？ 船長のおかげで無くなった足や手が普通と違うとはいえ、出来たんだからよ」

酒瓶を煽りながらロウは笑うとそう言った。ジョーンズは机に足を置くとこう言った。

「ああ…。奪われたもんは返せねえが代わりものは用意出来る。それに…。連中を強くすればするほど…。世界政府の脅威になるよ」

ジョーンズの言葉にロウは眉間に手を置きながらこう言った。

「ああ…。アレだろ？ 身体全部をアンタに差し出したって言う連中だろ？」

「そのとおりだ！ ロウ！ アイツらに何が欲しいかと聞いたら…。なんて言ったと思う？ ハハ…。この世に復讐する力だよ！」

「それで…。連中はあんな姿って訳か」

「そうだ…。俺はアイツらを合成人間ユニオンと呼ぶ事にする！ アイツらは、この世の闇から生まれた化物共だ！」

楽しそうにジョーンズは机を叩きながらそう言った。ロウはグラスを口に運びながら、ジョーンズを見てこう言った。

「それで？ そいつは一体何なんだ？」

ロウは壁側に立つドラゴンを、見ると眉を顰めながらこう言った。

「船員募集を見たやつか？それにしちやあ…偉く若いのが来たな」

ジョーンズは後ろを振り向きながら、ドラゴンに向かってこう言う。

「おい！ドラゴン！ロウに自己紹介してやれ！」

ドラゴンは目深く被っていたフードをとると、ロウを見ながらこういった。

「俺の名は…モンキー・D・ドラゴン」

ロウはドラゴンの言葉を聞くと、睨みつけていたが…徐々に驚愕の表情を浮かべながらこう言う。

「モンキー…D…？ああ！てめえ…もしかして！あのガープのガキか！」

ロウの言葉にジョーンズは笑いながらこう返す。

「御明答だ！ロウ！コイツはあの英雄さまの息子だ！」

「あのガープにこんなガキが居るとは思わなかったぜ！」

ドラゴンは黙ったまま、ロウ達の話聞いていた。

「コイツは強いのかよ？船長」

「それについては心配するな。コイツは能力者だし、強さは俺が保証する」

ジョーンズはドラゴンを見るとそう言う。

「んじゃあ、別に俺は何もねえぜ？船長が決めた事には従うしな」

ジョーンズは椅子から立ち上がると、ドラゴンの目の前に立ちこう言った。

「ようこそ、ドラゴオン！我が悪名高きジョーンズ海賊団へ！お前の入団を歓迎しよう！」

「ありがとうございます」

ジョーンズは更にドラゴンに近づくと、顔の触手がドラゴンの顔を固定しながらこう言った。

「俺の船に乗るお前に一つだけ……忠告をしておこうと思う！いいか？よく聞けよ？”仲間の信頼を決して裏切るな”だ！それをもし破った場合は……お前をクラーケンの餌にするからな？覚えとけよ？」

ジョーンズの脅しとも取れる言葉を聞いてもドラゴンは顔色一つ変えずに立っていた。

「流石は英雄様の息子だな！顔色一つ変えやがらねえ！」

ロウは皮肉を言いながらグラスを飲み干した。ジョーンズは席に戻り座り直すところだった。

「ドラゴン！暫く俺らはここに居る！お前は少し島の周りを見回って来い！」
「わかった」

ドラゴンはお辞儀をすると部屋を出ていった。それを見たロウは口を開く。

「アイツ…まさか裏切ったりしねえよな？」

「どうだかな？もし、裏切るのなら容赦せんさ」

顔の触手をウネウネさせながらジョーンズはそう言った。

「それよりも…アンタの片腕はまだ治らねえのか？」

ロウはジョーンズの右腕を見ながらそう言う。

「タコは足が切れても再生はするが…何分時間がかかるのさ。今は代わりのものをつけるがな…」

ジョーンズは骨と化した右腕を見せながらそう言った。ロウはそれを見るとこう言った。

「まだ死神野郎との戦闘が尾を引くとは…。流石は海軍の最高戦力だな」

「ああ…。だから、俺達は力がある！政府共に負けない力がな！」

ジョーンズは興奮気味にそう言う。ロウはこう返した。

「それで？終わったら、この次は何処へ行くんだ？船長？」

「次は魚人島を目標そうかと思ってる。シャボンディ諸島を経由してな」

「お！魚人島か！楽しみだぜ！」

ジョーンズの言葉にロウは笑いながら酒を飲み干すのだった。

ノース・ブルー
北の海

キール王国沖合―400海里―

「もうすぐキール王国に着くが！警戒を怠るな！あの国はジョーンズがいる！」

『ハッ！』

センゴクは海兵達を鼓舞しながら、部下に命令していた。そこにボルサリーノが現れ、声をかけてきた。

「センゴクさん〜」

「なんだ？ボルサリーノ？」

「本当に逮捕しなくていいんですかい〜？」

ボルサリーノの言葉にセンゴクは難しい顔をしながらこう言った。

「ああ…。一応は民間人保護の作戦だから…。しかし、奴がこちらに手を出してくると、言うのなら話は別だ。徹底的にやれ」

「了解〜」

ボルサリーノは間延びした口調でそう言うのと去って行った。

その後ろ姿を見ながら、センゴクは出航時のことを思い出していた。

（なんでなんじゃあ！セングクさん！なんで奴を捕まえんのじゃあ！）

（落ち着け！サカズキ！今回は民間人保護が最優先だ！奴を捕まえるのだけが目的じゃない！）

（そんな事はどうでもええでしようが！ワシらは、正義の代紋を背負つとるんですけえ！なんでアイツの為にコソコソせにやならんですか！）

（無駄に兵を死なせない為だ！）

（そんなのただの言い訳じゃ！上はあんまりアイツと戦いとうないだけでしよう？あんな悪を放つておいて何が正義じゃ！）

（おい！待て！サカズキ！）

（セングクさん…アンタの船にはもう乗れませんけえ！代わりにボルサリーノ辺りを連れていきやあいいですけえ！）

その事を思い出しながら、セングクはこう呟く。

「言い訳か…」

その言葉にセングクは、苦々しい表情を浮かべながら海を眺める。

「セングク中將！」

「どうした！」

走ってきたコーミル中尉は慌てて敬礼をするところ言った。

「左舷に人魚らしき女性が何やらセンゴク中將に話があると……」
「なんだと？」

コーミルの指さした方向を見ると、たくさんの人だかりが出来ていた。

「どけー！」

人混みをかき分けてセンゴクは船縁に立つと……海から美しい歌声が響いてきた。

「私は、町の娘え……♪光る金貨は……むなしだけよ……♪？ 私の心を奪い去るのわ……♪
♪荒波をこえるう船乗りだけよ……♪？

私の心を奪い去るのわ …… 荒波こえるう船乗りだけよ…… ♪？

あなたは強い海の男……ああそうだとも 人魚が……歌う♪？

私の心を奪い去るのは……荒波こえる船乗りだけよ♪？

いつまでも美しい乙女達の心を奪うのは……♪？優しい心を持ち荒波こえる船乗りだけよ……♪？

人魚らしき女が歌い終わると、周りの野次馬達は黄色い声援を送った。

「聴いてくれてありがとう……船乗りの皆さん」

妖美に微笑みながら女は、海兵達に向かって手を振った。そして、女はセンゴクに気づくところ言った。

「あら……やっと出てきてくれたわね……貴方が一番この船で偉い人？」

女はセンゴクを指さすと首を傾げた。

「ああ！そうだ！何の用だ！」

「私は忠告を言いに来たのよ……。あの人からの言葉……直接伝えるわ」

女はそう言うのと、息を深く吸い込みこう言った。

「あの島に近づくな。近づけばどうなるか……分かつてるな？それに安心するといひ……俺らはあと数日しかあの島にはいない。前の様にはなりたくないだろう？なら、何もするな……！海軍……！」

その声は女のものとは、思えない海の底から響いてくるような声だった。センゴクはその声を聞くと、女を睨みつけて叫んだ！

「お前はジョーンズの部下か！」

センゴクの言葉に女は妖艶に微笑むと言った。

「あら？分からなかったの？もしかして……この寒い北の海ノース・ポールドに住む人魚だとも思ったの？おバカさんねえ……？フフフフフ！」

不気味笑い続ける女に対して、一人の海兵がライフルを構えた。

「あら？何もしてない私に銃を向けるの？それが貴方達の正義なのかしら？」

「コラ！刺激をするな！」

センゴクは銃を構える海兵に対して激を飛ばす……。女はそれを見てその海兵を見る

とこう言った。

「せっかく…あの人から自分を守る力を頂いたんですもの…。私の力…見せてあげる！」

女はそう叫ぶと、片手から海藻のロープ出して海兵のライフルを取り上げた！それを見たセンゴクは女にこう叫んだ！

「貴様！タダの人魚では無いな！」

「あら？今更気づいたの？貴方…？そうよ？私は人魚なんかじゃない！私はセイレーンのシルキー！ヒョウアザラシの合成人間よ！」

シルキーは鋭い牙がずらりと並んだ口でニヤリと笑った。センゴクはシルキーを睨みつけながらこう言う。

「合成人間だと…!?!」

苦々しい表情をしながらセンゴクは驚愕の声をあげる。

（まさかヤツは…！自在に動物系悪魔の実能力者を増やせるのか！しかも、能力の弱点である！海を克服した者達を！）

センゴクは戦慄しながらシルキーを見る。

（これは脅威だ！今の内にヤツを止めなければ！）

センゴクがそう考えていると、ボルサリーノが近づいてきてこう言った。

「ありやあく捕まえちまつてもういいでしょう？」

「止むを得ん！尋問をする為だ！許可する！」

「了解」

ボルサリーノは指を女に向けると、その指先が光を放ち始めた！

それを見たシルキーは慌てた様子で叫んだ！

「カルキノス！出てきて！」

シルキーの叫びがこだますると、ゴゴゴゴ：地響きのような音が響き始めた！それを聞いたセンゴクは辺りを見渡しながらこう言った。

「何だ！何が起ころうとしているんだ！」

揺れる軍艦の上で狼狽える海兵達を、他所に地響きはさらに強くなる。

「何をする気か知らんがくさせないよお」

ボルサリーノは飄々としながらも、シルキーに向けた指をさらに輝かせ発射した！

「きゃあ！」

光線がまっすぐシルキーに向かってきたが：突如それを遮るようして、海の中から巨大な蟹が出現した！

ドゴーン！

ボルサリーノの光線は、蟹の甲羅に当たると大爆発を起こしたが……！

蟹の甲羅には傷一つ無かった。それを見たボルサリーノは頬を掻きながらこう言った。

「おかしいねえ〜当たった筈なんだけどねえ〜」

突然大きな声が響いた！

「痛アアア！どこの誰じゃあああ！ワシの頭を爆破したヤツあ！」

暴れる巨蟹に向かってセルキーは叫んだ！

「カルキノス！私よ！セルキーよ！貴方を攻撃したやつはまだ後ろに居るわ！」

セルキーの言葉にカルキノスはゆっくりと後ろを向いた。それを見たセンゴクは驚愕の表情を浮かべる！

カルキノスの正面には、人と同じような顔があるではないか！

カルキノスの目が、ゆっくりとセンゴク達を捉えるところ言った。

「きさんらかあ！セルキーに呼ばれて出てきたら！攻撃しよつてからに！お前らくらわしたるぞー！」

カルキノスは大きなカニ爪を、カチカチと鳴らしながら威嚇を始めた！

「ダメよ！カルキノス！こつちから仕掛けちゃダメだつて…船長が言つてたでしょ？」

「しかしのう？頭あしばかれて黙つて引き下るのわ…いけんじやろうが！」

カルキノスがセルキーと会話しているのを見ながら、センゴクは歯を噛み締める。

（まさか……ヤツの海賊団がこれ程強化されているとは！最早我々の全戦力を使わなければ倒せないかもしれない！）

センゴクはそう胸に誓ったが……セルキーはカルキノスの頭に登ると、センゴクたちを見下しながらこう言った。

「あの島に行くのは諦めなさい？海軍……命が惜しいのならね？ここを通ろうとするのなら容赦はしないわ！キシャアア！」

「その通りじゃあ……ここは通さんけえ！チョツキン！チョツキン！チョツキンナア！」
カルキノスは大きな爪を天高く掲げながらそう言った。